

周防烟遺跡

長野県佐久市緊急発掘調査報告書

1980

佐久市教育委員会



序

佐久市教育委員会
教育長 浅沼 肇

周防畠遺跡の調査にあたって

長土呂周防畠遺跡調査は、昭和54年11月に実施された。当遺跡調査も他の調査と心ならずも競い合って調査員の担当役割について、また調査密度の保持について心胆を碎くところであった。長土呂一帯にわたっては、数多くの遺跡が複合し、その意味では無盡の宝庫でもあり、保存に対策の綿密性が要求される重要な地籍であろうと思われる。しかしこの地は、あらゆる意味で将来の市進展の多分な要素を持ち、従って開発の急速化に迫られている訳で、保存の立場からは危機に曝されていることは否み得ない。古代からまた中世にわたっても、遺構をもち、学術的には垂涎の地帯でもあろう。今次調査においては、時期は平安時代と推定されたが、かつて北近津、西近津等においても調査されたがいずれも長土呂地籍の貴重性について実証される結果が纏められている。ただ慌しい調査のなかで編年し、遺物を整理し、レポート化し、また学会にその内容を問い合わせ、行政は保護行政の責任を果したやに自己満足にひたっている。これだけでよいのかどうか自己反省の必要があろうと思う。破壊行為が、行政または学術の名において名文化されただけであったとしたら、その問われるものはあまりにも大きいと思う。調査結果をもって、後代に伝える意義は大きいが、現代において何を訴えようとするのか、訴えなければならないか、また活用されなければならないか。単に限られた専門家の間でその真価を問い合わせだけ、そして後代に伝えるだけで現代への示唆を忘れたら調査の意義はどのように価値づけられるのであろうか。報告書と言う文献がまた一冊追加されたにすぎない。これが生きた現代の教科書として、精神昂揚に資さしめるべきか、真剣に考え、活用を図るべきであろう。

自己満足に陥った時、その調査も学術も既に過去のものであり、再発掘されなければならないであろう。その調査予算と労力が報いられる現実的効用も、大衆と無縁であってはならないと、泌々と考えられる昨今である。

本調査の検出遺構住居址として、平安期のもの5軒、その他ピット状焼土、出土品として甕壺であるが、佐久市も厖大な遺物の集積の中で、土器屋となってはならないし、かっての壮大なドラマの台本とも言うべき遺物、遺構から明日の活力を生み出していかなくてはならないと思う。

本調査に対し佐久考古学会のご協力を衷心より感謝して、ご挨拶と御礼の言葉といたします。

序

佐久考古学会
会長 由井 茂也



周防畠は、佐久市岩村田の中心街から遠ざかった田園地帯であるが、開発は急速に郊外に伸びている。

周防畠と言う歴史的な由緒を示す地名は、この地下にも多くの遺跡を埋めていた。そして開発に伴う緊急発掘を行なわなければならなかった。たまたま佐久市に於ては、芝宮、蛇塚両遺跡の発掘調査と折り重なったため、事業主体佐久市土地開発公社は、佐久市教育委員会を通じて佐久考古学会に調査の依頼をしてきた。

佐久考古学会は、前記調査の関係から限られた会員に対し、非常に無理な責任の分担に頼って調査を実施することにした。

幸い、会員の献身的な協力によって、予定通りに発掘調査の完了を見た。尚、本調査に於ては地元参加者が会員と一体になり、研究し、文化財に対する関心と知識を高めることに努め、調査期間中の作業を通して、楽しい勉強が出来た。そして、今後も研究に参加したいと言う希望を持つ動機となったことは大きな意義があろう。

今回の調査範囲は、遺跡全域から見れば、その一隅に過ぎず、遺物も必ずしも多いとは言えないが、長土呂地区における研究の端緒を確かめ、今後の貴重な資料になるものと考えられる。

ここに、調査及び整理に当られた会員並に地元参加者の各位と、特に、佐久市土地開発公社の終始格別のご後援に預かったことを心から謝し序文とする。

昭和55年3月

例　　言

- 1, 本書は、昭和54年11月3日～22日までにわたって発掘調査された、長野県佐久市大字長土呂字南下北原に所在する周防畠遺跡の調査報告書である。
- 2, 本調査は、佐久市土地開発公社が佐久市教育委員会を通じて佐久考古学会に依頼し、会長由井茂也を発掘担当者とし、佐久考古学会有志を調査員として、地元長土呂地区の方々の協力を得て実施した。
- 3, 本書に挿入した、遺構・遺物の実測図作成は、木内 捷、島田恵子、三石延雄、由井 明、佐藤 敏、が行ない、トレスを島田恵子が担当した。尚、鉄器実測、トレスは土屋長久が行なった。
- 4, 本書に掲載した写真は、土屋長久が撮影したものを使用した。
- 5, 本書の執筆は、発掘および整理担当者が行ない、文末にそれぞれ文責を記した。
- 6, 本書の編集は、土屋長久、木内 捷、島田恵子が行ない、由井茂也がこれを校閲・監修した。
- 7, 本遺跡の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

なお、本遺跡調査に関して、佐久市土地開発公社、長野県教育委員会および地元の方々から御指導・御援助を賜わりここにお礼申し上げる。また、報告書作成に当っては、佐久考古学会員有志の方々が厳寒の中、自主的に奉仕され、ご尽力下さった努力のお陰により整理作業が進展したことを、併せて厚くお礼を申し上げ感謝の意としたい。

本文目次

序	佐久市教育長 浅沼 肇
序	佐久考古学会 由井 茂也
例　　言	
本文目次	
付表目次	
挿図目次	
図版目次	
I 発掘調査の経緯	1
1 調査に至る動機	1
2 調査の概要	1
3 発掘調査日誌	2
II 遺跡の環境	7
1 周防畠遺跡付近の自然環境（地形・地質）	7
2 歴史環境	8
1) 周辺遺跡	8
2) 遺跡周辺の歴史	11
III 層　　序	13
IV 遺構と遺物	14
1 住居址	14
1) H 1 号住居址	14
2) H 2 号住居址	17
3) H 3 号住居址	23
4) H 4 号住居址	28
5) H 5 号住居址	31
2 周防畠遺跡出土の鉄器	35
V 総　　括	36
第1節 周防畠遺跡の遺構・遺物	36

第2節 佐久平における土師器の概観	40
第3節 湯川流域の古墳群の一考察	54
第4節 佐久の官寺	64
1) 瓦の伝来	64
2) 佐久郡妙楽寺考	68
3) 布目瓦の発見地名	71

付 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	10
第2表 H 1号住居址出土土器一覧表	16
第3表 H 2号住居址出土土器一覧表	21
第4表 H 3号住居址出土土器一覧表	27
第5表 H 4号住居址出土土器一覧表	30
第6表 H 5号住居址出土土器一覧表	33
第7表 周防畠遺跡検出住居址一覧表	36
第8表 信濃佐久湯川流域古墳群一覧表	56

挿 図 目 次

第1図 周防畠遺跡周辺の地形と発掘区設定図	6
第2図 周辺遺跡分布図	9
第3図 周防畠遺跡層序模式図	13
第4図 H 1号住居址実測図	15
第5図 H 1号住居址出土遺物実測図	16
第6図 H 2号住居址実測図	18
第7図 H 2号住居址カマド実測図	19
第8図 H 2号住居址出土遺物実測図	20
第9図 H 3号住居址実測図	23

第10図	H 3号住居址カマド実測図	24
第11図	H 3号住居址出土遺物実測図1	25
第12図	H 3号住居址出土遺物実測図2	26
第13図	H 4号住居址実測図	28
第14図	H 4号住居址出土遺物実測図	29
第15図	H 5号住居址実測図	31
第16図	H 5号住居址出土遺物実測図	32
第17図	周防畠遺跡出土の鉄器	35
第18図	周防畠遺跡遺構全体図	37
第19図	佐久市岸野休石遺跡出土の須恵器大甕及四耳壺	38
第20図	佐久平遺跡出土の土師器に描かれた墨書	39
第21図	第I期後葉の土器（今井西原遺跡H 1号住居址）	41
第22図	第II期後葉の土器（A）（市道遺跡第2号住居址及び第3号竪穴状遺構出土）	43
第23図	第II期後葉の土器（B）（市道遺跡第3号竪穴状遺構出土）	44
第24図	第III期前葉の土器（市道遺跡第8号住居址）	45
第25図	第III期前葉の高坏	46
第26図	第III期中葉の土器（A）（市道遺跡第8号住居址出土）	46
第27図	第III期中葉の土器（B）（市道遺跡第4号住居址出土）	47
第28図	第III期把手付甕	48
第29図	第III期中葉の小形甕形土器	49
第30図	第III期中葉の坏形土器（市道遺跡）	50
第31図	第III期中葉の土師器群と伴出した須恵器	51
第32図	第V期中葉の土器（三塚鶴田H 1号住居址出土）	52
第33図	佐久地方出土飾り弓金具	58
第34図	佐久市岩村田北西久保古墳群	60
第35図	佐久市平賀後家山古墳出土の遺物	61
第36図	佐久市岸野火の雨塚出土の馬形埴輪	61
第37図	佐久市岸野休石遺跡出土の須恵器	63
第38図	周防畠遺跡第1層出土の布目瓦拓影	67

図版目次

- 図版一 1 周防畠遺跡遠景
2 周防畠遺跡の遺構全景
- 図版二 1 H 1号住居址
2 H 1号住居址の出土遺物
- 図版三 1 H 2号住居址
2 H 2号住居址カマド
- 図版四 1 H 2号住居址の出土遺物
- 図版五 1 H 2号住居址の遺物出土状態
- 図版六 1 H 3号住居址
2 H 3号住居址カマド
- 図版七 1 H 3号住居址の出土遺物（1）
- 図版八 1 H 3号住居址の出土遺物（2）
2 H 4号住居址
- 図版九 1 H 4号住居址の遺物出土状態
2 H 4号住居址の出土遺物
- 図版十 1 H 5号住居址とカマド
- 図版十一 1 H 5号住居址の出土遺物
- 図版十二 1 H 5号住居址の遺物出土状態
2 溝状遺構サブトレーンチ
- 図版十三 1 墨書き土器の文字及び糸痕
- 図版十四 1 周防畠遺跡出土の鉄器
2 周防畠遺跡調査団
- 図版十五 1 調査の鍬入れ式及びグリットスナップ[®]
- 図版十六 1 各住居址内の調査スナップ

I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機

周防畠遺跡群は、佐久市の西北方長土呂地籍に位置し、東方には浅間山麓より発する濁川の流域に属し、西方は小諸市和田から田切りをもって画され、西近津遺跡（46年調査）、及び北近津遺跡（47年調査），と至近な距離的関係にあり、後方は広茫たる平地林が続き、南方は長土呂部落の中心があり、また穀倉地帯であり、著名な遺跡である。

この地域は近来、工場団地及び住宅造成の開発が急速に進み、関係者一同憂慮する地籍であった。

本調査の契機は、佐久市土地開発公社が住宅造成事業を計画し、佐久市教育委員会へ周知の遺跡であるが、遺跡の確認及び確認された後の方法等について対策を依頼した。佐久市教育委員会は、昭和54年10月24日現地調査の結果、濃密なる土器片を採取し、古墳時代末期～平安時代にかけての遺跡が所存し、現状保存は到底無理な状態であると判断し、記録保存が必要である旨回答した。

佐久市土地開発公社は、直ちに佐久市教育委員会へ調査の依頼をしたが、佐久市教育委員会は折柄、芝宮遺跡（長土呂地籍）、及び蛇塚遺跡（伊勢林地籍）の調査中であり、また調査終了後は兵土山遺跡（香坂東地地籍）の確認調査を控えている状況から止むを得なく、佐久考古学会へ調査方を依頼してきた。

佐久考古学会は役員会を開き、調査体制について協議し、由井茂也会長を発掘調査担当者に決定し、昭和54年11月3日～11月30日までの日程で調査を行ない、記録保存する運びとなつた。

2 調査の概要

- 遺跡名 周防畠遺跡
- 所在地 長野県佐久市大字長土呂字南下北原998-1番地
- 発掘期間 昭和54年11月3日～11月30日
- 調査委託者 佐久市土地開発公社 理事長 神津武士
- 調査受託者 佐久市教育委員会 教育長 浅沼 馨

○調査受託者 佐久考古学会 会長 由井茂也

○調査団構成

團長 由井茂也

調査主任 土屋長久 調査副主任 島田恵子

事務局 木内 捷

調査員 白倉盛男, 三石延雄, 由井明, 佐藤敏, 花岡弘, 渡辺重義, 森泉好治,
武藤金, 森泉定勝, 井上行雄, 高村博文, 林幸彦。

調査補助員 鈴木栄子, 神津敦, 東城博, 大井今朝太, 小山岳夫

協力者 角田くら, 角田清子, 角田富雄, 金沢やすい, 金沢かつ子, 山口君子, 佐藤活
江, 山口牧子, 柳沢豊子, 大工原富美子 (以上地元協力者)

篠原浩江, 由井たまき, 小山ゆう子 (以上野沢南高郷土史同好会)

大井哲雄, 柳沢篤, 木南誠治 (以上岩村田高校社会班)

(事務局 木内 捷)

3 発掘調査日誌

○10月30日 (火) 晴れ

調査に先立ち, 木内事務局長, 島田調査員
立ち合いのもとに重機を入れて, 一面に散乱
する大根のくずと, 東端が桑畑であるために、
耕作土の削平と桑の抜根及び範囲の確認, 土
層調査を行なう。

○11月3日 (土) 晴れ

本日より調査開始。テント設置, 機材運搬
及びグリッド設定を行なう。東西にあ～ぬ,
南北に1～10(あ～けー1～5までの区間は
調査区外のため6～10までの45グリッドとな
る)の計185G(3×3m)を設定する。

尚, 11時より市教委塚田係長, 由井茂也團
長, 土屋主任を初め調査員の出席をもって,
神事を行なう。

午後からは, い, うー9グリッドの掘り下

げ作業を開始する。

○11月4日 (日) 晴れ

昨日に引き続き, い・うー6・7, え・お・
か・きー7列とうーくー9列のグリッド掘り
下げ作業を4班に別れて行なう。

いーきー6・7グリッド内は, ピット群ら
しき落込みが検出されたが, 本日の状態では
正確なところはとらえられない。また, えー
きー9列グリッドにおいて, 重複した住居址
とおもわれる落込みが確認された。さらに,
おー9グリッド内より布目瓦2片が出土した。
本日のグリッド掘り下げ作業により, 須恵器
小片がかなり出土している。

○11月5日 (月) 晴れ

本日は2班に分れて, く～こー7列とく～
しー9列グリッドの掘り下げを行なう。

けー7に時代の新しい水路跡が確認された。この水路は東西に横断している。水路のつづきのこー7に住居址2棟の落込みが確認される。さらに、くー9にも横断している水路跡が認められ、やはり水路のつづきに住居址コーナーとおもわれる落込みが検出された。

また、さ・しー9グリッド内は耕作土削平の時点から、黒土色の落込みが表面より確認できていたが、より顕著になってきた。



○11月6日（火） 晴れ

本日は3班に分れて作業を進める。さ～そー7列とす～そー9列のグリッド掘り下げを行ない、ほぼ7・9列が終了する。これにより5棟の住居跡が確認された。さらに、すー1～4、そー1～3のグリッド掘り下げを行なう。

○11月7日（水） 晴れ

昨日に引き続き、すー5、そー4・5、つー1～4、とー5～10グリッドまで掘り下げる。

本日までの遺構検出作業により、ほぼ調査区の全容をつかむことができた。と～ぬグリッドまでは、桑畠および地形的に一段低くなっている、土層の調査等から遺構の存在は全

く認められなかつたため、廃土の集積を全面的に行なうこととする。

また、調査区の中心全面に見られた黒色土の落込みは、し・す・せ・そ列全体に亘って認められた。しかし、黒色土と漆黒との判別ができる、落込みの状態から観察して、遺構にともなわない、新しいものであり、プラン確認・性格の判明は時間的な面からして、断面観察を行なつてから打ち切ることに決論を出す。

また、つ列は少量の水が流れた痕跡が認められたが、ごく新しいものであろうとおもわれよう。

○11月8日（木） 晴れ

本日より住居址のプラン確認のため、え～さー6列とい～きー8列のグリッド掘り下げ拡張を始める

○11月9日（金） 晴れ

昨日に引き続き住居址のプランを明らかにするために、こ～しー5列、く～さー8列、お・かー10列のグリッド掘り下げを行なう。

その結果、け・こ・さー5・6グリッド内において住居跡の全貌が明らかになり、H1号住居址と命名する。さらに、け・こ・さー7・8グリッド内においても住居址プランが確認され、H2号住居址と命名。

○11月10（土） 晴れ

昨日のグリッド拡張で全貌が把握できなかつた、き・くー10グリッドを掘り下げる。やはり重複した住居跡であった。精査の結果、上面の土層観察にて新旧関係がはつきりつかめたので、H3号・H4号住居址と命名。

また、調査区中央の落込みを断面観察のため覆土の掘り下げを行なう。遺物の出土は皆無であった。

雨のため、11時30分で作業を中止とする。

○11月11日（日）朝の内雨の為作業中止。

○11月12日（月）晴れ

H 1 号住居址の覆土掘り下げを開始する。東西・南北の覆土断面図実測の間、H 2 号住居址の掘り下げに入る。

H 1 号住居址のカマド付近より、完形の須恵器壺（国分期）が出土し、初めて発掘に参加した地元の協力者たちは歓声を上げる。

また、いへおにかけての土塙群は、精査の結果、数年前までは桑畠であったため、桑の根による落込みと判明する。

○11月13日（火）晴れ

昨日に引き続き、H 1 ・ 2 号住居址の覆土掘り下げを行なう。

H 1 号址は、ほぼ全面床面まで達し、壁面を出す。

H 2 号址は、サブトレンチを設定し覆土堆積の状態を観察および実測する。その後、ほぼ床面まで掘り下げたが、まだ不充分と観察されたので、もう少し床面が下りそうとの見解から、慎重を期して明日サブトレンチを入れることにする。

さらに、プランの未確認であった、く～こー10グリッドの掘り下げ拡張を行なう。住居址が調査区外にまで延長するが、ギリギリでとどめて全貌を出さないまま覆土掘り下げを行なうことにして決定。H 5 号址と命名。

○11月14日（水）晴れ

● H 1 号址、カマドはほとんど破壊されている。床面清掃、ピット検出及び掘り下げ。平板実測を行なう。

● H 2 号址、サブトレンチを再度入れて床面までの落込みを調査する。結果20cm下が床であることが判明したので、再度床面まで掘り下げる。坏完形品が数点出土。また、壁高は60cmと深く、西壁の中間30cmの壁面より鉄製品の鉗（カナハシ）が出土する

午後3時30分より、H 3 号址へサブトレンチを入れ覆土掘り下げを開始する。

○11月15日（木）晴れ

● H 1 号址、清掃・写真撮影・エレベーション及びレベリングを行ないすべて完了。

● H 2 号址、壁面、床面清掃、ピット検出及び掘り下げ、カマド切開。

● H 3 号址、サブトレンチを残して床面まで掘り下げる。

午後3時より現場にて、近くの畑からとれた野菜をいただきて、おでんを作り、つまみながら中間報告会を行なう。



○11月16日（金）晴れ

● H 2 号、平板実測、遺物取り上げ、エレベ

ーションおよびレベリングを行なう。

● H 3 号, 覆土断面図実測。後サブトレーニチをはずす。

● H 4 号, サブトレーニチを設定し, 掘り下げを開始する。

○11月17日（土） 晴れのち曇り

本日より応接の調査員が7人程参加したので現場は一段と賑やかになる。

● H 2 号址, カマド実測, 清掃し写真撮影。

● H 3 号址, カマド切開および出土遺物取り上げのため実測。床面, 壁面の掘り下げ。

● H 4 号址, 覆土断面図実測。後サブトレーニチをはずす。

● H 5 号址, サブトレーニチを設定し, 覆土の掘り下げに入る。

○11月18日（日） 雨のため作業中止

○11月19日（月） 晴れ

● H 3 号址, カマド切開続行。床面精査, ピット検出および掘り下げ。

● H 4 号址, 壁, 床面精査, ピット検出および掘り下げをする。

さらに, H 3 号・4 号址の平板実測を始め

る。

● H 5 号址, 昨日に引き続き, 覆土掘り下げを行なうが, かなり深くて大きい住居址のため手間をとる。

○11月20日（火） 晴れ

● H 3 号・4 号址, 昨日に引き続き平板実測を行なう。その後, エレベーションおよびレベリングに入る。

● H 5 号址, 覆土断面図実測。後サブトレーニチをはずす。

また, 遺構全体図の実測を行なう。



○11月21日（水） 晴れのち曇り

本日より急激に寒くなる。冷たい風が吹き作業はきつかった。

● H 5 号址, 土塙・ピット・周溝・床面の精査・カマドセクション・平板実測・写真撮影を行ない全て完了。

杭ぬき, あとかたたずけ, 器材の撤去。

○11月22日（木） 曇り

テントの取りはずし, 残りの器材撤去を終了し, 現場作業完了とする。

○2月1～10日 遺構実測図整理及びトレス。

○2月20日～3月8日 遺物洗い及註記作業。

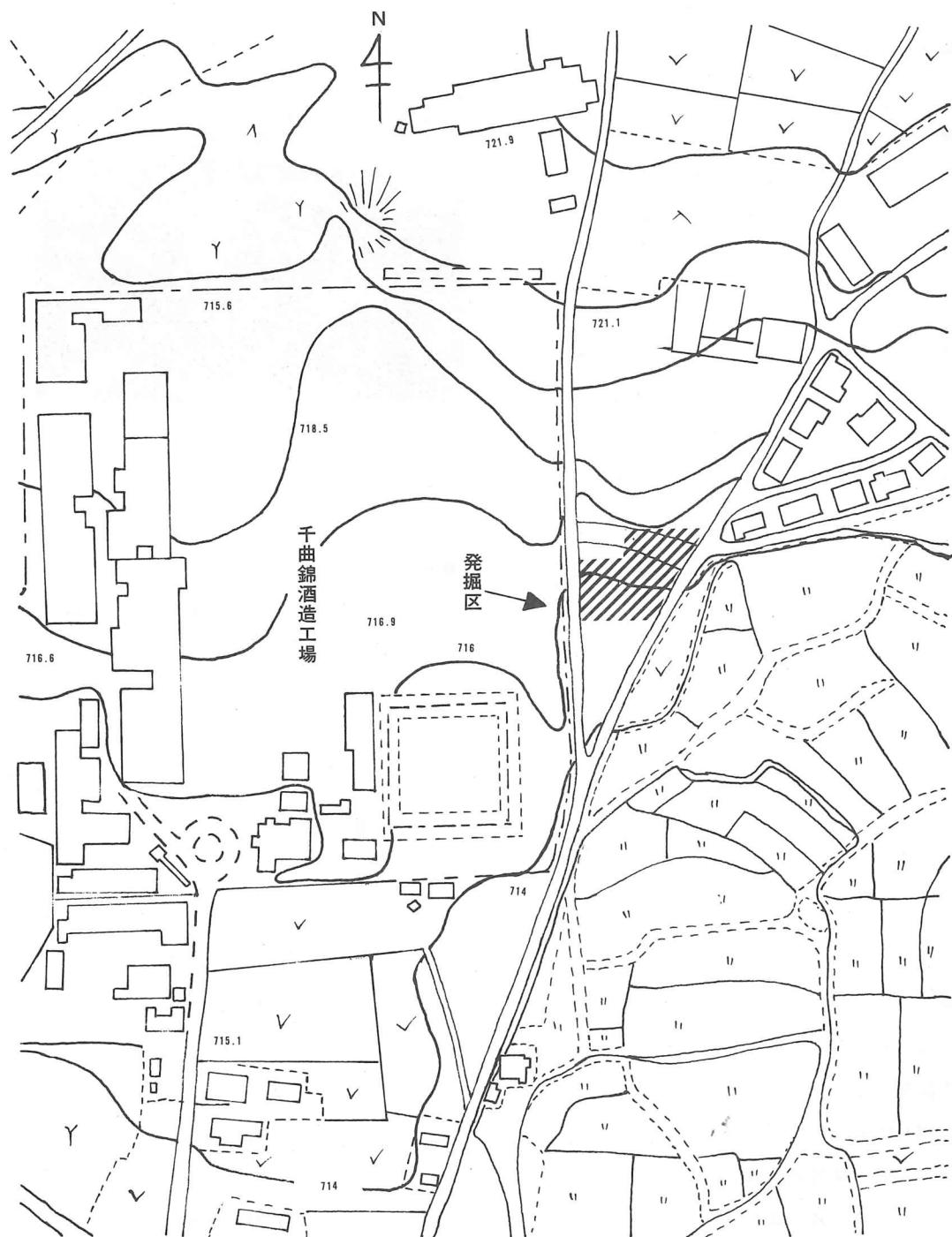
○3月10日～25日 遺物復原作業。

○3月25日～4月5日 遺物実測。

○4月7日～13日 遺物トレス, 出土遺物一覧表作成。

○4月14日～5月15日 原稿執筆, 総編集。

(由井茂也・島田恵子)



第1図 周防畠遺跡周辺の地形と発掘区設定図(1:2,500)

II 遺跡の環境

1) 周防畠遺跡付近の自然環境（地形地質）

千曲川が南北に貫流する流域に発達した佐久平は、北に向って逆三角形状を呈し、東は荒船火山や佐久山地（秩父古生層地帯）に、西は八ヶ岳立科火山帯、北は活火山浅間山に囲まれている。

今回発掘調査した周防畠はその佐久平の北端の浅間火山の南斜面末端部分に位置し、標高 719 m内外を示している。

浅間山は標高2542mの活火山で洪積期に入って活動を開始した最も新らしい火山で、最初は黒斑火山として大規模な火山として成生し、火口直径4kmの大火口をもった成層火山で、3000m近い山態を形成していたと考えられている。その後数個の爆烈火口の発達や、ほぼ南北に貫く大断層によって東半分が落ち込み、寄生火山の発生に伴って山体の東半分は破壊され、その部分に前掛火山が発生し、さらにその中に現噴火口が小規模に（火口 300m内外）になった三重式成層火山である。

浅間山南斜面には北軽井沢から発源する湯川と、寄生火山石尊山（1007m）北の血の池から発する濁川、小諸に流下する蛇堀川とがあるが周防畠附近には湯川の影響はほとんどなく、濁川の扇状堆積層分布地帯となっている。

周防畠（718.8m）はこの濁川と、小諸市と佐久市の境界に大きく発達した和田南大田切の谷の間に峠まれた小丘陵上に位置する。この濁川周辺と和田南田切は水便に恵まれ水田も古くから開発されているが丘陵中央部は多くは畠地となっており、最近まで山林地とさえなって残されていた部分も多かった。

この附近の地層は概観すれば浅間火山の噴出物の軽石、火山弾、火山砂礫、火山灰の堆積層であるが、和田田切りの断面等で見られる層序は次の如くである。

基盤には黒斑火山の水蒸気爆発による塚原泥流が分布している地帯であるが、この10数mの断崖ではそれを確認することはできない。おそらく更に深い所には見られる筈である。断崖に見られるものは黒斑火山軽石流の厚い堆積で、軽石を含む火山灰砂の堆積で、一部分水流に運ばれた軽石層の薄層を含む水中堆積層で、ほぼ水平層をなし10m以上の層厚を示している。

最上部は濁川の氾らん源のあとを示す火山砂を多量に含む火山灰層が40～50cmの厚さで重なりその表面上部を黒土が被っている。

周防畠発掘調査による断面では、耕作その他のによる攪乱層は場所により厚薄は認められるが、この最上部断面の状況を如実に示している。

白倉 盛男 (佐久市文化財審議委員)
元小諸火山博物館長

2 歴史環境

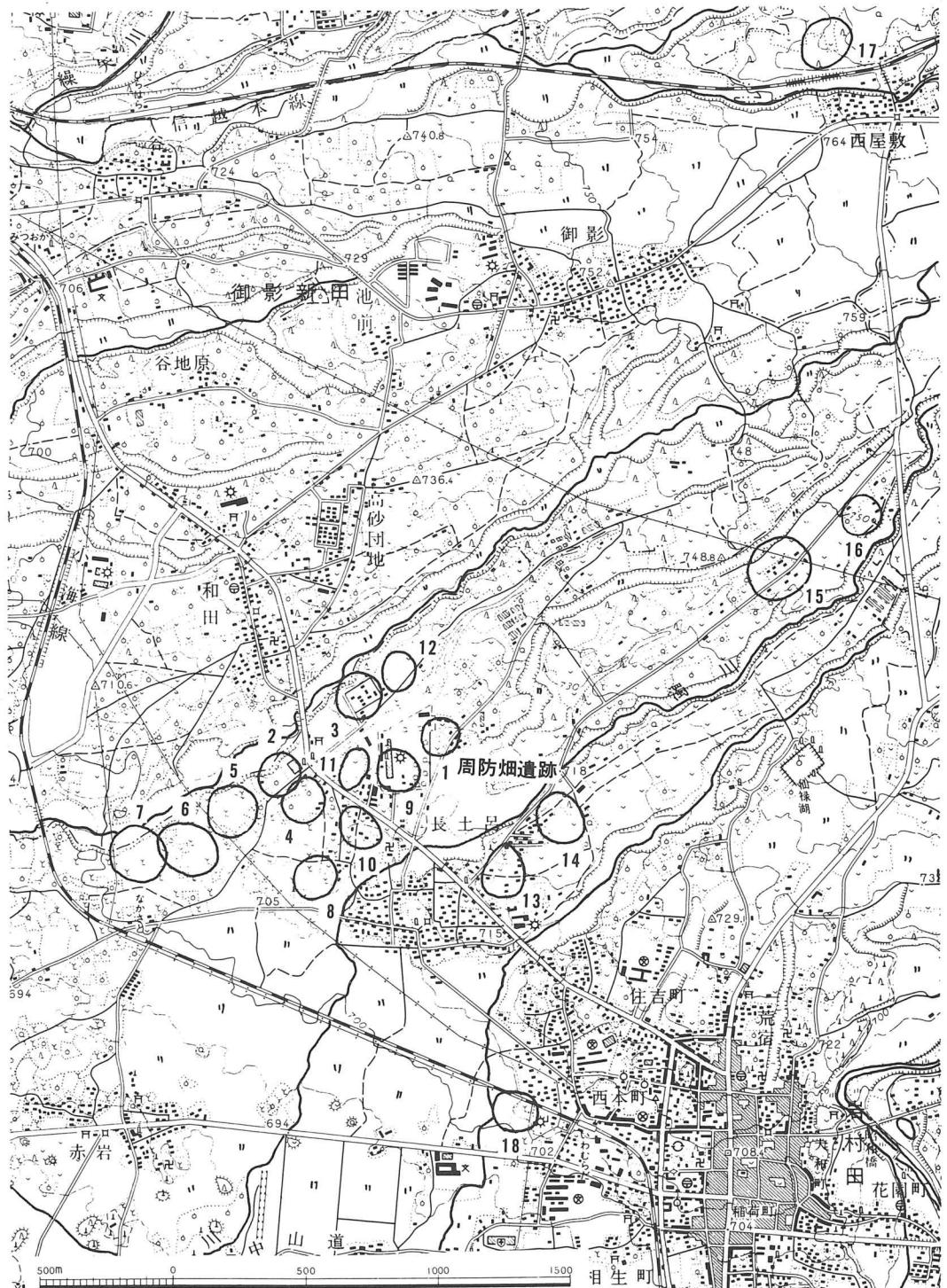
1) 周辺遺跡

周防畠遺跡は、佐久市長土呂の西端で附近には、西近津、北近津遺跡の存在する田切を一つ隔てた浅間山火山流を濁流の氾濫によって侵触された緩斜形の田切台上に位置する南下北原地籍である。今般発掘調査がなされたこの遺跡を中心として周辺を見ると、縄文時代・弥生時代・古墳時代・世を通じての数多の遺跡群が点描される。

縄文時代に属する遺跡は、現在小諸市和田地区と佐久市長土呂との境界をなす田切り。後世御代田町真楽寺附近に湧源を求める湧玉用水との田切りをもって展開される台地上の西近津遺跡。此の遺跡は、昭和四十六年佐久市教育委員会・佐久考古学会によって発掘調査がなされた。此の地点の南に接する台地。南近津遺跡からは、加曾利E式の分布が見られる。同台地の南西先端部の東鷺林遺跡には、有尾式・加曾利E式・佐野式・氷式等々の分布がある。同台地上を比較して見ると昭和四十七年一月北近津遺跡の発掘調査、この遺跡と田切りを一つ手前の俗称芝宮遺跡・及びその北東部の高山遺跡からは打製石斧などが点在している。

弥生時代では、西近津遺跡と台地を共にする。森下地域では箱清水式甕、太形蛤刃石斧やその南端の東鷺林からは、百瀬式の壺・打石斧・土偶・箱清水式鉢・周防畠遺跡の東側対岸の台地下飼袋・上飼袋などの地点では、百瀬式の壺・其の他の破片が数多く見在されている。字周防畠及び南の向原でも箱清水式壺などの出土が見られる。

古墳時代に入ると所謂土師器をもつ時代になる。一層この地域には、集落地域としての利用度がほぼ集中的に営なまれたものとして考えられる。今般発掘調査がなされた周防畠遺跡より北側の田切りを越えると昭和四十七年一月調査された北近津遺跡があり、その前方には現在長土呂地区に唯一の古墳がこの北近津遺跡群に存在しているのが見られるが、毎年の耕作によってその墳丘も小さくなっていく。字道常には須恵器の横瓶などの既出が見られ土師・須恵器の分布が見られる。



第2図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	繩	弥	古	古 墳	歴	備 考
1	周 防 番 遺 跡 (1)		○	○		○	405
2	西 近 津 遺 跡	○	○	○		○	411
3	北 近 津 遺 跡		○	○		○	411
4	南 近 津 遺 跡	○	○	○		○	411
5	森 下 遺 跡		○	○		○	411
6	下 長 畠 遺 跡		○	○		○	411
7	東 驚 林 遺 跡	○	○	○		○	411
8	道 常 遺 跡			○		○	419
9	周 防 番 遺 跡 群		○	○		○	409
10	向 番 遺 跡		○	○		○	409
11	渋 右 衛 門 遺 跡		○	○		○	409
12	北 近 津 古 墳		○	○	○	○	411
13	下 飼 袋 遺 跡		○	○		○	419
14	上 飼 袋 遺 跡		○	○		○	419
15	芝 宮 曽 根 遺 跡	○	○	○		○	
16	高 山 遺 跡	○	○	○			1545
17	下 前 田 原 遺 跡			○	○	○	
18	清 水 田 遺 跡		○	○		○	433

中世時代に入ると、字周防畠、字渋右衛門、字一本松、向畠、南下北原、東近津などの地域から布目瓦の表面採集ができる。特に瓦が散布を多とする地域では今回調査発掘された周防畠遺跡南方と同台地上の中央部でその附近には、樺山プレス工業、長野吉田工業、千曲錦酒造株式会社の敷地内からは、昭和四十六年佐久市教育委員会による遺跡分布調査の報告書掲載に須恵器の皿らしき破片底部に『大井』と線刻されたものや、昭和三十五年この地の整地作業中に墳墓らしき石積があり工事中除去を行なつたら数多の人骨の出土を見、現千曲錦酒造の原隆四郎会長は前の寺の長福寺の一隅へ手厚く移葬したと談じている。これらのことから見て布目瓦の出土、『大井』なる銘記などを見た時、江戸時代中期の史学者吉沢鶴山（好謙）による『信濃地名考』によると、貞観八年（八六六）『明楽寺を廢、妙楽寺』とする記録が見られる等からして今後大方の諸土等によって研究されることを望み今回の調査を期し課題として長土呂の繩文期・弥生期・古墳・中世に至って濁川によって拓らかれた『瀬』と稻作・集落などを見た場合種々の問題や開発に伴なう遺跡の破壊・保護保存などの問題を提起してこれが実現を期し度く願うものである。

（佐藤 敏）

2) 遺跡周辺の歴史

長土呂の古代は詳しくは不明であるが、繩文時代に鷺林・南近津・西近津・北近津等から土器等が出土しているので、古くから先住民族が生活していた所であろう。

古い文献として伝えられている始めのものは建御名右命が諏訪の国を興し、信濃国を平定して諏訪を内県伊那を外県小県を小県佐久を大県と称して統治した時代があったという。建御名右命を興租とする諏訪神社が長土呂鷺林にあるが、ここを本拠として佐久郡を開発したといわれ、これが長土呂の村造りの基となったのであろう。

国内が安定し大化の改新後東山道が開かれ北関東より信濃国を通り京都に行く道、即ち軽井沢町入山峠より山王森から近津神社（古文書に長倉神社千鹿頭大明神とある）の森の中を通り、鷺林（長倉牧の中心地）の東添いに上塚原・塩名田に出る道があったと推定されているがこれは長殿邑諸隣集に書いてある。そして時代が下って永禄2年往古の曾根村の下曾根内匠入道覚雲の居城となる鷺林城が築かれた。附近には後の大井24郷の1つといわれる鷺林という部落も天正の後にあったと伝えられている。又天文18年には武田晴信が平原城攻撃のために鷺林城に陣を進めたと高白斎記に書いてある。

しかしながら、大和時代より平安末期まで佐久の中心であったと思われる長土呂の鷺林附近の表徴した原因是、大井朝光が文治4年に大井庄の地頭となって岩村田に館を構えて行政の中心地となり又道路等の変更が大きな原因と思われる。なお大井光泰が寛喜3年には長土呂に城を築き長土呂部落の中心になった。長土呂には今も城と称する字名があるが部落のほぼ中心にあって、

平坦な城跡というより居館跡ともいえるものである。これは佐久では野沢にある伴野氏の居館跡とよく似ていて、共に平地にありほぼ四角の地面に築地と堀をめぐらしている。今の長土呂には堀も築地と呼ぶべきものもないけれども附近で井戸を掘った時に鮮明に堀と思われる落込が見られたこと、その東南の民家を今でも堀の家と呼んでいること、又以前には今よりも周囲に土手が多く明かに築地があったものと考えられる。野沢の館跡には城山館があり祠があるように長土呂でもこの地には郷倉・高札所跡が残され明治に入って長瀬小学校が建られているが、この郭内には古くから家を建てない言伝えがあって今まで大半は畠であった。

長土呂が西の鷺林附近から東の現在の所に移り発展したのは水稻農業が始められたのもその原因の一つと思われる。古代は先住民族の時代から狩猟生活を続けたであろう。今の近津神社も古くは千鹿頭神社と云われ武神建御名方命に狩猟の成功を祈って奉げた多くの鹿の頭骨から名付けられたとも云われている。村は初め鷺林にあって、当時は湿地即ち土呂であったとすればその頃の人々の生活にはむかなかつたのかも知れない。その後は長土呂南方の地が水にめぐまれて水田経営に都合よく今の地に移ったのかも知れない。

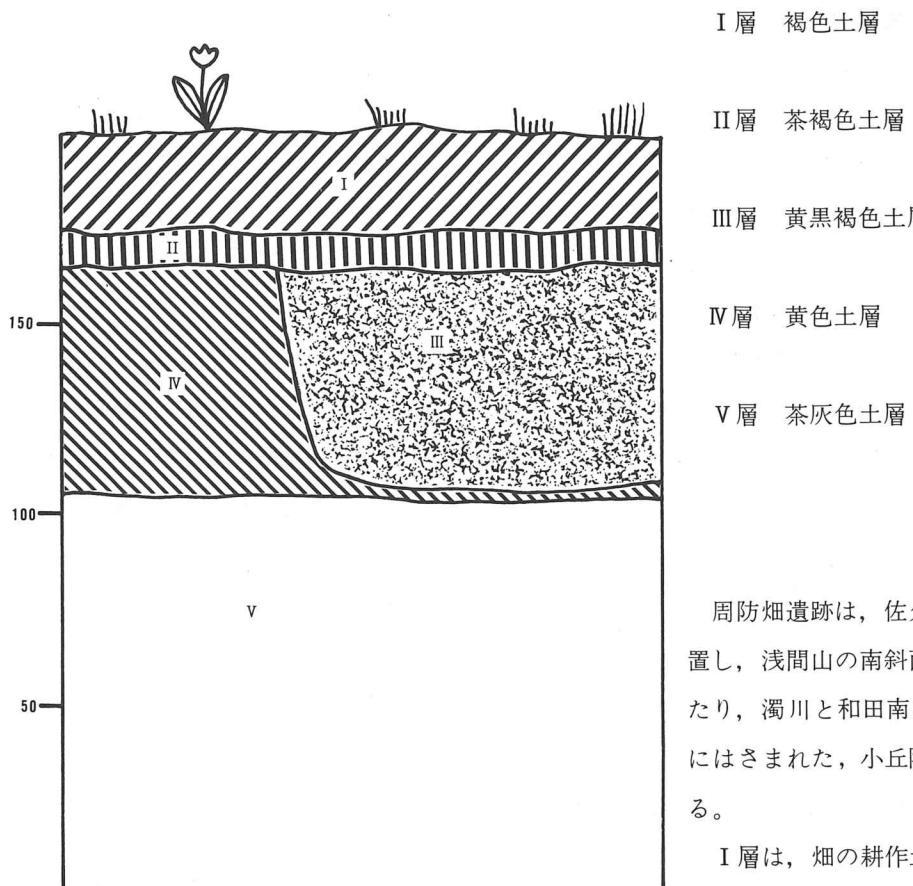
その後長土呂の所領は建武2年に薩摩刑部左衛門尉親宗を除いては光泰・行泰・行高・行忠・行豊・行春と大井氏の居城となった。信州佐久郡大井庄長倉里長殿御代々御領主の記載によれば嘉慶元年正月15日より同郡岩尾城へ引越したと記録されている。こうして長土呂の城主は6代に亘り大井氏に統治されたが、この地が平城であり要害の地を求めて千曲川沿岸の岩尾城に移ったものと考えられる。

続太平記に、文明16年戊辰まで、大井美作等照光岩村田にありて領す。同年2月22日岩村田落城の後、兵乱止む時なく地頭朝夕に代り領主年々定る事なし。天文年間武田氏の所領となりその臣小山田昌行、同昌辰、春日昌信等交々管理すという。

江戸時代に佐久が生んだ史学者、吉沢鶴山はこのように述べている。

(神津 敦)

III 層 序



周防畠遺跡は、佐久平北端に位置し、浅間山の南斜面末端部にあたり、濁川と和田南田切の谷の間にさまれた、小丘陵上に立置する。

I層は、畠の耕作土で褐色を呈し、粒子を少量含み砂質性に富んでいる。

II層は、同じく耕作土であって、茶褐色を呈しI層に比べいくらか粘性がありローム粒子を少量含み遺物も少量包含する。III層は、遺構内覆土であり、各遺構の覆土は住居址実測図の層序説明に記してあるが、黒色土を基調としており、浮石を含み遺物を多量に包含する。

第IV層は、やや粘質性のある黄色土層で地山である。

第V層は、茶灰色土層の火山灰土であって、砂質性が強く、水分を多量に吸収していて、各遺構内の床面直下より堆積される。

(島田 恵子)

IV 遺構と遺物

1 住居址

1) H1号住居址

遺構（第4図）

本住居址は、け・こ・さー5・6・7グリッド内において検出された。プラン検出の際、北壁側に帶状となって水路が切りこんでいたが、表面のみで壁内部まで侵透していなかった。

平面プランは、北壁 470cm、南壁 430cm、東壁 440cm、西壁 450cmを測り、北壁がやや長い隅丸方形を呈し、主軸方位は、N-27°-Wを示す。壁高は、確認面より34~42cmを測り、ほぼ垂直に近い立ち上りをみせている。

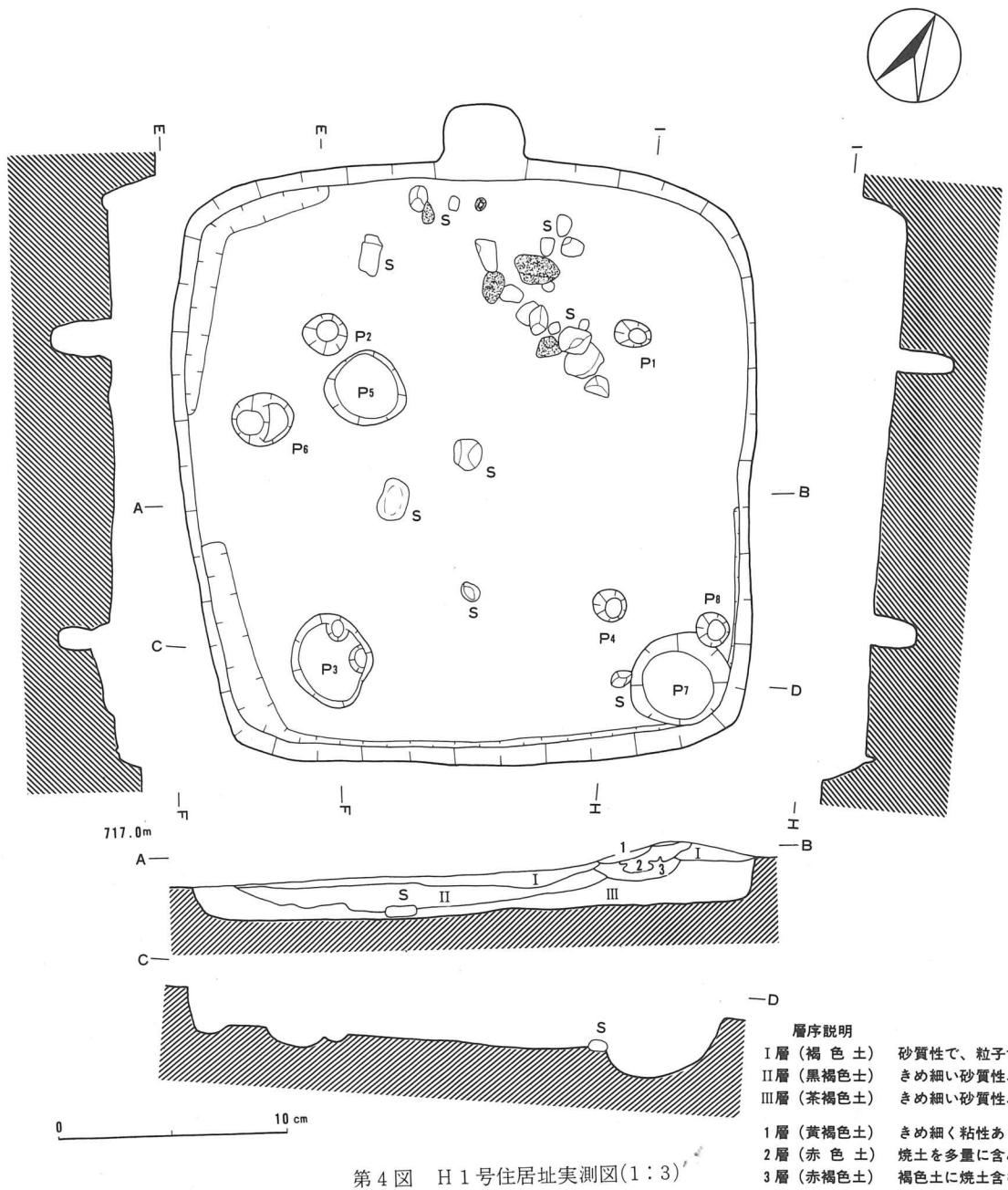
住居址内の覆土は、黒褐色を基調とした土層で、砂質性で多量のパミスを含んでいる。また、土層断面図に図示されているように、東壁側上面に焼土が巾80cm、深さ30cmにわたって堆積しており須恵器、土師器片等が混入していた。覆土上面であるため、本住居址廃絶後になんらかの用途によって焼土が堆積したものと思われる。尚、隣接のさー5グリッド内においても同類の焼土が全体層序の第II層上面より堆積していたが、その性格は不明である。

床面は、比較的平坦であり、黄色土を混入して固めた敲き床とおもわれる。黄色土の直下は軟弱な火山灰土である。

カマドは、水路工事の際、破壊されたものとおもわれる。4図に図示した住居址内に散乱する石は、焼成を受けた赤褐色の焼石が多く見られることから、カマドに組まれていた石が破壊されて散乱したものとおもわれる。石質はそのほとんどが軽石である。

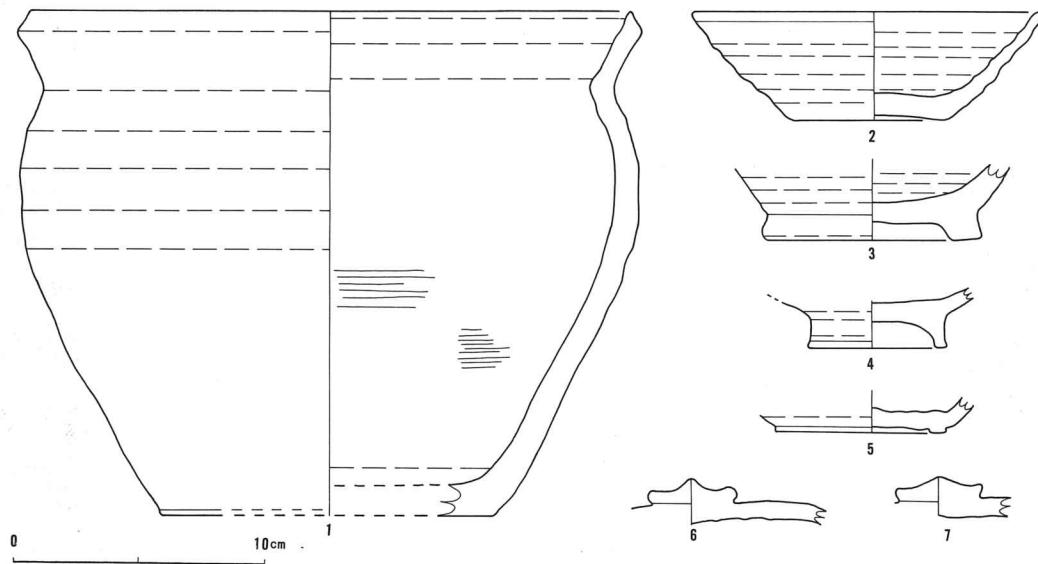
ピットは8個検出された。P₁は径32×20cm、深さ48cmの楕円形を呈し、P₂は径38cm、深さ53cmの円形である。P₃は径80cm、深さ14cmの円形を呈する掘り込みの北東脇に位置し、径20cm、深さ46cmを測る。P₄は径30cm、深さ38cmの円形を呈す。これらP₁~P₄は、径、深さ、位置等からして主柱穴とおもわれるが、P₅~P₈は、深さ10~18cmであり、規模、その形態等から、なんらかの機能を果していたものと考えられる。

その他、北壁の西側から、西壁、南壁、東壁の中間にかけて、巾40cm~30cm、深さ2cm~5cmを測る壁溝が巡っている。



遺物 (第5図1~7)

本住居址の出土遺物は比較的少なく、そのうち図示したものは、須恵器甕1点、須恵器壺1点、須恵器高台底部1点、土師器高台底部2点、須恵器蓋摘み部分2点の計7点である。また、小破片はそのほとんどが供膳形態用のもので占められた。尚、P₃際より鉄鏃が出土した。



第5図 H1号住居址出土遺物実測図(1:3)

第2表 H1号住居址出土土器一覧表

(法量、上段口径、中段器高、下段底径)
()内推測値、一線は不明、cm)

挿図番号	器種	分位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
5-1	須恵 甕	口 底	(24.0) 24.5 (13.2)	大きく安定した平底をもつ。 口頸部、くの字状に外反する。 端部はわずかに内屈する。 最大径は肩部と口辺にある。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調黒灰色。 内面使用による黄褐色の 斑点あり。覆土下部。
5-2	土師 壺		14.0 4.0 6.5	口辺部は底部から直線的に開いて外傾する。 底部は上底	ロクロ痕 底部糸切り	ロクロ痕	色調灰色、一部黒斑あり カマド付近。
5-3	須恵 ——	底	—— 7.5	大きく安定した高台を呈する。	ロクロ痕 底部糸切り	ロクロ痕	色調青灰色。 覆土下部。
5-4	土師 高台 壺	底	—— 5.5	台部の器肉うすい。 台部は貼付け。	ロクロ痕 底部濃い赤褐色で粗痕 がある。	ロクロ痕 砂粒あり。	色調赤褐色。 カマド上部。
5-5	土師 高台 杯	底	—— 7.0	台部0.2mmと低い	ロクロ痕 調整良好 底部糸切り	ロクロ痕 底面にロクロによる左 巻の渦巻あり。	色調赤褐色。 東床直。
5-6	須恵 蓋		摘 み 3.5	摘みは宝珠形を呈する。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調青灰色。 覆土下部。
5-7	須恵 蓋		摘 み 3.5	摘みは宝珠形を呈する。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調青灰色。 南床直上。

まとめ

本住居址は、検出された住居址の中では、特に遺物が少なかったが、遺構の遺存状態はカマドが破壊されていたのみで、主柱穴、壁、その他良好な状態であった。

また、遺物も時代の特徴が顕著であり、国分期に比定されよう。

(島田 恵子)

2) H 2号住居址

遺構（第6図）

H 2号住居址は、H 1号住居址に隣接した、け・こ・き-7・8グリッド内において検出された遺存状態は良好であった。

平面プランは、北壁 380cm、南壁 420cm、東壁 420cm、西壁 400cmを測る隅丸方形を呈する。主軸方位は、N-25°-Wを示し、壁高は、確認面より50cm~74cmを測り、ほぼ垂直に近い傾斜をもって立ち上る。

カマドは、第7図に図示したが丸く組まれた石組が残存していて、付近の床面には焼けた粘土が散布していた。また、煙道は北壁から50cmほど長方形に掘り込んでおり、H 1号住居址と形状が全く同様である。

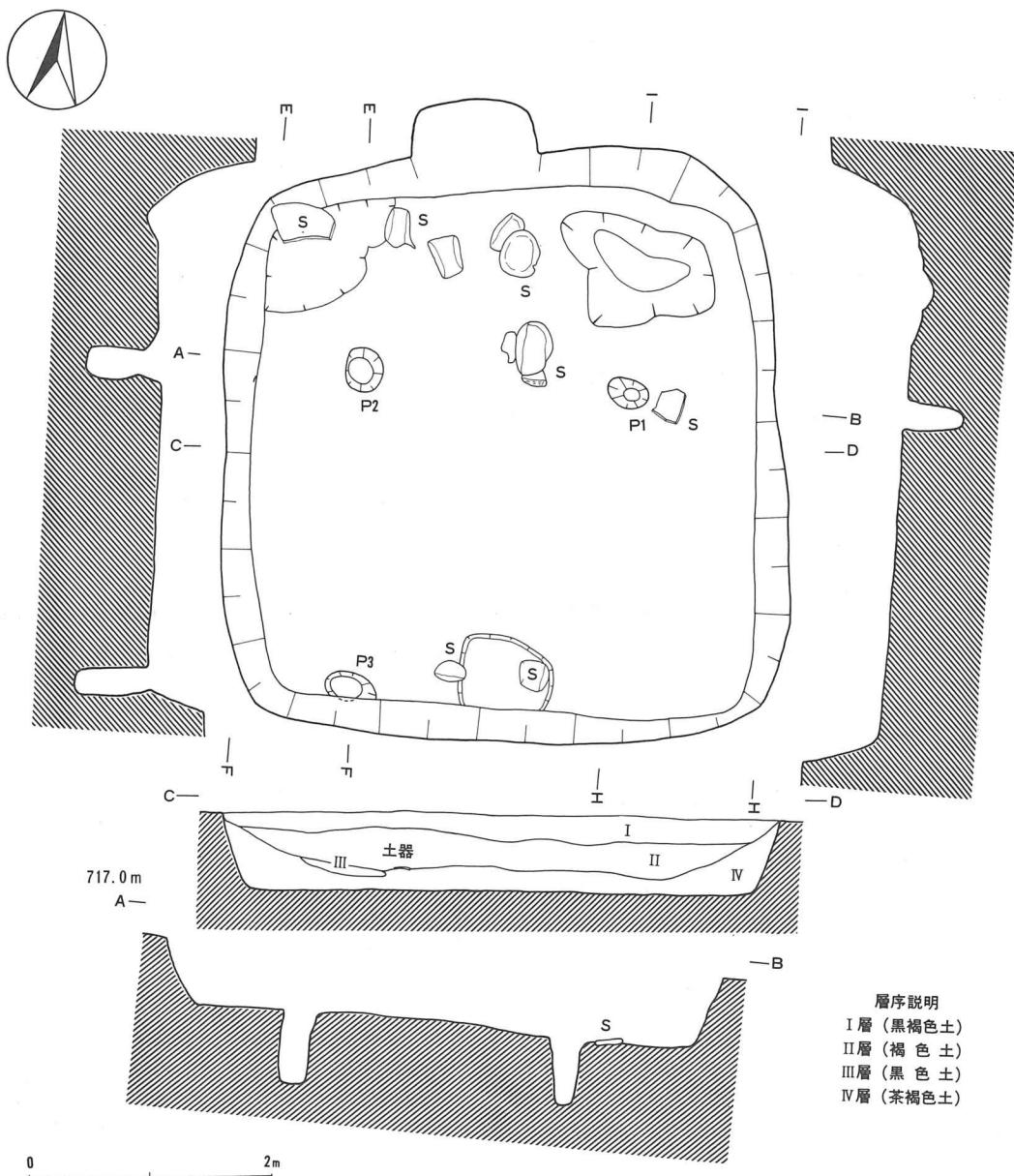
ピットは、3個確認されP₁は26×36cm、深さ53cm、P₂は30×38cm、深さ44cm、P₃は壁ぎわに位置し、壁より奥に掘り込んであり、深さ42cmを測る。4本柱であったとおもわれ、南西の壁際を精査したが検出できなかった。

その他の施設として、カマド脇左右に落込みがあり、右側は、90×100cm、深さ26cmを測る。位置、規模、また白灰色の覆土等により、灰落し的存在の施設ではないかとおもわれる。さらに左脇の施設は、東西コーナの壁に添っていて、約60cm×80cm、深さ12cmを測り、コーナには、50cm×30cm、厚さ15cmの安山岩質の平石が置かれている。付近からは完形の壺2個体、破片4片が出でた。カマド脇、深さ、遺物出土、平石の存在等によって、調理に関する施設であろうと想定される。

また、南壁中央にも60cm×80cm、深さ9cmを測る掘り込みが存在した。これは位置から考えて住居の入口部であることと、かなり深い住居址のため入口に設けられた施設のための掘り込みではなかったかと考えられる。

遺物（第8図1~21）

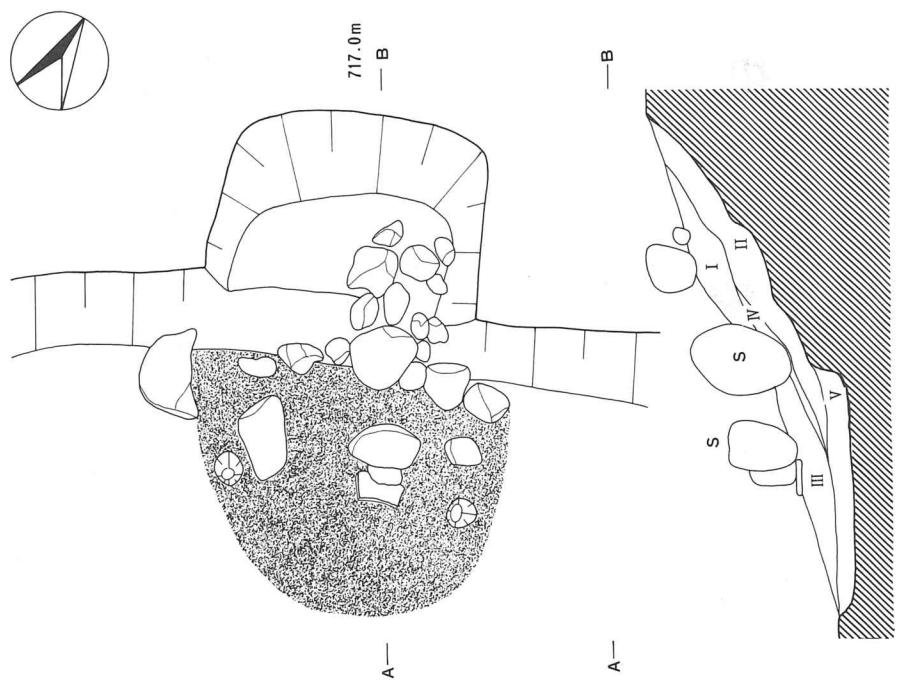
H 2号住居址から出土した遺物は、供膳形態がそのほとんどを占め、図示したものは、蓋3点、須恵器壺9点、高台付須恵器壺1点、同土師器壺2点の計21点である。



第6図 H2号住居址実測図(1:3)

环の内、4点は墨書き土器であり、うち3点までが「中」の文字が記されており、なお、第8図9は、線刻を施して描かれた文字である。

さらに本住居址からは、西壁の南コーナ、壁の立上り中間から壁に密着した状態で、鉄器である鉗が出土した。おそらく、住居内の壁際に道具類をかけるため組まれた棚から落ちたため

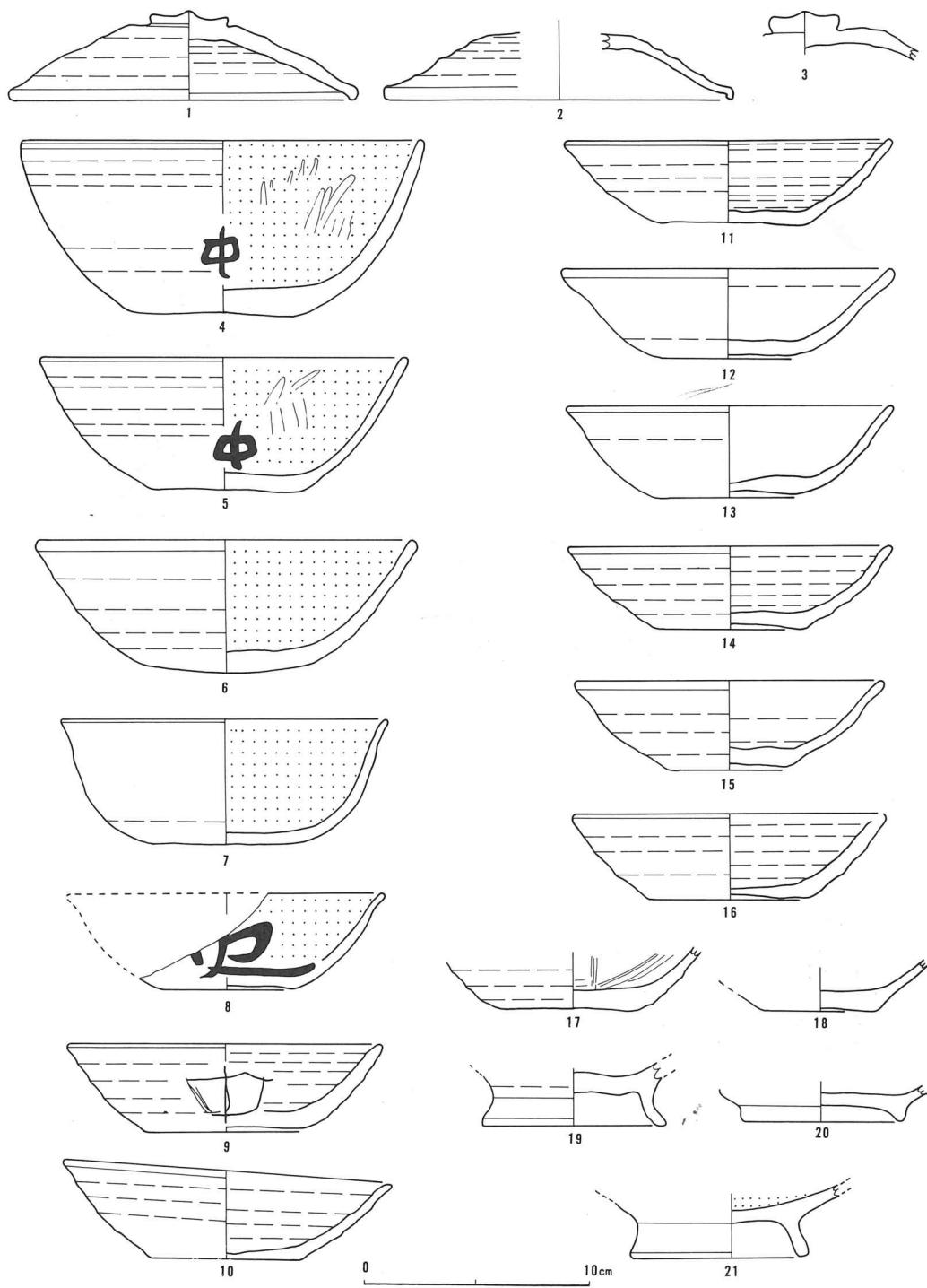


層序説明

- I層（黒褐色土） 黒色土に焼土混入
- II層（茶褐色土） 黒色土にローム粒子混入
- III層（黒色土） 焼土の固まり
- IV層（赤褐色土） 焼土及び粘土、黒色土混入
- V層（黄褐色土） 焚土、ローム粒子混入

0 1m

第7図 H2号住居址カマド実測図(1:3)



第8図 H2号住居址出土遺物実測図(1:3)

第3表 H2号住居址出土土器一覧表

捕図番号	器種	分位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
8-1	須恵蓋		摘み 3.5 15.5	摘みは宝珠形を呈するが摘み部分の高さが低い。口縁部でくぼんで端部丸い。器肉厚い。	ロクロ痕。 調整一部のみ粗雑凹凸がある。	ロクロ痕。 左巻の渦巻痕あり。	色調灰褐色。 カマド付近。
8-2	須恵蓋		— (16.0)	摘み部分欠失する。 器肉うすい。	ロクロ痕。 上葉が使用されている。 特に口縁部は光る。	ロクロ痕	色調青灰色。 胎土良好。 覆土下部。
8-3	須恵蓋		摘み 3.0	摘みは宝珠形を呈する。	ロクロ痕。調整粗雑 調整粗雑、凹凸がある。	ロクロ痕。 上葉は中心部のみ、使用。	色調黒灰色。 床面直上。
8-4	土師坏		18.0 7.5 8.0	口辺部は底部より弯曲して立ち上がる。 平底を呈す。	ロクロ痕。 口辺部に粗痕あり。 底部糸切り。	内面黒色。 ヘラミガキ。	色調赤褐色。墨書土器中の文字が逆に記されている。カマド付近。
8-5	土師坏		(16.5) 6.0 7.0	口辺部やや内弯しながら外傾する。 器肉うすい。平底を呈す。	ロクロ痕。 底部糸切り。	内面黒色。 ヘラミガキ。	色調赤褐色。墨書土器中の文字が逆に記されている。床面直上。
8-6	土師坏		(17.0) 6.0 (7.0)	口辺部やや内弯しながら外傾する。 丸底気味である。	ロクロ痕。 砂粒浮出している。 底部糸切り。	内面黒色。 ヘラミガキ。	色調茶褐色。 覆土下部。
8-7	土師坏		(14.5) 5.5 (6.5)	口辺部は底部より弯曲して立ち上がる。 平底を呈し、器肉うすい。	ロクロ痕。 上葉塗ってある。 底部糸切り	内面黒色。 ヘラミガキ。	色調褐色。 胎土良好。 南壁ぎわ。
8-8	土師坏		(14.0) 4.0 6.5	口辺部は底部より直線的に開いて外傾する。 底部は上底。器肉厚い。	ロクロ痕。 砂粒多く凹凸あり。 底部糸切り。	内面黒色。 ヘラミガキ。	色調黒茶褐色。墨書土器史の文字が記されている。カマド付近。
8-9	須恵坏		14.0 4.0 7.5	口辺部は底部より直線的に開いて外傾する。 底部は上底	ロクロ痕 凹凸あり。 底部糸切り。	ロクロ痕	色調灰黒色。中の文字が線刻されている。焼成直前に内外面に墨を塗った様相を呈す。北西コーナ
8-10	須恵坏		14.5 4.5 7.0	口辺部は底部より直線的に開いて外傾する。器形のゆがみあり。 底部は平底	ロクロ痕。糸切時の糸痕。口辺部にもある。 粗雑。底部糸切り。	ロクロ痕。底面凹凸あり、粗雑である。	色調灰褐色。 砂粒多い。 西覆土下部。
8-11	須恵坏		(14.5) 3.5 (6.5)	口辺部は底部より直線的に開いて外傾する。 底部は平底	ロクロ痕。 粗雑である。 底部糸切り。	ロクロ痕。 粗雑である。	色調黒褐色。No.9と同じく焼成直前に内外面に墨を塗った粗雑な様相を呈す。カマド付近。
8-12	土師坏		(15.0) 4.0 6.0	口辺部は底部より直線的に開いて外傾する。 底部は上底気味。	ロクロ痕。 底部糸切り。	ロクロ痕。	色調灰褐色。 砂粒あり。 中央床直上。
8-13	土師坏		14.5 4.0 6.5	口辺部は外傾しながら内弯する。 底部は上底。	ロクロ痕。糸切時の糸痕が乱雑にある。 底部糸切り。	ロクロ痕。	色調灰褐色。一部黒斑あり。 西床直上。
8-14	土師坏		(14.5) 3.5 7.0	やや内弯気味に外傾する。 底部は上底	ロクロ痕。凹凸あり、粗雑である。 底部糸切り。	ロクロ痕。粗雑である。	色調灰褐色。一部黒斑あり。 南床直上。
8-15	土師坏		(14.0) 4.0 (6.0)	口辺部は底部より直線的に開いて外傾する。 底部は上底。	ロクロ痕。凹凸目立ち粗雑である。 底部糸切り。	ロクロ痕。粗雑である。	色調灰褐色。 覆土下部。

挿図番号	器種	分位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
8-16	須恵環		14.0 4.0 7.5	口辺部は底部から直線的に開いて外傾する。 底部は上底、器肉厚い。	ロクロ痕。 指ナデの痕ある。 底部糸切り。	ロクロ痕。	色調黒灰色。 中央床直上
8-17	須恵環	底	— — 6.0	底部は平底。	ロクロ痕。 底部糸切り。	ロクロ痕	色調灰褐色、一部黒斑あり。 覆土下部。
8-18	須恵環	底	— — 5.0	底部は径短い平底。	ロクロ痕。 底部糸切り。	ロクロ痕。 砂粒の浮出た痕目立つ。	色調灰色、一部黒斑あり。 床直上。
8-19	土師高台環	底 台	— — 7.0	安定した大きな台部をもつ。 台部貼付け。	ロクロ痕。 調整良好。	内面黒色。 きれいに研磨されている。	色調黒褐色。 西壁ぎわ。
8-20	須恵高台環	底 台	— — 7.0	台部より直に外反。 台部の貼付顕著。	ロクロ痕。 台部貼付け。 底部糸切り。	ロクロ痕。 ロクロによる左巻の渦巻あり。	色調青灰色、一部黒斑あり。 床直上。
8-21	土師中盤	底 台	— — 8.0	台部より大きく外反する。	ロクロ痕。 台部貼付。 調整良好 底部糸切り。	内面黒色。 ヘラケズリ。	色調茶褐色。 台部にヘラ記号あり。 床直上。

ではなかろうかとおもわれる。

遺物は、覆土下部から床面直上にかけて住居内全体に散在して出土した。蓋形土器は、いずれも宝珠形の摘みを呈し、2は上薬が塗ってあり特に口縁部は二重に塗彩され光っている。1は摘みの部分が0.4mm程度の突起であるため非常に摘みにくい。

环形土器は、4～6・7・8～18・19～21の4タイプに区分されよう。4～6は内面黒色であって、口径16.5～18cm、器高6～7.5cm、底径7～8cmと比較的大型であり、6も完形であったならばおそらく「中」の文字が記されていたものと思われる。4は「中」の文字が記されていた右上の口縁部ぎわには、意図的に圧痕したとおもわれる粗痕があった。7は、器形が図示した中では、顕著に口辺部が底部から弯して立ち上っており、8～18までの口辺部が底部より直線的に開いて外傾する器形とは様相を異にする。さらに外面には上薬が塗ってあり、そのためにロクロ痕が文様的な役割りを果しており一段と美しい。19～21は高台の部分のみの残存なので詳細は記せない。

また、出土した墨書土器4点のうち3点までが「中」の文字であったということは、さまざまなことを暗示させられる。

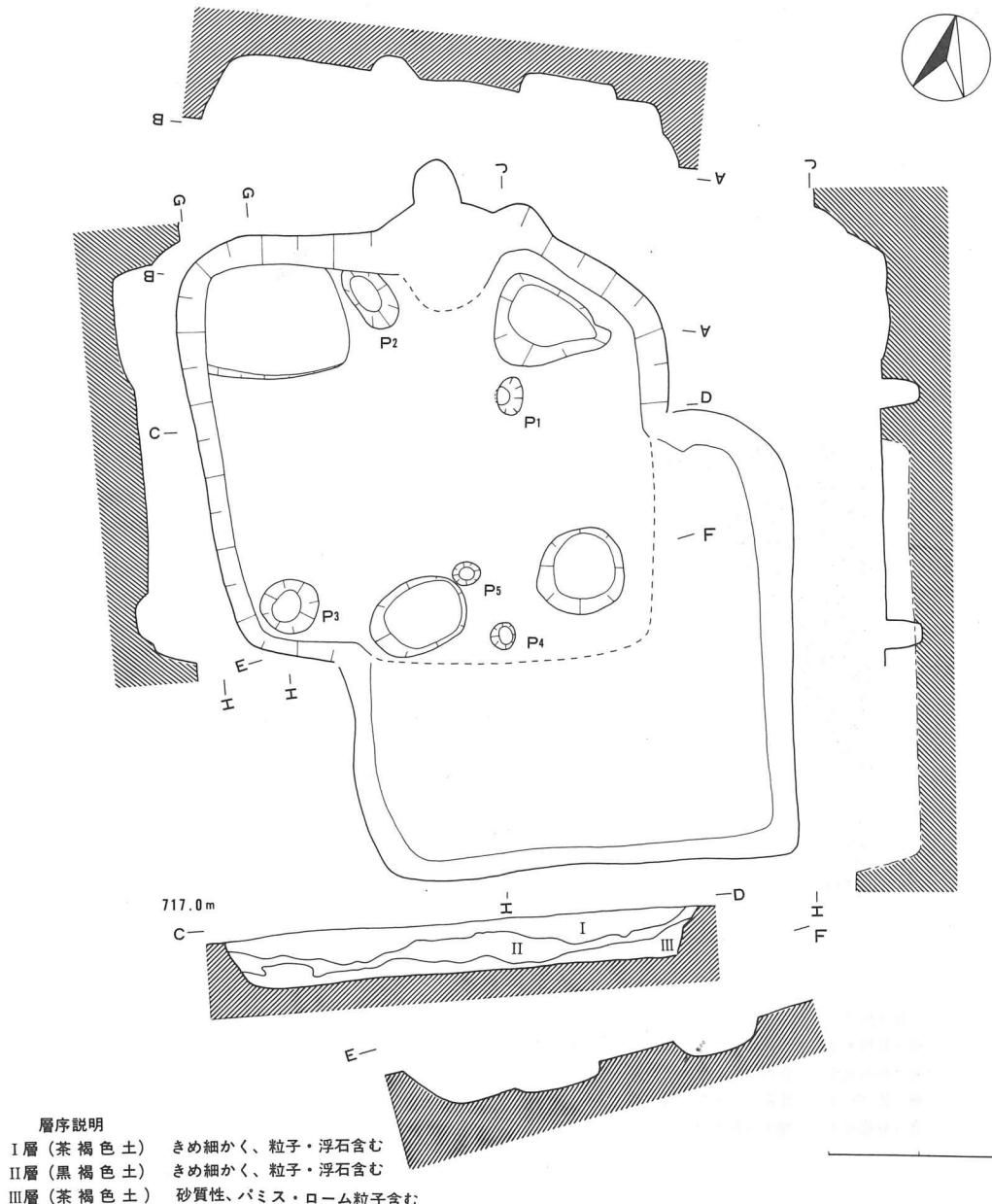
本住居址は、以上のような环形土器の特徴から国分期に比定されよう。

(島田恵子)

3) H 3 住居址

遺構（第9図）

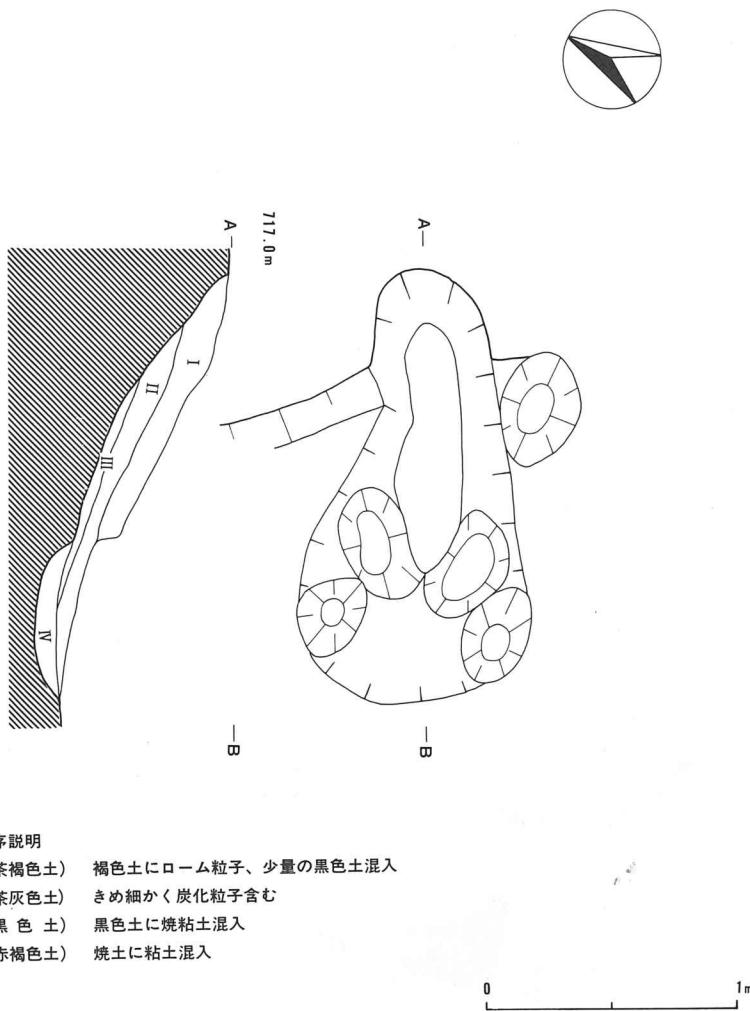
本住居址は、調査区え～かー7～9グリッドに位置し、全体層序第3層上面において確認された。H 4号住居址と重複関係を有し、H 4号住居址によって切られている。



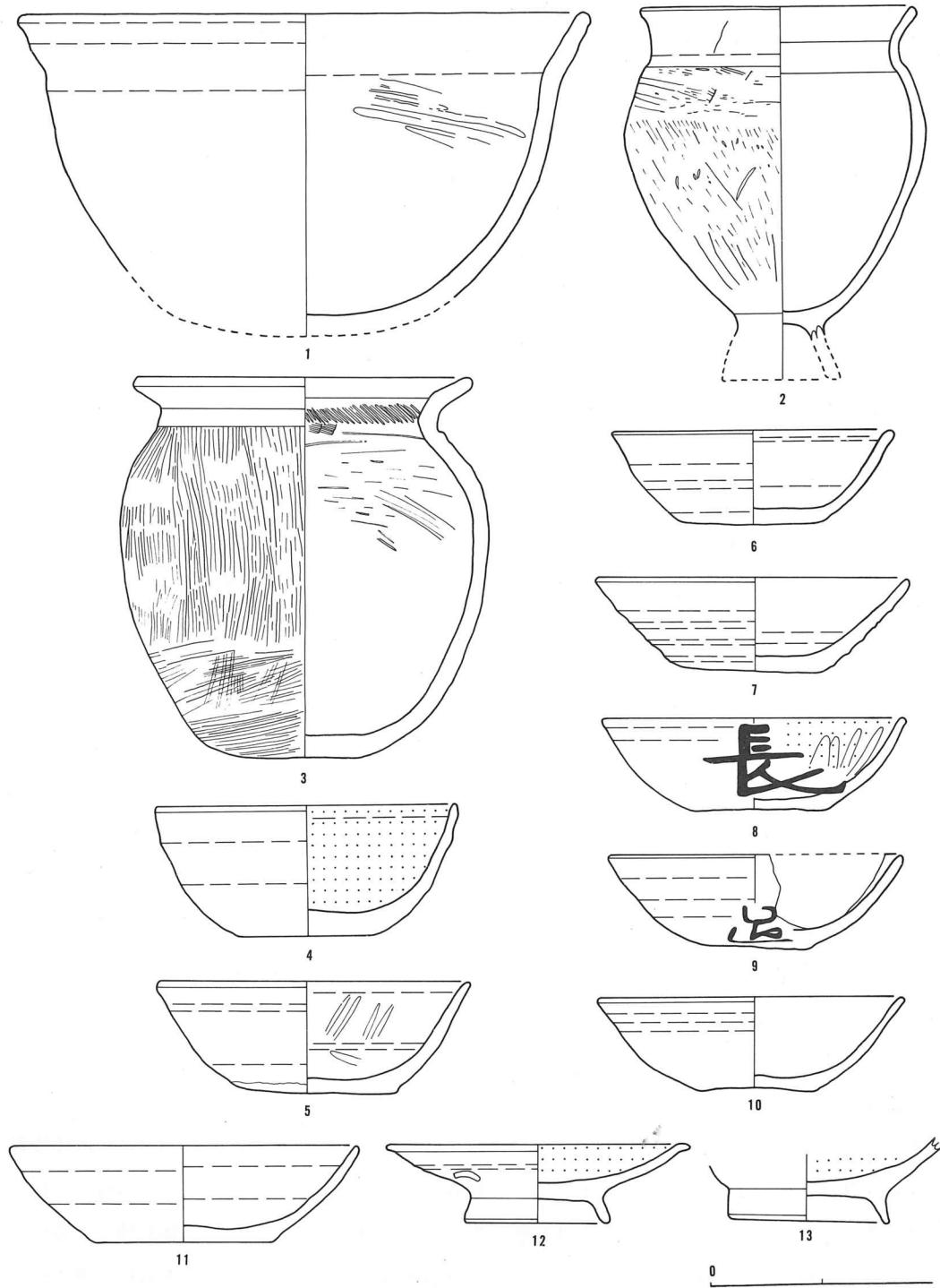
第9図 H 3号住居址実測図(1:4)

平面プランは、南北 480cm、東西 510cmの不整な隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N-24°Wを指向する。

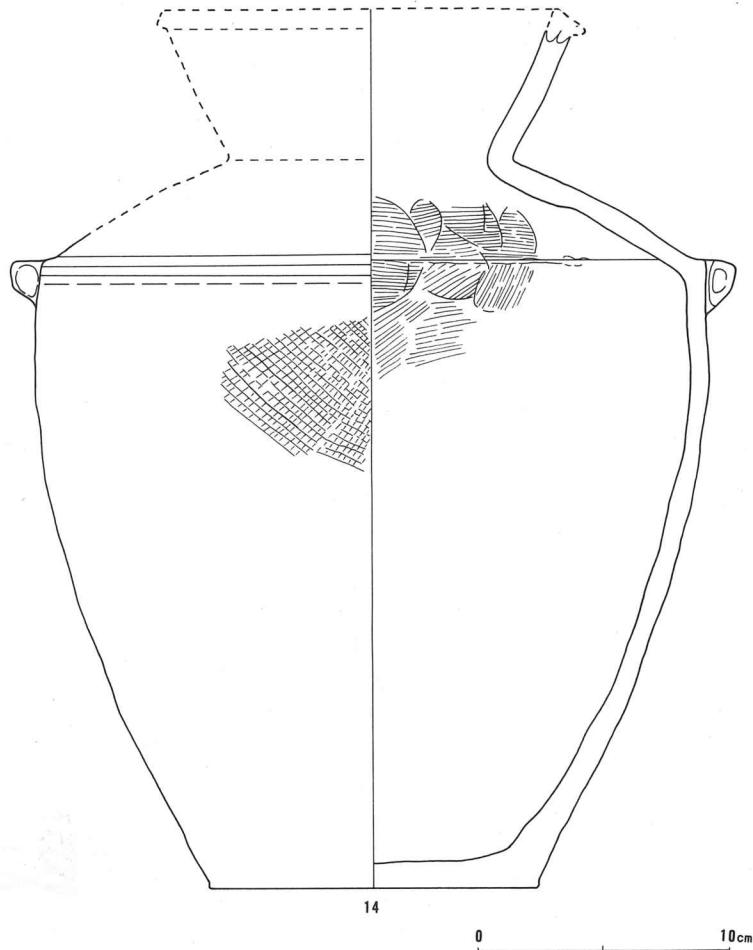
確認面からの壁高は、およそ60cmを計測し、壁は、比較的緩やかに立ち上がる。覆土は、3層によって形成されており、遺物の多くは第Ⅲ層を中心に出土している。なお、床面には、特に堅緻な部分は認められなかった。また、ピットは総計で9基検出された。このうち、住居址中央部北東寄りのP₁と南東寄りのP₄が、形状・深さから推して柱穴と考えられる。



第10図 H 3号住居址カマド実測図(1:3)



第11図 H 3号住居址出土遺物実測図 1 (1:3)



第12図 H 3号住居址出土遺物実測図2 (1:3)

カマドは、北壁ほぼ中央に位置する。北壁を舟先状に掘り込み、袖は石と粘土により構築されたものと考えられる。なお、遺物の多くは、カマドおよびその周辺から出土している。

遺物（第11・12図1～14）

本住居址は、土師器・須恵器が出土した。このうち、図示し得たものは、土師器12点、須恵器2点、計14点である。前述したように、これらの多くがカマドあるいはカマド付近から出土している。出土土器は、煮沸形態と供膳形態のものに二大別される。特に、供膳形態である壺が多い。また、佐久平において国分期の土器群に台付甕を加えることができた。さらに、墨書き土器も二例出土している。一方、須恵器は壺の外、壺が出土している。

本住居址出土土器群は、国分期に比定されよう。

(花岡 弘)

第5表 H3号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	分位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
11-1	土師甕	口 胴	25.5 15.5 10.0	口辺部ゆるく外反。胴部よりゆるやかに弯曲し、丸底を呈するものとおもわれる。 最大径口辺部。	ロクロ痕。 二次焼成により摩滅している。	ヘラミガキ。摩減摩減している。	色調(外)茶褐色スス付着あり。(内)黒褐色。 カマド付近。
11-2	土師台付甕		13 16.5 (5.5)	口辺部ゆるく外反。 最大径胴上部。	口辺部指押え痕。胴上部より下部にかけて刷毛目の後のヘラケズリ。	口辺部ロクロ痕。 胴上部よりナデにより平滑化。	色調黒茶褐色。 覆土下部。
11-3	土師甕		15.0 17.0 6.0	口辺部はくの字状に外反する。 最大径を胴中央にもち、ゆるやかに弯曲する。僅かな部分平底。	口辺～頸部ロクロ痕。 胴上～胴下荒い刷毛目。 縦方向。胴下～底部横にかけて横方向。	口辺部ロクロ痕。頸部刷毛目、指おさえあり。 胴～底刷毛目後のヘラケズリ。	色調褐色、一部黒斑あり。 内面底部に使用痕の黒点あり。カマド付近。
11-4	土師壺		(13.5) 6.0 6.5	口辺部は弯曲して立ち上る。 平底を呈する。	ロクロ痕。体部砂粒多く表面に浮き出でおり調整悪し。底部糸切り。	内面黒色。砂粒の浮き出た部分のみ黒色はげて調整悪い。	色調茶褐色。 南覆土下部。
11-5	土師壺		(13.5) 5.0 (7.0)	口辺部は底部からやや内弯気味に開いて立ち上る。 平底を呈する。	ロクロ痕。底部糸切り後ヘラ削りの折反し痕あり。	ヘラミガキ。	色調赤褐色。 覆土下部。
11-6	土師壺		(12.5) 4.0 (6.0)	口辺部は底部からやや内弯気味に開いて立ち上る。 平底を呈する。	ロクロ痕。底部糸切り。	ナデ。 調整良好。	色調(内)赤褐色。 (外)黒褐色。 カマド付近。
11-7	土師壺		(14.0) 4.0 (6.5)	口辺部は底部より直線的に開いて外傾する。 平底を呈する。器肉厚い。	ロクロ痕。 底部糸切り。	ロクロ痕	色調黒褐色。 カマド上。
11-8	土師壺		13.8 4.0 6.0	口辺部は底部からやや内弯気味に開いて立ち上る。 平底を呈する。	ロクロ痕。糸切り時の糸による沈線痕あり。 底部糸切り。	ヘラミガキ。 内面黒色。	色調茶色。墨書き土器で、長の文字が記されている。 南覆土下部。
11-9	土師壺		13.0 4.0 5.5	口辺部は底部からやや内弯気味に開いて立ち上る。平底を呈するが起伏あり。底径短い。	ロクロ痕。 底部糸切り。	ロクロ痕	色調(外)赤褐色、(内)褐色、口辺の部分黒色。墨書き土器で足の文字が記されている。カマド付近。
11-10	土師壺		14.0 4.5 5.5	口辺部は底部から直線的に開いて外傾する。 底径短い。やや上底気味。	ロクロ痕。砂粒多く浮き出でいた砂粒は落ちてしまい凹凸多い。	ロクロ痕。 砂粒多し。	色調茶褐色。 カマド付近。
11-11	須恵壺		(15.5) 4.0 (8.0)	口辺部は底部より直線的に開いて外傾する。 広い平底を呈する。	ロクロ痕。 底部糸切り後ヘラケズリ。	ロクロ痕。	色調灰色。 砂粒多し。 覆土下部。
11-12	土師高台盤		(13.5) 3.5 5.5	台部より口辺まで大きく直線的に開いて外反する。	ロクロ痕。 紐状の粘土付着。 底部糸切り。	内面黒色。 砂粒多く、調整悪い。	色調茶褐色。 覆土下部。
11-13	土師高台盤	底 台	— — 7.0	台部器肉うすい。くの字状に外反して開く。 台部貼付け。	ロクロ痕。 指ナデ痕あり。 底部糸切り。	底面のみ黒色。 摩減している。	色調茶褐色、一部黒斑あり。 カマド付近。
11-14	須恵壺	頸 底	(17.0) (35.5) 13.0	最大径は肩部に位置する。 4個の耳を肩部に有する。	平行叩き目文が肩部より施されている。 底部ヘラケズリ。	刷毛調整後、かなり強く押えた指頭痕があり凹凸している。	色調灰褐色。 カマド上。

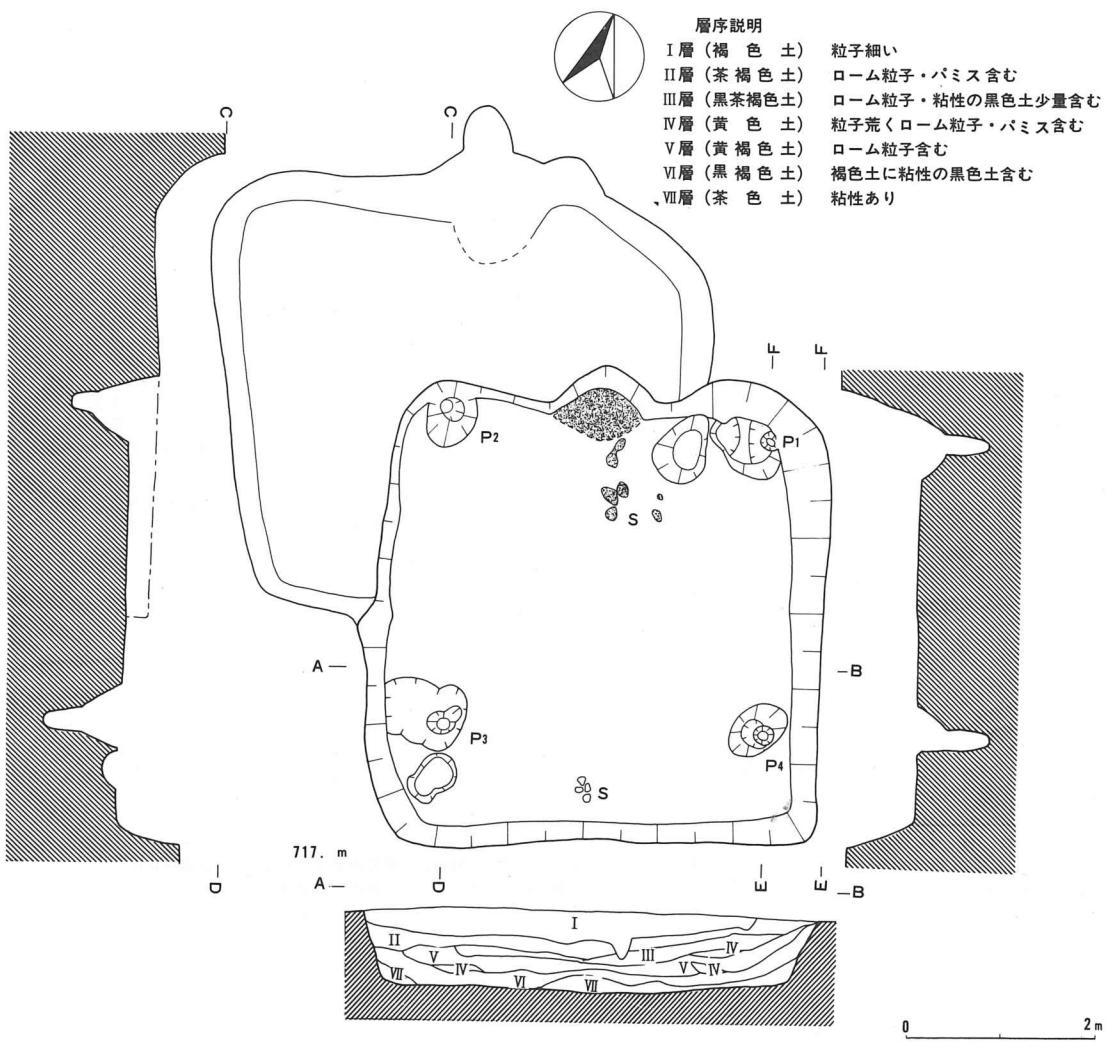
4) H 4 号住居址

遺構（第13図）

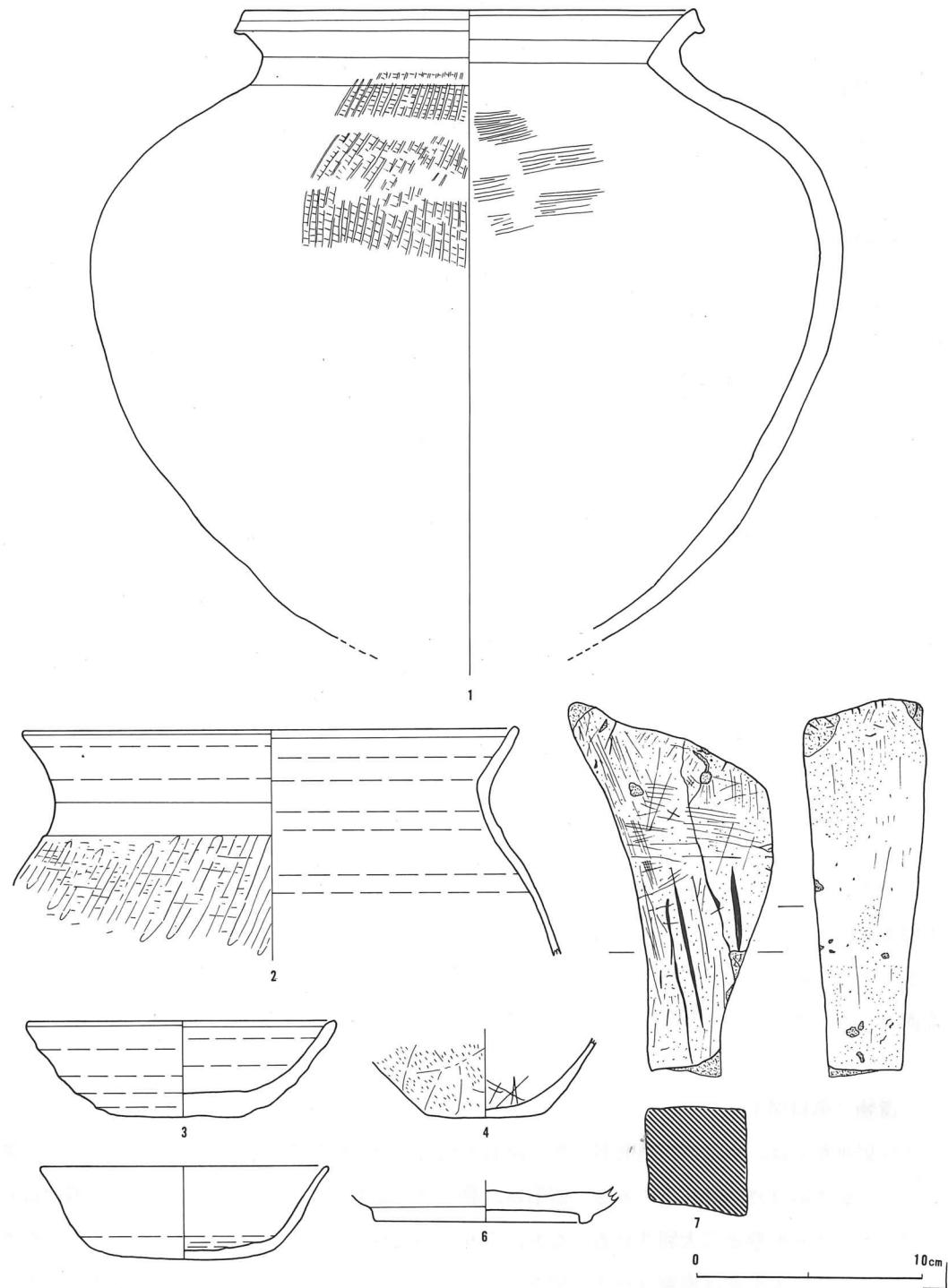
本住居址は、調査区お~きー8~10グリッドに位置し、全体層序第3層上面において確認された。前記のH 3号住居址を切って構築されている。

平面プランは、北壁 420cm、東壁 443cm、南壁 440cm、西壁 460cmを測り、やや不整な隅丸方形を呈する。また、カマドを中心とする主軸方位は、N-19°-Wを指向する。

確認面からの壁高は、およそ65cmを測り、壁は、比較的急な傾斜をもって立ち上がる。また、遺構覆土は、7層から形成されている。なお、床面には、特に整緻な部分は認められなかった。



第13図 H 4号住居址実測図(1:4)



第14図 H4号住居址出土遺物実測図(1:3)

第5表 H4号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	分位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
14-1	須恵 甕	口 胴	20 33.5 —	底部欠失のみではほぼ完形、胴部球形状にふくらみ。口辺部短くくの字状に外反する。	口辺～頸部ロクロ痕。 頸部下より格子状の叩目。	ロクロ痕。 指押え痕あり。	色調赤褐色。 焼成は悪い。 東南コーナー床直。
14-2	土師 甕	口	22.5 — —	口辺部くの字状に外反する。 器肉うすい。	口辺部ロクロ痕。 頸部下～胴上部 ヘラケズリ、	ロクロ痕。 指押え痕あり。	色調赤褐色。一部黒斑。 カマド付近。
14-3	土師 壺		13.5 4.5 6.0	口辺部は底部から直線状に開いて外傾する。 平底を呈する。器肉厚い。	ロクロ痕。 砂粒多く調整悪い。 底部糸切り	ロクロ痕。 砂粒表面に浮出て調整悪い。	色調灰褐色、一部黒斑あり。 東南床直上。
14-4	須恵 壺		13.0 4.0 8.0	口辺部は底部から内湾気味に開いて外傾する。 平底を呈する。器肉うすい。	ロクロ痕。 底部ヘラケズリ。	ロクロ痕。	色調灰色、一部黒斑あり。 砂粒多し、覆土下部。
14-5	土師 甕	底	— — 5.0	平底を呈する。 器肉うすい。	ヘラケズリ。 横斜にあり。	ナデによる平滑化。	色調赤褐色、一部に黒斑あり。 カマド内。
14×6	須恵 高台付 壺	底	— 9.5	高台の高さ 0.5mm、棱を有して 高台より直に立ち上る。	ロクロ痕。 底部糸切り。	ロクロ痕。	色調青灰褐色。 カマド付近。
14-7	砥石						

カマドは、北壁ほぼ中央に設置されていたものと考えられるが、遺存状態は極めて悪く、カマド位置と推定する個所に焼土が存在していたにすぎない。

ピットは、総計 6 基確認されている。このうち、主柱穴と考えられるものは、北東コーナー、北西コーナーで各 1、東壁南寄りに 1、西壁南寄りに 1 基検出されている。

遺物（第14図 1～7）

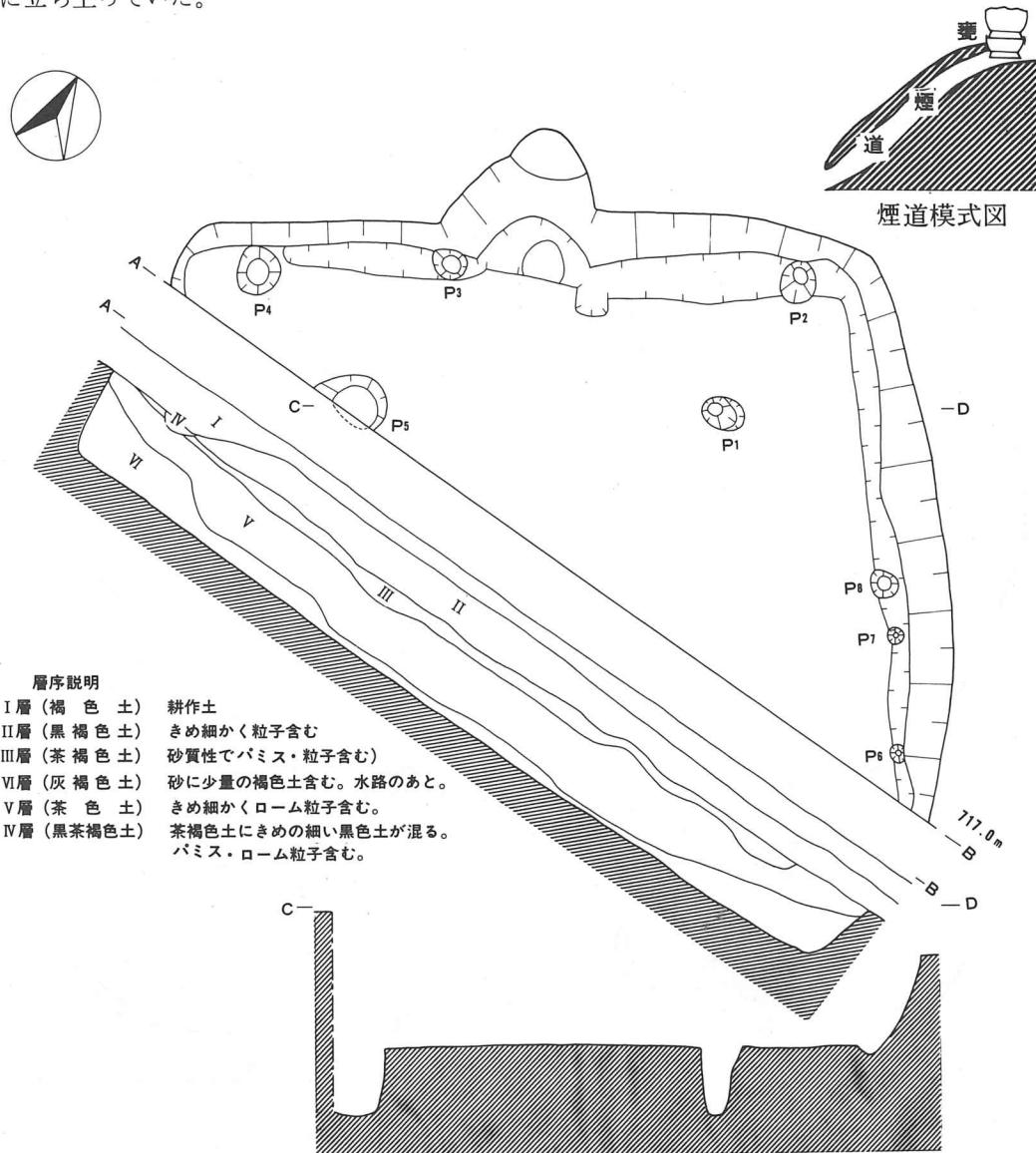
本住居址からは、土師器・須恵器の外、砥石が出土した。土器のうち、図示したものは、土師器 3 点、須恵器 3 点の計 6 点である。器形は、甕、壺、高台付壺がある。本住居址の土器組成も、煮沸形態と供膳形態と二大別される。なお、これらの土器は床面直上および床面出土のものが多い。また、1 の大形甕は南東コーナー壁ぎわに、7 の砥石で甕の底が動かないように押さえてあり、甕の中には灰がぎっしりつまっていた。本住居址の土器群は、国分期に比定されよう。

(花岡 弘)

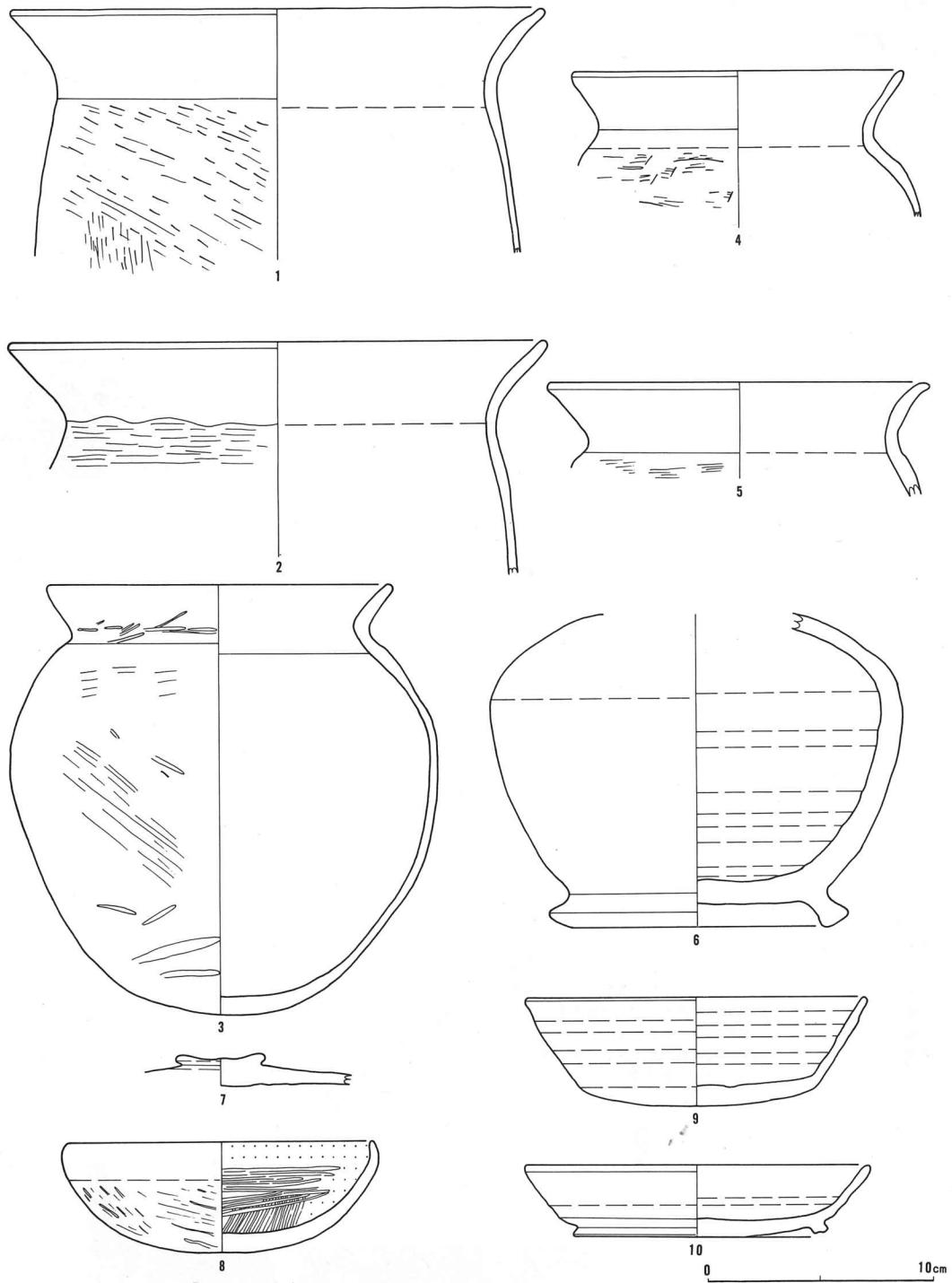
5) H 5号住居址

遺構（第15図）

本住居址は、き・く・け・こー9グリッドに位置し、本調査区域の最南端において検出された。遺構は、第2層上部にて確認され、平面プランは、北壁720cm、東壁約590cm、西壁約400cmを測る不等辺3角形の形態で、調査区ギリギリのため残念ながらプランの全容は把握でき得なかった。しかし、北壁が720cmであることからして、本調査区での検出遺構の中では最大の住居址となろう。主軸方位はN-21°Wを示し、壁高は、西壁において86cm、東壁で100cmを測り、ほぼ垂直に立ち上っていた。



第15図 H 5号住居址実測図(1:4)



第16図 H5号住居址出土遺物実測図(1:3)

第6表 H5号住居址出土土器一覧表

捕図番号	器種	分位	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内部)面	備考
16-1	土師甕	口 ↓ 胴 上	24.0 — —	口辺部外反するが、頸部～胴部にかけては直立ぎみである。器肉うすい。	口辺部横ナデ。頸部下より刷毛目後斜状と縦状のヘラケズリ。	頸部ヘラケズリ。 その他の面はナデにより平滑化。	色調赤褐色。 カマド煙道内。
16-2	土師甕	口 ↓ 胴 上	24.0 — —	口辺部外反するが、頸部～胴部にかけては直立気味である。器肉うすい。	口辺部横ナデ、頸部波状のヘラケズリ、頸部下は刷毛目後横方向のヘラケズリ。	ナデにより平滑化。	色調赤褐色。 カマド煙道内。
16-3	土師甕		15.5 19.0 7.0	口辺部くの字状に外反し、胴部球形状の丸味をおびる。丸底を呈す。器肉うすい。	口辺部横ナデ。頸部はヘラケズリ。胴上より底部にかけては刷毛目後斜縦のヘラケズリ。	口辺部ヨコナデ。 頸部よりナデ、指押えの痕あり。	色調褐色。 北東壁ぎわ。
16-4	土師甕	口 ↓ 胴 上	15.0 — —	口辺部くの字状に外反する。器形は3に類似するものとおもわれる。	口辺部横ナデ、頸部にヘラケズリの痕あり。胴上より底部にかけて刷毛目後ヘラケズリ。	口辺部ヨコナデ。 頸部よりナデ、指押えの痕あり。	色調褐色。 北東コーナー。
16-5	土師甕	口 ↓ 胴 上	17.0 — —	口辺部くの字状に外反する。器肉うすい。	口辺部横ナデ、頸部へラケズリ。頸部下刷毛目後横方向のヘラケズリ。	口辺部ヨコナデ。 頸部よりナデ、指押えの痕あり。	色調褐色。 北東壁ぎわ。
16-6	須恵壺	胴 ↓ 底	— — 13.5	大きく安定した高台は底部を呈し、肩部は張るが丸味あり。最大径は胴上部。	ロクロ痕。	ロクロ痕。	色調灰褐色。 P5内
16-7	須恵蓋		摘 み 4.0	扁平状の摘みを呈する。	ロクロ痕	ロクロ痕。	色調青灰色。 覆土下部。
16-8	土師坏		14.0 5.0 6.0	丸底で素縁口辺を呈する。	口辺部横ナデ。 底部荒い刷毛目調整後ヘラケズリ。	ヘラミガキ。 内黒。	色調褐色。 北壁ぎわ。
16-9	須恵坏		15.0 5.0 9.0	口辺部は底部より直線的に開いて外傾する。底部は弯曲した平底。器肉うすい。	ロクロ痕。 底部糸切り後の粘土カス付着し、その上部ヘラ先の条痕あり。	ロクロ痕	色調灰色。 北壁ぎわ。
16-10	須恵高台坏		15.5 3.0 11.5	高台より直に立ち上り、鮮明な稜を有する。口辺部外傾する。	ロクロ痕。 高台部にヘラ記号あり。 底部糸切り。	ロクロ痕。 底面に円形のロクロ痕あり。	色調青灰色。 カマド付近。

遺構内覆土の堆積状態は、第V層において壁に近いほど厚く、中央は浅い堆積であって、第IV層が中央に厚く、第III層・第II層がその上面に堆積し、自然堆積の様相を呈している。また、覆土内からの遺物出土は比較的少なかった。

ピットは、計8個検出された。P1は、北壁より150cm、東壁より140cmの位置にあり、径46×42cm、深さ72cmを測る。P4は、西北隅に検出され、径44×54cm、深さ20cmを測る。P5は東西に径80cm、深さ70cmを測り、南側は調査区域外に拡がっていた。P2・P3は北壁のカマドをはさんだ周溝内に検出され、径30~40cm、深さ15~30cmを測る。また、P6~P8は東壁の周溝内にあり、規模の小さい小ピットであり、補助柱穴とおもわれる。

なお、P₅は深さ約20cmの位置より、6の須恵器壺形土器が横になった状態で出土した。P₅は或いは土括か貯蔵穴的存在のものであったが、一部に張床が見出されたこと等から、埋めて柱穴に利用したとも考えられる。P₁・P₄・P₅は、位置、深さ等から主柱穴であろうとおもわれる。

カマドは、北壁のやや中央に位置し、破壊されていて、石は皆無であり形はほとんど残っていなかった。しかし、壁を舟先状に掘り込んで、舟先形の先端には、底部が破損した第16図1・2の甕を2重にはめ込んで、第15図の模式図に図示したように、煙道口として使用し、壁面はトンネル状に空道となっていた。

その他、周溝が西北の隅から東壁全体にわたり、巾15~50cm、深さ6~10cmの規模で巡っていた。

遺物（第16図1~10）

本住居址から出土した遺物は、比較的少なく図示し得たものは10点である。1・2は土師器で器肉が非常にうすい甕であり、共にカマドの煙道口に使用されていた。3は、土師器甕で胴部は球状をなし、丸底を呈す。北東の壁ぎわからつぶれた状態になって出土した。4・5共に口縁部は同形であり、同じく北東の壁ぎわであまり離れていない距離から出土している。6は、前述したP₅内より投棄された形で出土した。口辺部および高台の部分が破損している。7は、須恵器の蓋であり、摘み部分は扁平である。覆土下部からの出土であった。8は、土師器壺で、内黒丸底を呈し、特に外面は粗雑な調整がなされていた。9・10は須恵器壺であり、10は高台部にヘラ記号が施されており、器高が3cmである。他に鉄器2点が床面直上より出土しており、鏃であったとおもわれるが形状がはっきりしていないために判然としない。

本住居址は、甕形土器、須恵器壺・壺等から検討して国分期に比定されると考えられるが、8・10の壺形土器は真間期の影響があって、H5号住居址は真間期の影響をかなり残した国分期に比定されよう。

まとめ

本住居址は、調査区域の関係から完掘できなかったことは非常に残念であった。しかし、調査可能なギリギリの線まで調査した結果、次の2つの特徴が見出された。

その一つは、佐久地方では例の少ない、1mにもおよぶ深い住居址であり加えて大型であった。また、カマドの煙道がトンネル状に空道であり、煙道先端は長胴の甕を連ねて使用し、煙道口としていたことは大変興味のある事例である。

(三石 延雄)

2 周防畠遺跡出土の鉄器（第17図）

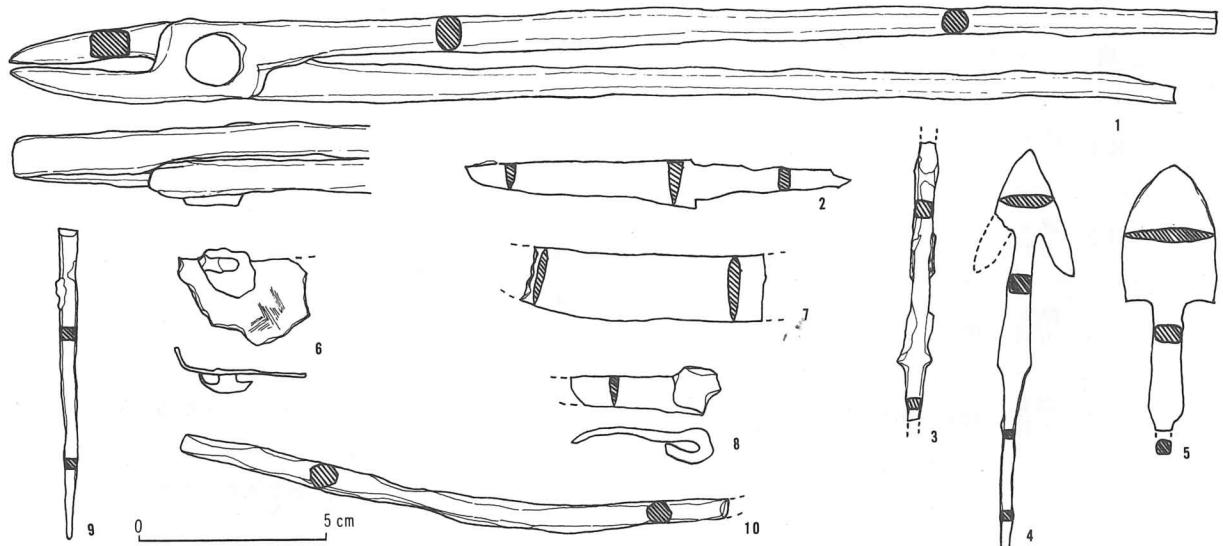
本遺跡出土の鉄器は図示したとおりで、鉄鉗・鉄鎌・刀子・鉄釘・等で他に用途不明の鉄器、(6～8)がある。1は、全長32.2cm、幅2.3cmの鉄鉗で、柄長27.8cm、梗厚0.7cmを計る第2号住居址、南壁上から出土した。2は全長10.3cm、刃幅1.3cmを計る刀子で第1号住居址床面から出土。3～5は鉄鎌で、4が第3号住居址より検出されている。6～8は用途不明鉄器で6の両面に木質痕が認められ、7は、鉄鎌状を呈するが判明はしない。8は断面が刀子の一部と推定される。7が4号住居址、カマドから、6が第1号住居址から検出をみている。9～10は、9が第5号住居址カヤドより検出され、鉄釘と推定される。10は形態不明である。

以上周防畠B遺跡の鉄器を述べたが、住居址外のピットに伴う焼土の存在からして、生産工具の工房址には比定されないものの、佐久平住居址出土の鉄器は稀有であり、鎌は古墳の副葬品として伴出しており、実年代の比定が可能になる。ここで用途不明鉄器については、類例の検出をみるとこととし、近年新しく確認された用途不明金具について述べたい。

東一本柳古墳副葬品中、報告書第13図7～8、9～10、第14図9～16の木質が残存する青銅製のもので、飾金具を扱ったが、千葉県特塚7号古墳（註1）出土品から、飾り弓の金具として確認されたので加筆訂正したい。同種のものは、県下では、浅科村土合一号墳、東部町右近塚から認められ、全国的分布では、関東に多い傾向となっている。

佐久地方、用途不明鉄器片には充分注意し、後日再集成を試みたい。（土屋 長久）

（註1）田中新史「古墳出土の飾り弓」『伊知波良』1、昭和54年 伊知波良刊行会。



第17図 周防畠遺跡出土鉄器(1:2)

V 総括

第1節 周防畠遺跡の遺構・遺物

周防畠遺跡群は、從来より弥生時代中期～後期の大遺跡として周知されていたが、今回調査した地籍からは、平安時代にあたる住居址5、溝状遺構3、ピット状焼土3が検出された。

付近は、西接する字渋右衛門地籍から平安期の多量な布目瓦がみられ、付近の遺跡群は古東山道筋にも該当し、かねてから注目されていたが、新たに平安時代の住居址群の調査に伴い、種々興味ある問題点を提示するに至った。

信濃資料第1巻の地名表によれば次のように記されている。

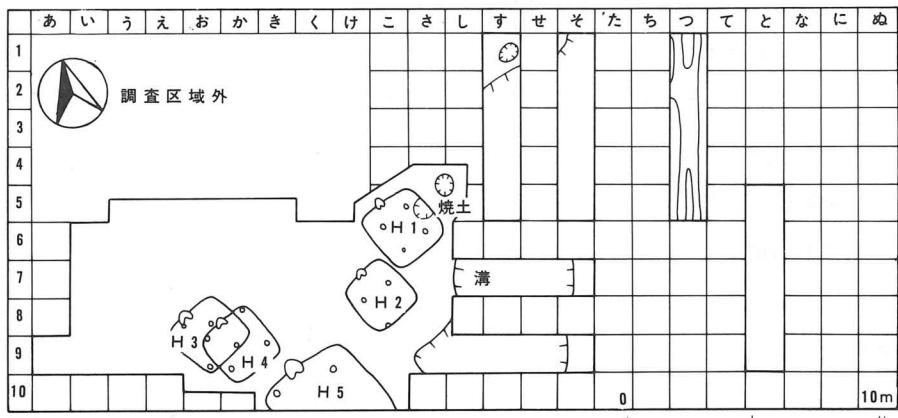
○1543 長土呂 周防畠（弥）百瀬式一壺・その他破片 岩村田小学校蔵

本遺跡から検出された遺構の遺存状態は、極めて良好であり調査区の関係上、H5号住居址は完掘でき得なかった。したがって集落はこのH5号住居址から南方にのびるものと思われるが、集落址の一部分の調査にとどまってしまった。

各住居址の平面プランは隅丸方形を呈し、カマドを中心とした主軸方向は、N-19°・21°・24°・25°・27°-Wを計り、各住居址ともカマドの方向はほぼ平行に配列している。カマドは、石と粘

第7表 周防畠遺跡検出住居址一覧表

遺構	平面プラン					主軸方位	壁高	カマド	柱穴	時期	備考						
	形態	規模															
		北壁	西壁	南壁	東壁												
H 1	隅丸方形	470	450	430	440	N-27°-W	34 42	北	4	国分							
H 2	隅丸方形	380	400	420	420	N-25°-W	50 74	北	3	国分							
H 3	隅丸方形	480	510	480	510	N-24°-W	46 76	北	2	国分	H 4号住と重複する。						
H 4	隅丸方形	420	460	440	443	N-19°-W	65 88	北	4	国分	H 3号住と重複する。						
H 5	—	720	—	—	—	N-21°-W	86 100	北	—	国分	調査区外のため半分調査。						



第18図 周防畠遺跡遺構全体図(1:200)

土によって構築されており、H 1号住居址では石組に使用された軽石が床面に散乱していたが、H 2号住居址は、一部分石組が良好に残っていた。また、H 5号住居址では、石は1ヶも残存しておらず、煙道口に土師器甕を2個体重ねて用いたものが観察された。さらに、H 3号住居址のカマド上部より、須恵器の四耳壺が検出された。この壺は、従来火葬墓の蔵骨器として使用されているが、住居址調査例としては佐久地方の初見である。

その他の内部施設としては、H 2・3号住居址のカマド右脇に灰落し的存在的な落込みがあり、左側には、住居址コーナを利用して築いた施設の掘り込みが存在していた。主柱穴は各住居址内より2本～4本にわたって確認された。また、住居址内の覆土がきわめて厚く、特にH 5号住居址では、86～100cmを計測した。したがって壁の立ち上りは、各住居址ともほぼ垂直に近い状態であった。堅穴の構築では、基盤である田切地形の火山灰土壤直上まで掘り下げ、ロームを2cm程張床とし、地形が南にわずか傾斜するため、南側が厚めとなっている。住居址の規模は比較的大型で、特に完掘に至らなかったH 5号址は北側1辺が7mにもおよび本集落址の中心的建物とおもわれるが、今回の調査区域はここでとどまったが、規模からして上屋構造との関係も興味ある今後の課題となろう。

H 3号住居址とH 4号住居址の重複関係は、H 3号址のプランがH 4号址の重複部分において明確に認められ、床面の高低差はH 3号址がH 4号址に比して28cm程高くなっている。H 3号址構築の際、H 4号址のカマドを中心とした北壁の重複部分が破壊されており、したがってH 4号住居址が先行し、H 3号住居址が新しくなる。よって同じ国分期であっても2～3時期にわたって集落が営なまれていたことが想定できよう。

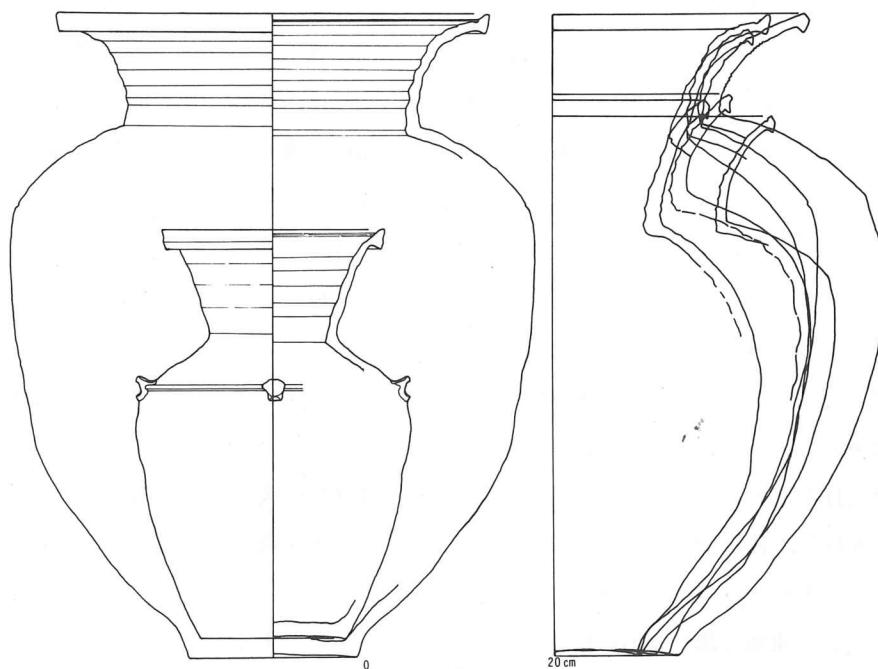
また、集落の東側に溝が認められたが、中世に降するものである。さらに、焼土のピットが3基検出されたが、その性格に関しては判然としていない。

本遺跡出土の遺物については、IV章で詳細に述べられているので、ここでは新しい事実、遺物の特質についてふれてみたい。

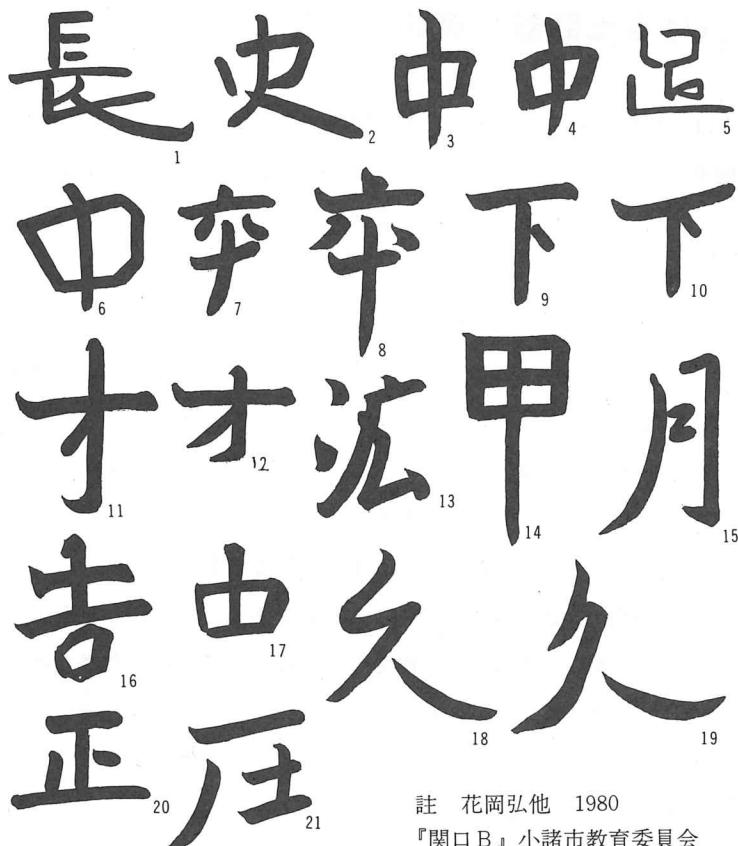
本遺跡より出土した遺物で図示し得たものの器種は、次のように大別される。須恵器甕3、土師器甕9、同台付甕1、須恵器壺2、同蓋6、同坏8、土師器坏18、高台付須恵器坏2、同土師器坏2、土師器盤3、等であり、若干土師器が量的に多いようである。器形もバラエティーに富み、加えて鉄器の鍛治用工具鉗の出土により貴重な資料を提示している。

佐久地方における須恵器の編年概観は、窯址の調査が北御牧村八重原等数例の調査のみで、その編年的研究は進展していない。古墳の副葬品、あるいは火葬墓の蔵壺器として顕著にみられるのが現状である。比較的多量の須恵器が検出されているのが、佐久市岸野、休石遺跡である。（第19図）この遺跡からは、口径40～50cm、高さ60～70cmを計る完形の大甕6、四耳壺1、長頸壺2、甕2、等が、鉄鋤、刀等と共に出土し、四耳壺は本遺跡H3号住居址出土品とよく類似し、佐久地方、御牧ヶ原、御馬寄、市道から発見され、東国独特の産とされているものである。布目瓦と共に八重原、御牧ヶ原の窯址から検出されており、火葬墓群は、儘田、上桜井北遺跡等、片貝川流域に顕著な分布のあり方を示している。

また、H4号住居址南東コーナから出土した、須恵器甕は焼成が不充分で赤褐色を呈しており、いわゆる半生的の状態であり調査例としては初見であろう。H5号住居址出土の長頸壺は、儘田遺跡H4号住居址より同様のものが出土している。



第19図 佐久市岸野休石遺跡出土の須恵器大甕及四耳壺(1:9)



註 花岡弘他 1980
『関口B』小諸市教育委員会

第20図 佐久平遺跡出土の土師器に描かれた墨書

墨書土師器は、「中」、「足」、「長」、「史」がみられ、刻書に「中」があり、なお既出物に「大井」と刻書されたものが、西接する字渋右エ門遺跡から出土している。

佐久地方の土師器に描かれた墨書を集成したのが第20図である。本遺跡が1～6、佐久市新子田戸坂遺跡が7～14、佐久市上桜井北遺跡が15～17、佐久市東一本柳古墳副葬品としてのものが18～19、小諸市松井遺跡が20、小諸市東中敷地遺跡が21、で毛筆で復元したものである。文字は判読できるが、13が法の字の旧漢字、14が申とも甲とも考え

られ、17は、中と解される。筆は豪毛の使用と推定され楷書で、日本風と解される。

鉄器中に、H2号住居址から鉗が出土し、從来古墳副葬品に検出されているが、住居址出土例の初見である。竪穴住居址の柱等にかけられていたものが、壁上中間からの出土と解される。これにより焼土状のピット3基は、鍛冶場と関連するものかと想定したが、その性格は解明出来得なかった。

また、本遺跡から布目瓦小片が出土したが、西接する渋右エ門遺跡から多量の布目瓦が出土しこれを官営建築址、寺院址と考古学上推定され、さらに八重原窯址より布目瓦の出土もあり、佐久地方官寺址とみるのが妥当と考えられるが、今回の発掘地域からは、寺院址等に伴なう遺構は発見されなかった。以上の所見を総合して、本遺跡の年代は11～12世紀に比定されるが、H4・5号住居址は9～10世紀代にさかのぼると考えられる。以上、簡単に略記したが、まとめとしたい。

(由井 茂也、土屋 長久、木内 捷、島田 恵子)

第2節 佐久平における土師器の概観

長野県における土師器の研究は、昭和29年の平出遺跡の調査⁽¹⁾以降、活発化してくる。すなわち、
これ以降、県下においては、桐原 健・岩崎卓也・笹沢 浩・宮沢恒之の諸氏により、地域的な
編年が提出されてくるわけである。こうした中にあって、土師器研究の最近の動向としては、そ
の技術論および小地域での編年作業という二点が活発化してくることが掲げられよう。

では、佐久平の研究史はどうであろうか。簡単にふれておきたい。知見する範囲では、昭和39
年に岩崎卓也氏により佐久平の土器群が取り掲げられたことが研究の開始と考えられる。氏の用
いられた資料は、当時は発掘調査が行なわれていなかったため、北佐久、南佐久の既出資料12点
を紹介している。そして、「善光寺平地区にも類似点がみられはするが、概して北関東地区の在
り方により近似性が強いように見受けられる。」こと、「大形甌は把手をつけるのが一般的のよ
うである。」の二点を指摘されている。さらに、「特に個性を有するような土器群がない、いわば
周辺地区としての性格がみられることは、十分に注目すべきことがらであろう。」という注意すべ
き指摘を行なっている。その後、昭和40年を前後して、県内でもいわゆる緊急発掘が急激な増加
を示すようになり、これは、佐久平でも例外ではなかった。その結果、いくつかの報告書が提出
されてきている。しかし、それは個々の遺跡の土器群を総括したものであり、遺跡相互間の土器
のもつ差というものは、その類似点の指摘するだけにとどまっているものが多い。けれども逆に
言うなら、あるいは、これは、発掘→報告書作成というパターン化した緊急調査内においての研
究者の最大限の努力とも言えるかもしれない。こうした中、昭和51年に佐久市市道遺跡の報告書
⁽⁷⁾⁽⁸⁾が刊行された。中でも、今井正晴・村山好文両氏によりなされた土師器の総括は、土師器研究の
上に大きな一石を投じたものと考えている。少なくとも、土師器の見方というものが、これ以降
の研究に与えたものは大きかったと思われ、一つの土器の実測図にもそれが反映されるようになったことも事実である。

このように、いくつかの遺跡の調査がなされ、資料が増えてきた時点において、筆者は、佐久
市を中心とした佐久平の土師器の大略について一瞥したことがあった。しかしながら、これは紙
数も限られ、また筆者の力不足から、遺跡・住居址名を掲げただけの、いわば、個人的な覚え書
程度のものであった。以上、研究の概略を簡単にたどってみた。

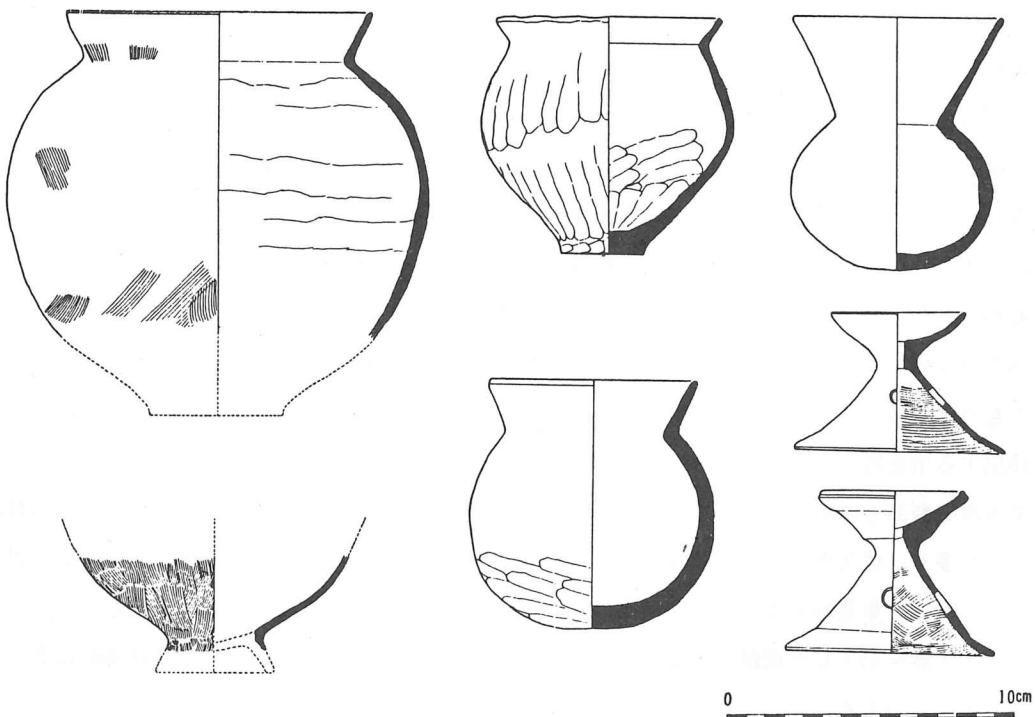
それ以降、佐久市を中心とした地域あるいはその周辺地域においても、特に、古墳時代後期を
中心とする資料が増加しており、改めて、小稿を作成することとなった。なお、小稿では、
第Ⅰ期～第Ⅴ期という時期区分を使用することとした。南関東地方の編年では、第Ⅰ期が五領期、
第Ⅱ期が和泉期、第Ⅲ期が鬼高期、第Ⅳ期が真間期、第Ⅴ期が国分期にそれぞれ該当する。なお、
この時期区分はあくまで便宜的なものであり、編年上の混乱を招くことは本意でないことを、予
めお断りしておきたい。

第Ⅰ期

前半の資料には恵まれていない。県内における弥生土器から土師器への推移については、筆者も触れたことがあったが、おそらく、千曲川流域においては上山田町御屋敷、上田市梓木で見られたような土器群とほぼ同様な系譜をたどったものと考えられる。一方、佐久平の後期弥生土器については、最近、臼田武正氏が発表されている。⁽¹³⁾また、筆者も、弥生土器に接続する土器について、少数ではあるが、佐久平の資料を用いて考えたことがある。このように、第Ⅰ期前半の良好な資料が発見されるなら、弥生時代後期から古墳時代に至る土器の流れを段階的にたどることが可能となろう。

続く後半は、佐久市今井西原H1号住居址出土品を掲げ得るのみである。器形には、甕、台付甕、小形甕、小形壺、堆、坏、小形器台があり、この時期に存在する有段口縁の壺、 笹沢 浩氏の言われる鉄かぶと形の堆、高坏を欠いている。⁽¹⁵⁾

住居址形態は、1辺が5mの隅丸方形を呈し、住居址中央部やや北寄りに貧弱な地床炉を有している。



第21図 第Ⅰ期後葉の土器(今井西原遺跡H1号住居址)

第II期

前半と考える資料はなく、後半と考える資料は第III・V期に次いで多くなってきている。該期資料を出土した遺跡は、徐々に増加しつつあるが、ここでは代表例として、市道遺跡第2号住居址および第3号堅穴状遺構を掲げておきたい。⁽¹⁶⁾ 器形として、甕、壺、甌、埴、高坏、坏などがある。特に、高坏の出土が多く、また、バラエティーに富むことが一つの特徴となっている。⁽¹⁷⁾ 出土状態も考慮した上で、この高坏の在り方は注意しなければならないであろう。また、この時期に第I期の須恵器を伴出する可能性もある。⁽¹⁸⁾

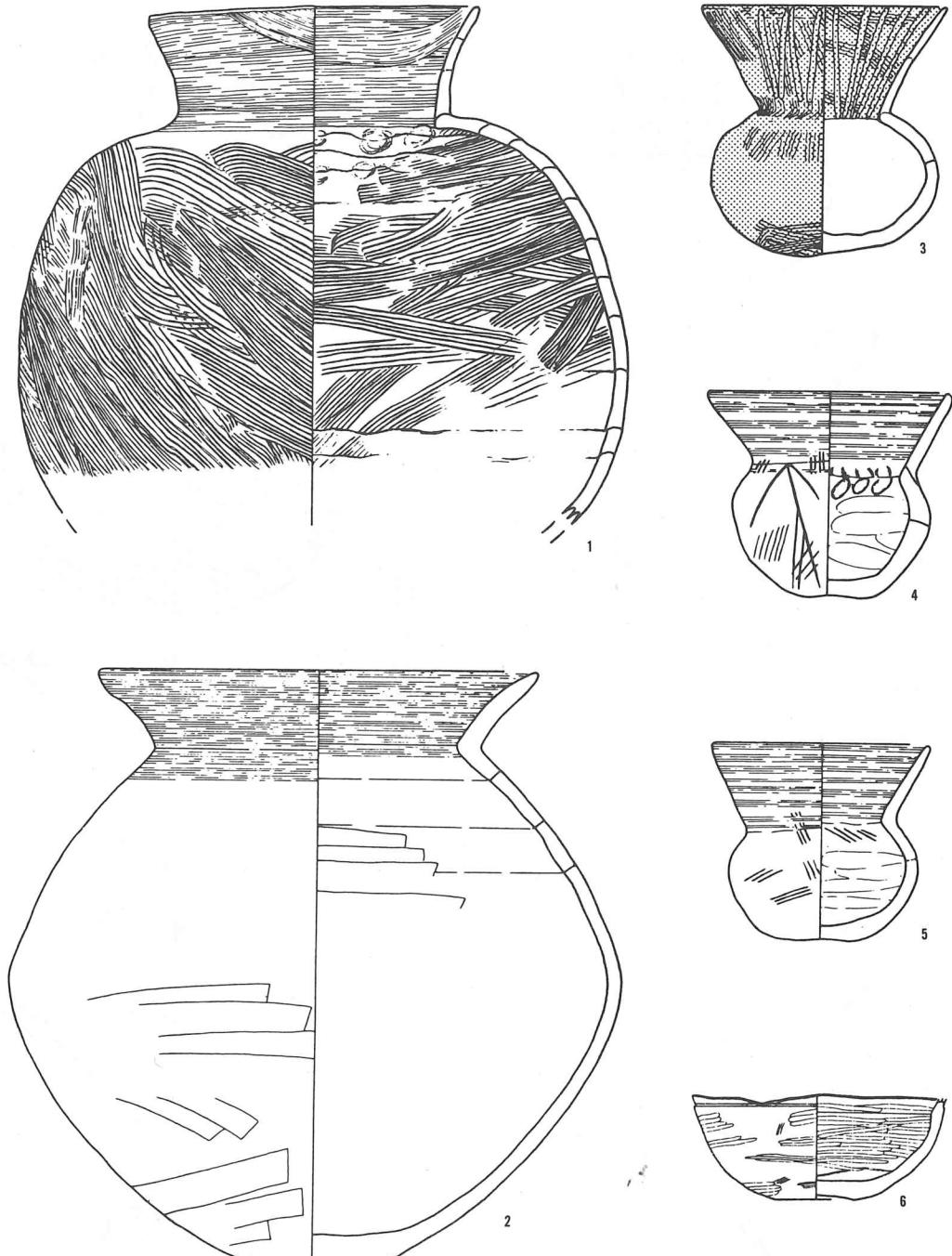
第III期

鬼高式土器に併行する。一般に、鬼高式土器はI式とII式に区別されているが、ここでは、前葉、中葉、後葉と三分しておきたい。このうち、I式が前葉、II式が中葉にあたり、後葉は新たに独立させたい。⁽¹⁹⁾

まず、前葉には、市道遺跡第8号住居址出土土器をあてたい。器形としては、甕、甌、椀、坏がある。また、最近、報告書が刊行された白田町井上遺跡H2・H3・H4号住居址もほぼ同時期に比定される。⁽²⁰⁾ 特に、市道遺跡第8号住居址で知られなかった土器のセットに、壺、須恵器の模倣と考えられる把手付甌、高坏、手捏ね土器を加えることができた。なお、井上遺跡の把手付甌は、佐久平では初現をなすものと考えられる。坏には、素縁のものと前時期の系譜を引くと考えられる口辺部の外反するもの、内傾斜するものがある。また、高坏、坏は形態ばかりではなく、成形、調整の点においても前時期から踏襲しているものが多い。また、井上遺跡では確実にカマドがあり、長胴の甕が出土している。

続く中葉の土器の量はかなり多い。したがってここでは主要な遺跡数例を示すにとどめておきたい。なお、中葉の土器群も細分される余地を多分に残しているが、その検討は他日に期したい。器形としては、壺、甕、甌、埴、高坏、坏、手捏ね土器がある。壺は、球形胴を呈するものがあり、雍は、ハケメを多用したものがある。坏には、素縁のもの、須恵器を模倣したもの、いくつかのバラエティーがある。(第30図) また、内色を黒色研磨したものが多く、赤色塗彩されたものは、僅かではあるが存在する。埴は、長頸化したものが一部に残存する。これらの土器と伴出する須恵器は第II期のものが数例知られている。(第31図)。また、土器の外、白玉を中心とする滑石製品も確実にこの時期まで認められる。前述したように、中葉の土器を出土する遺跡はかなり多く、佐久平では一つ画期をなすと思われ、後期古墳群の在り方を考える上で重要と思われる。特に、集落址と古墳群との関係は、今後に残された課題である。なお、前後したが、この中葉の土器を出土した遺跡の主なものとして、市道遺跡第4・7・9号住居址、跡部町田H1・2号住居址がある。

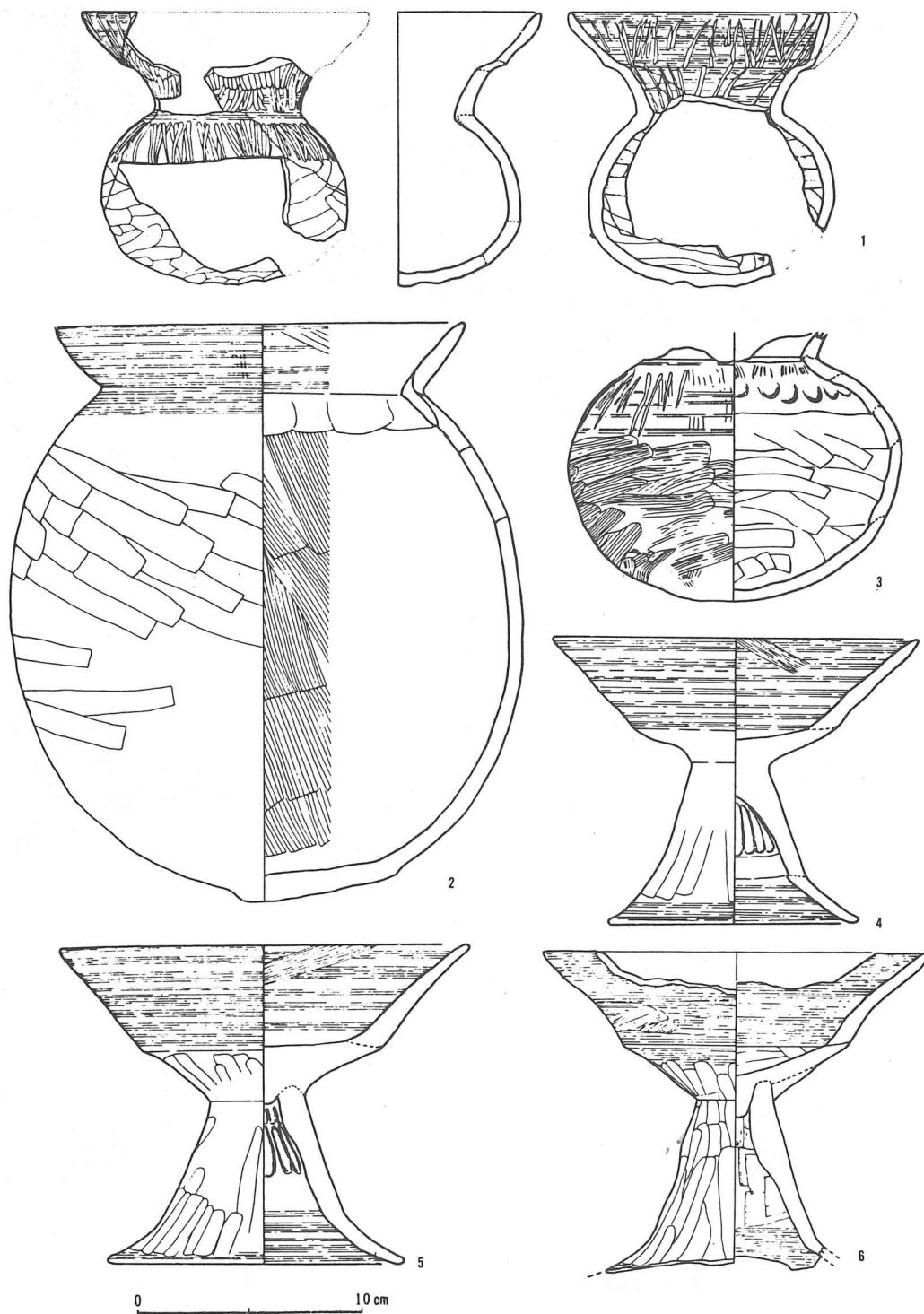
これに対して、後葉の資料は案外知られていない。佐久市内では、上桜井北遺跡の調査者が、⁽²³⁾



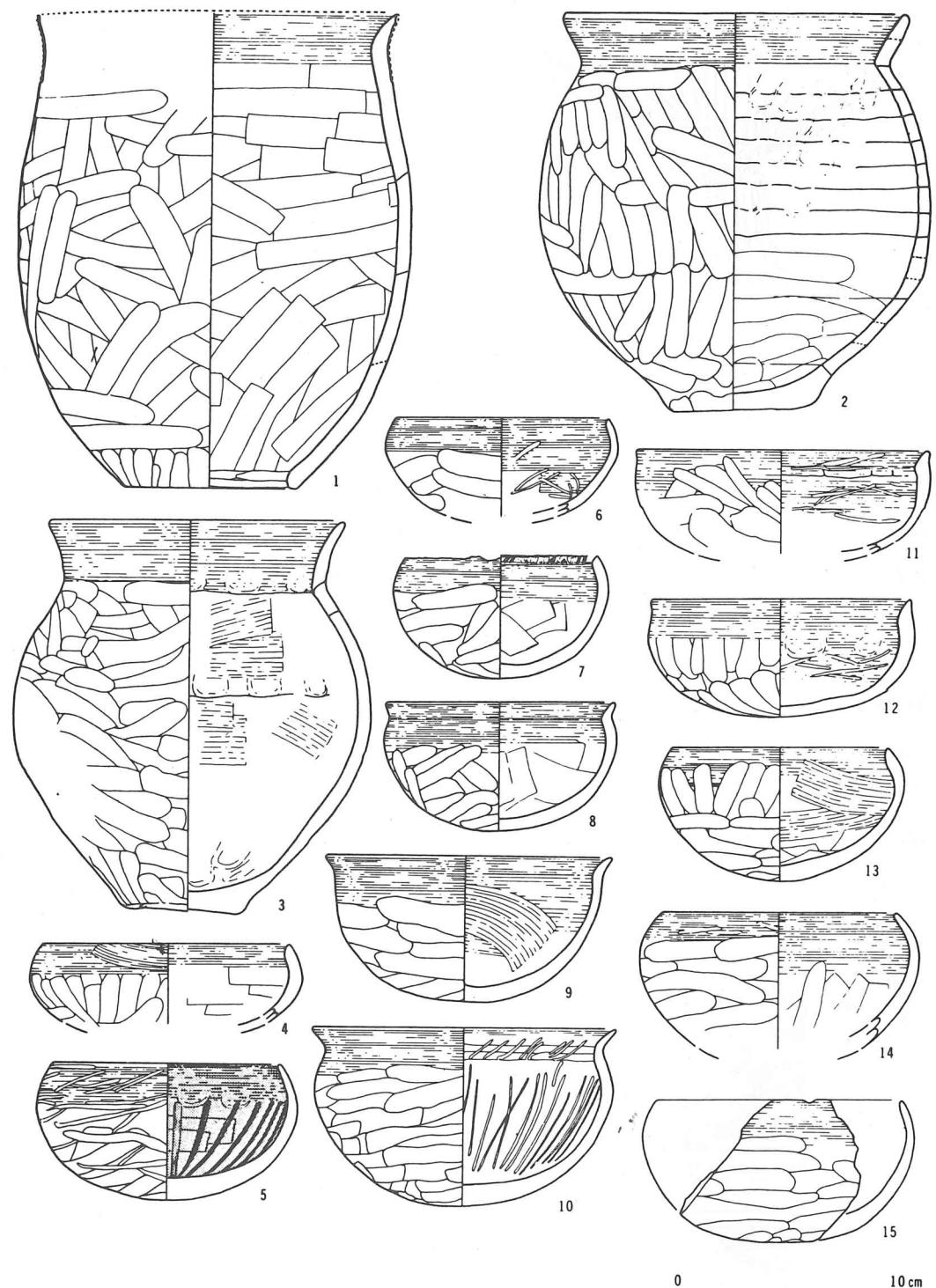
1・3 第2号住居址出土。他は第3号竪穴状遺構

0 10 cm

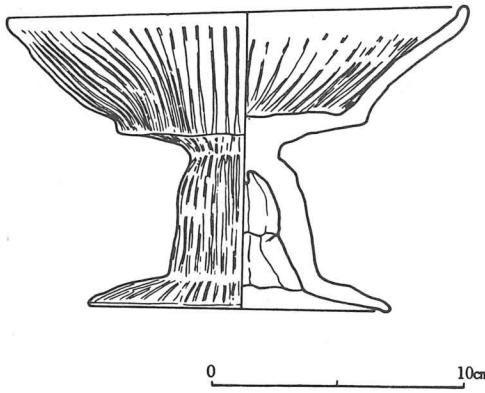
第22図 第II期後葉の土器(A)（市道遺跡第2号住居址及び第3号竪穴状遺構出土）



第23図 第II期後葉の土器(B)（市道遺跡第3号竪穴状遺構出土）



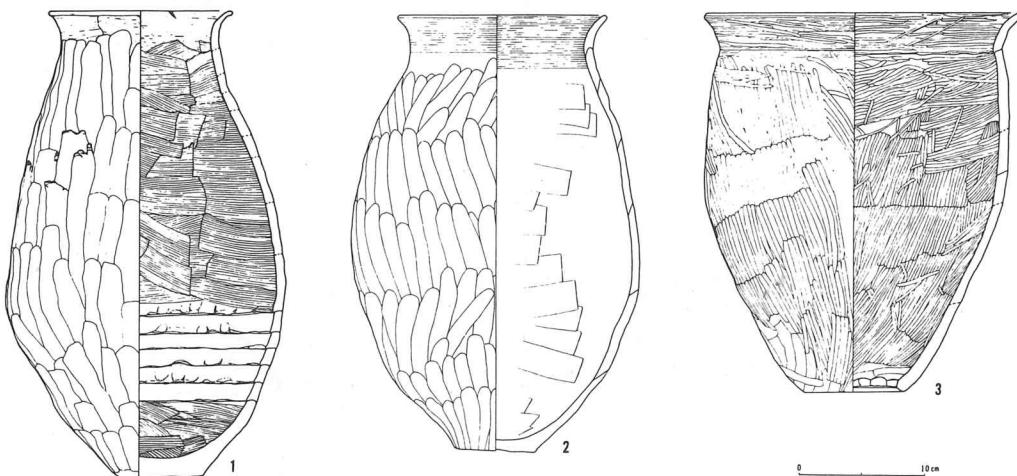
第24図 第III期前葉の土器(市道遺跡第8号住居址)



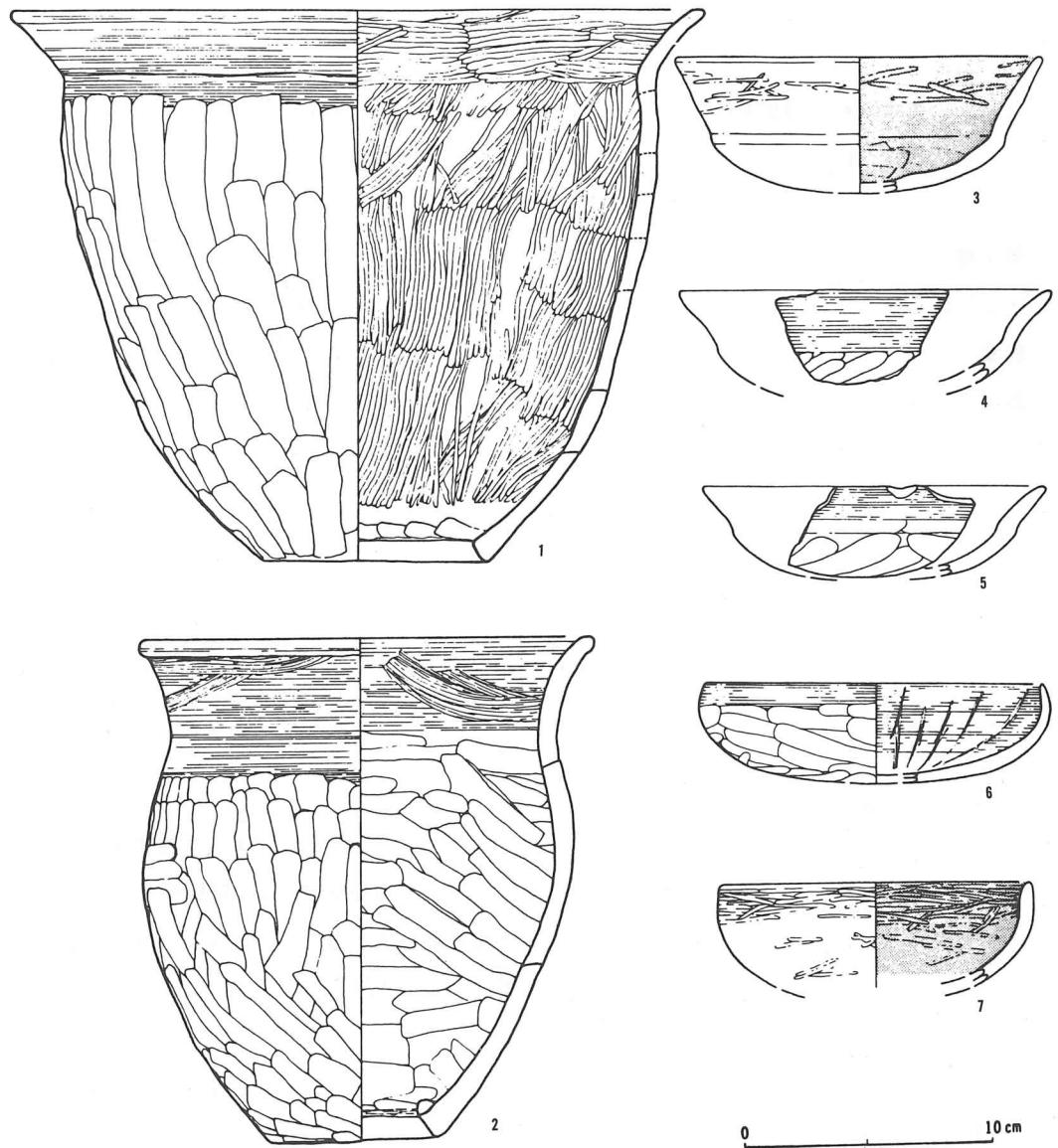
第25図 第III期前葉の高環

遺構の重要関係および型式論的分類により、H 4号住居址を後葉、H 8号住居址を終末に位置付けている。確かに、上桜井北の資料は、中葉よりも後出するものと把えられるが、時期決定に関する手続きに問題がないわけではない。まず、H 8号住居址を鬼高期末に位置付けした根拠として、須恵器を伴出していないことを掲げている。佐久平では、第III期中葉においても、全住居址から須恵器が出土しているわけではなく、須恵器が伴出するかしないかで、時期決定を行なうのは、あまりにも危険ではあるまいか。

また、佐久平のみならず、東国においては、須恵器の稀少さゆえに、その憧れから、須恵器の模倣を行なっているわけである。⁽²⁴⁾ 佐久平では、この時期の須恵器窯址は未確認であり、もし須恵器が伴出するとなれば、搬入品の可能性が強い。この地で須恵器が普及するのは、平安時代になってからであり、そしてそれは、御牧原台地を中心とした窯で須恵器生産が開始するのを待たなければならない。一方、口縁端部をめぐる沈線を施した甕の類例として、東京都落合遺跡・千葉県須和田遺跡の外、近くは市道第4号住居址出土例を掲げている。この三遺跡のうち、市道例は鬼高中期中葉とされ、落合・須和田例は真間式土器の範疇に入るものである。果たして、これほどの時間差・地域の範囲での比較・検討は妥当であるのかどうか。筆者が、市道例を実見した範囲では、須恵器甕の口縁部形態の模倣を意図したものとも考えられる。



第26図 第III期中葉の土器(A)（市道遺跡第8号住居址出土）



第27図 第III期中葉の土器(B) (市道遺跡第4号住居址出土)

筆者が関係した、小諸市関口B遺跡でも、鬼高窯後葉の土器群について若干触れておいたが、もう少し資料の増加を待って、改めて検討したいと考えている。⁽²⁵⁾

なお、佐久平の第III期の土器に、底部に木葉痕をもつ甕が、筆者の知見する範囲では、数例あることを付記しておきたい。

第Ⅳ期

真間式土器に該当する。この時期は、佐久平において最も不明確な時期であり、この時期に関しては、今後の資料の増加を待ちたい。したがって該期の好例を鶴首しつつ、一応、ここでは、空白としておきたい。

第Ⅴ期

平安時代という長い時代ということもあるが、この時期の資料も多い。

前葉

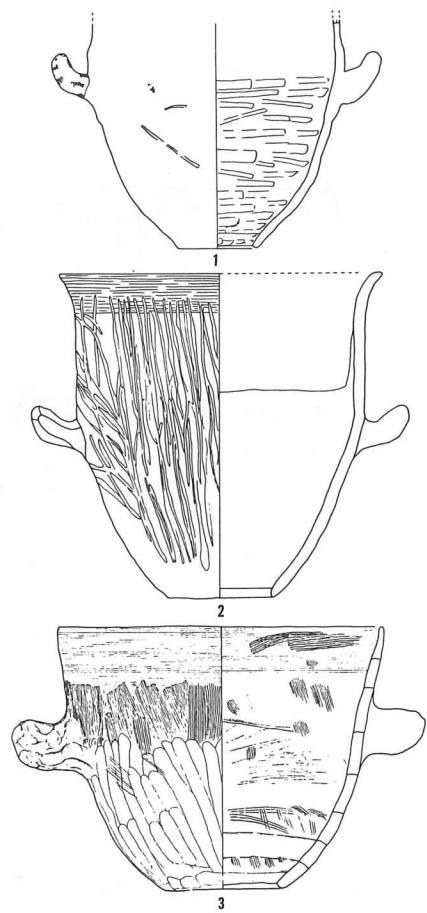
器形は、煮沸形態と供善形態に大きく二分される。甕、台付甕・壺・高台付壺・高台付皿がある。また、この時期には、土師器の製作にロクロが用いられている。土師器壺には、糸切痕をと

どめるもの、さらに糸切痕をヘラケズリによって、消したものがある。また、内面を黒色研磨されたものが多い。また、甕の成形にもロクロが使われており、糸切りによりロクロ上から離された後、胴部をヘラケズリにより調整している。また、須恵器もかなり併出しており、地方窯での須恵器生産が行なわれていることを示す一つの傍証となっている。また、墨書き土器の出土例も増加しており、発掘資料では、佐久市戸坂K1号住居址、同・岩村田東一本柳古墳、同・上桜井北H1・H6号住居址、小諸市関口B遺跡⁽²⁶⁾の外、今回、本遺跡の出土例を加えることができた。

また、土器以外では、砥石の出土が比較的多くなってきている。一方、住居址形態では、平面プランの不整のものが多く、小規模化する。内部施設では、石組みのカマドの例が多く、柱穴、貯蔵穴がはっきりしないものが増える傾向が一般的に認められる。

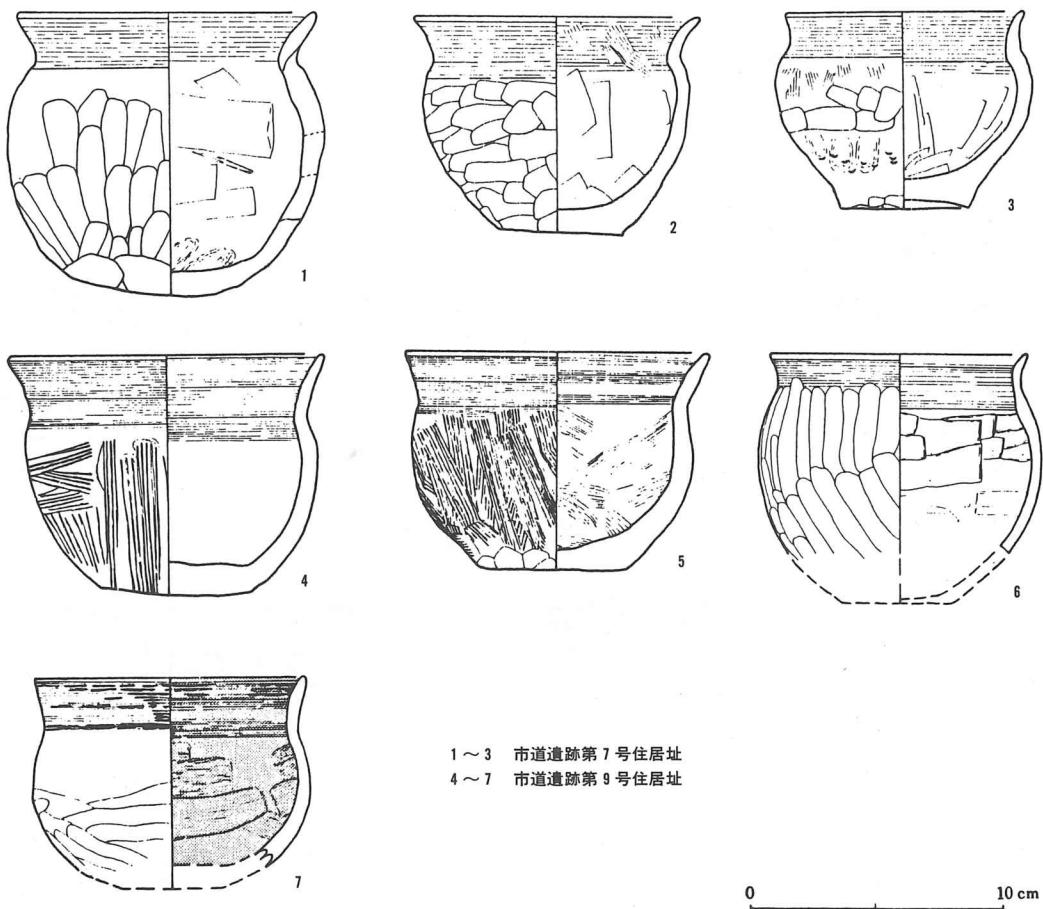
中葉

前葉の器形の外、灰釉陶器が併出する。この灰釉陶器の存在が、佐久平でも明らかになりつつある。この時期の該当するものとして、佐久市三塚鶴田遺跡H1・3・4号住居址がある。土師器甕形土器は



1. 井上遺跡H2号住居址
2. 跡部町田遺跡H2号住居址
3. 市道遺跡第1号住居址

第28図 第III期の把手付甕



第29図 第III期中葉の小形甕形土器

良好な資料がないが、土師器壺、高台付壺、灰釉壺、椀、皿がある。また、須恵器甕が残存している可能性が多分にある。

後葉

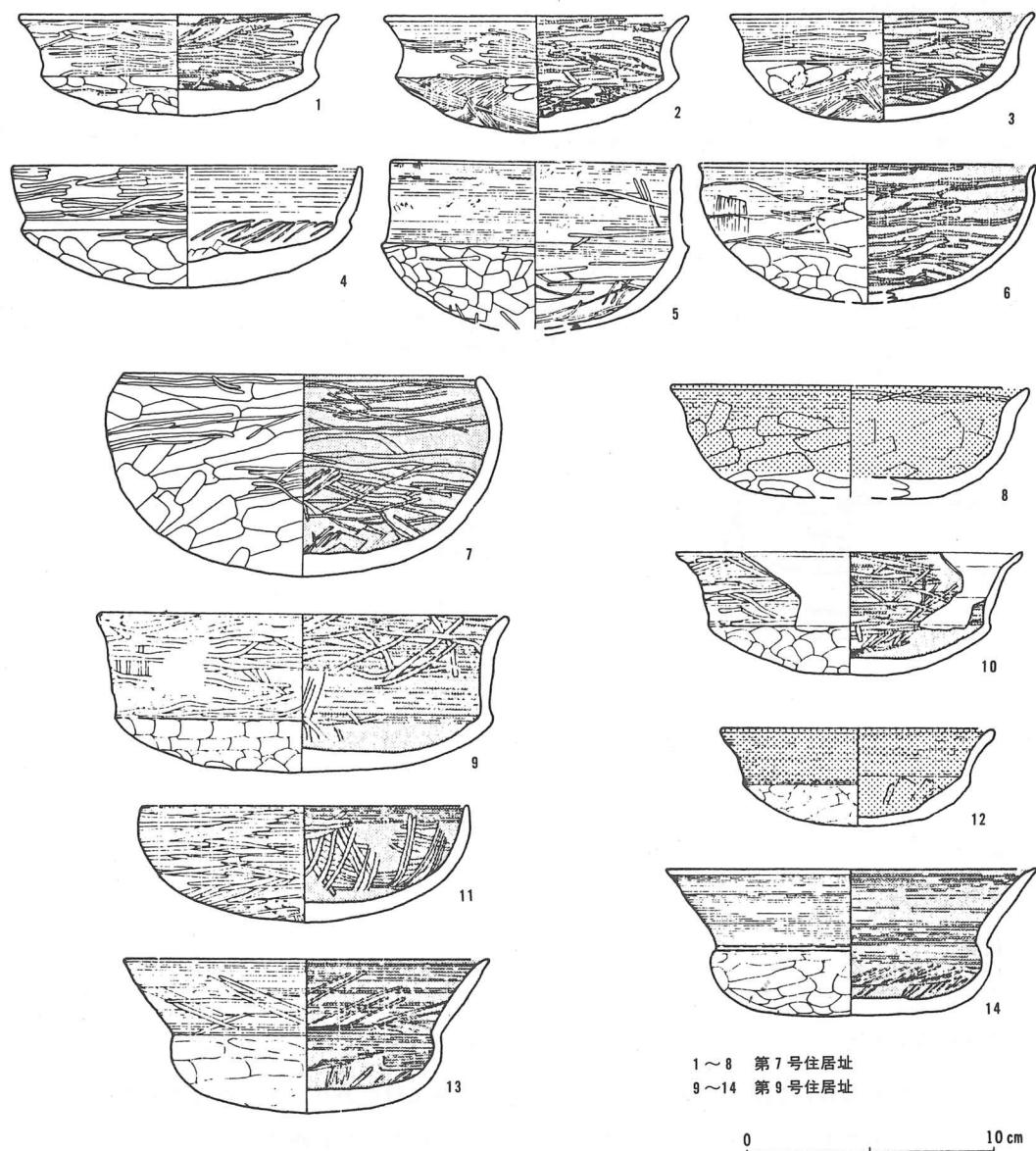
鍔釜、カワラケに近い壺が存在するとと思われるが、確実に住居址に伴なうと考える資料は、現時点では存在しない。この時期も、好資料の出現を待つことにし、その予測にとどめておきたい。

第V期については、代表的な遺跡として佐久市上ノ城遺跡があり、その報告書の段階で、明らかにされることであろう。一日も早く、報告書が刊行されることを期待したい。

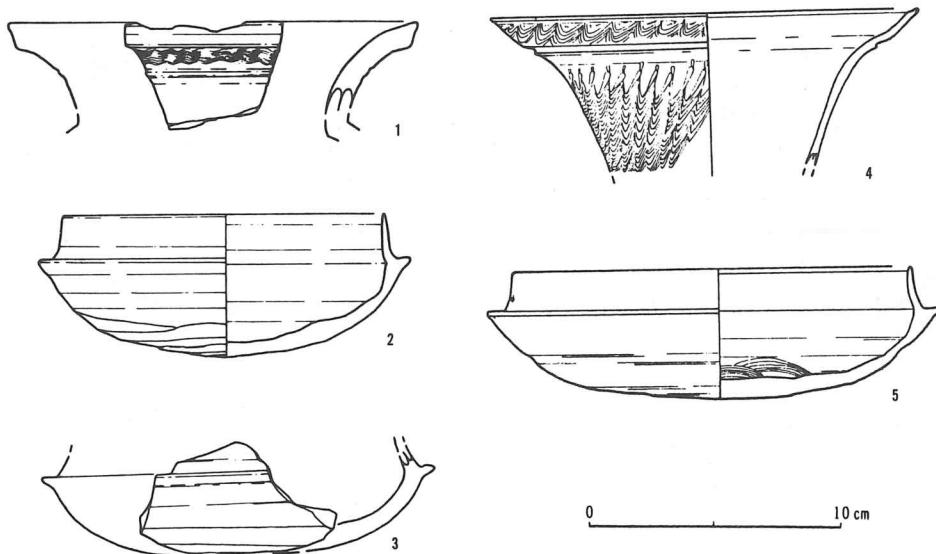
以上、佐久地方の大まかな土師器の流れを瞥見してきた。中には、第I期前半、第IV期のよう

に好資料がなく、断続的になってしまった。また、第III期中葉としたものは、多分に細分される可能性を有しているように思う。

言うまでもなく、土師器のみならず、土器の編年作業は止むことなく続けられるべきものであり、そうした意味において、小稿が出発点としての敲台となれば幸いである。



第30図 第III期中葉の環形土器(市道遺跡)



1～3 市道遺跡第4号住居址

4・5 市道遺跡第7号住居址

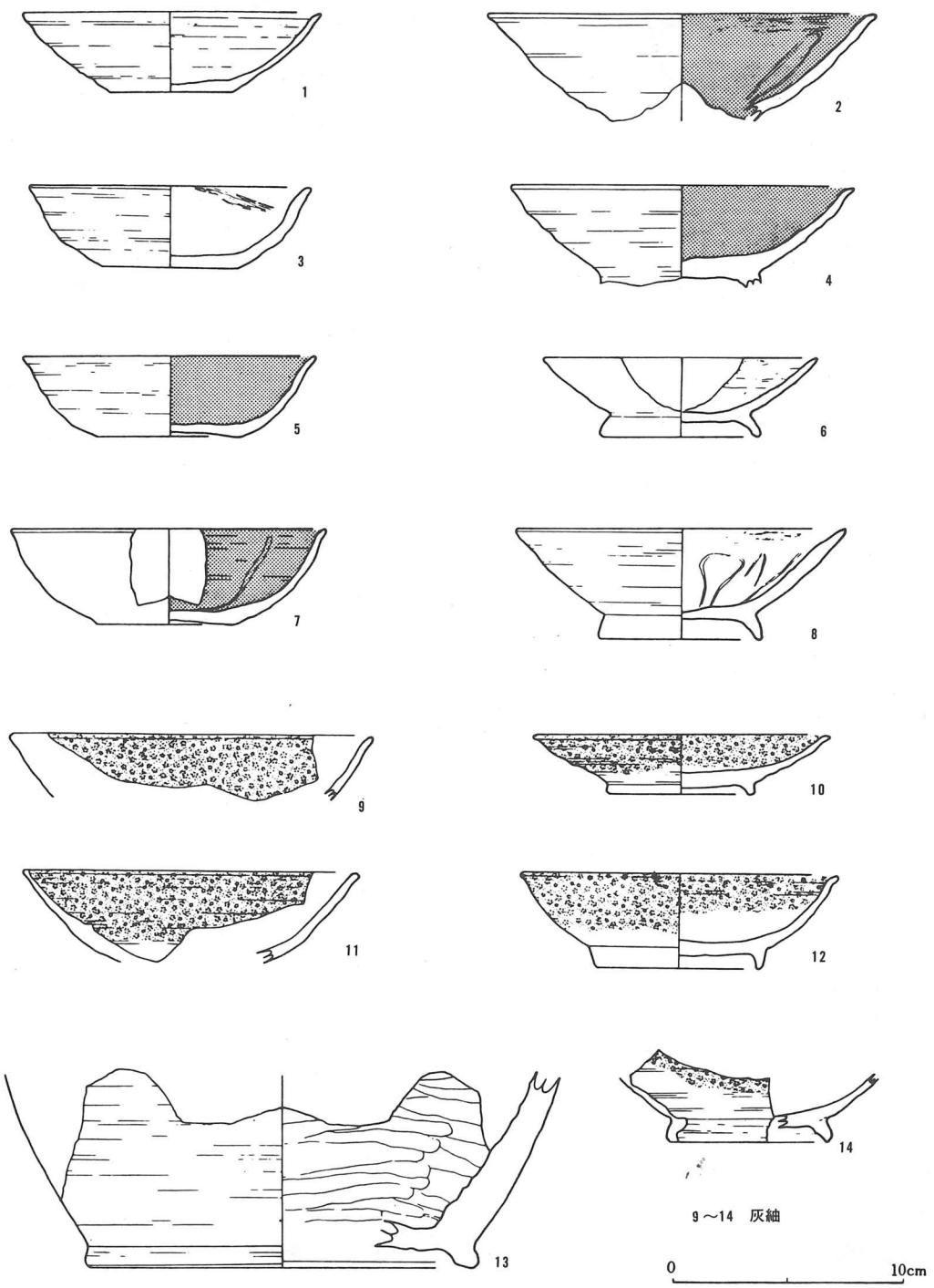
第31図 第III期中葉の土器と伴出した須恵器

なお、筆者の勉強不足から、報文を引用させて頂いた方々の意に反し、取り違えている点も多々あろう。御寛容願いたい。

(花岡 弘)

註

- 1, 大場磐雄也 1955 『平出』 朝日新聞社
- 2, 桐原 健 1967 「信濃における古式土師器の位置」 信濃 第19卷第8号
- 3, 岩崎卓也 1961 「城の内—信州千曲川岸の土師式集落遺跡の研究」 史学研究 東京教育大学文学部紀要 31
- 4, 笹沢 浩 1972 「善光寺平における古墳時代以後の集落立地の基礎的研究」 信濃 第24卷第4号
- 5, 宮沢恒之 1968 「飯田地方の土師器の様相」 信濃 第20卷第11号
- 6, 岩崎卓也 1964 「東日本における土師器の研究—主として鬼高式土器に関連して—」 史学研究 東京教育大学文学部紀要 46
- 7, 藤沢平治也 1976 『市道』 佐久市教育委員会
- 8, 今井正晴・村山好文 1976 「VI 市道遺跡出土の土師器について」 (前掲註7の文献所収)



第32図 第V期中葉の土器(三塚鶴田H1号住居址出土)

- 9, 花岡 弘 1978 「佐久平の土師器ーその概観」 佐久考古学会通信No.10 佐久考古学会
- 10, 花岡 弘 1979 「信濃の古式土師器－東海系土器群からみた弥生土器から土師器への変遷を中心としてー」 信濃 第31卷 4号
- 11, 森鴎峰稔 1978 「弥生時代」『更級埴科地方誌 第二巻 原始古代中世編』
- 12, 川上 元・小林幹男 1970 「長野県小県郡塙田町杵木遺跡緊急発掘調査報告」 信濃 第22巻第8号
- 13, 白田武正 1980 「佐久地方の後期弥生式土器について」 信濃 第32巻第4号
- 14, 花岡 弘 1977 「(研究発表)長野県における古式土師器の成立」 佐久考古 第3号 佐久考古学会
- 15, 今井誠太郎・藤沢平治地 1975 『郷土の文化財10 今井西原』 佐久市教育委員会
- 16, 前掲註7の文献
- 17, 前掲註8の文献
- 18, 須恵器編年に関しては、田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群 I』 平安学園考古学クラブ によった
- 19, 杉原莊介・大塚初重編 1973 『土師式土器集成 本編3』 東京堂。なお、3型式に区分するものとして、服部敬史他 1968 『八王子中田遺跡と資料篇III』がある。小稿でも、三期区分としたが、中田遺跡の編年との詳細な比較・検討は行なっていない。
- 20, 由井茂也 1980 『井上遺跡』 由井田町教育委員会
- 21, 佐久市岩村田一本柳遺跡出土。筆者実見。
- 22, 滑石製品については、一度、住居址出土例の簡単なまとめを行なったことがある。花岡 弘 1978 「佐久平における住居址出土の滑石製品について」(藤沢平治他 1978 『跡部町田』 佐久市教育委員会 第V章所収)
- 23, 藤沢平治・高村博文・林 幸彦他 1978 『上桜井北』 佐久市教育委員会
- 24, 横山浩一 1959 「手工業の発展ー土師器と須恵器」 『世界考古学大系3 日本III』 平凡社 の
- 25, 永原秀山・小渕武一・花岡 弘 1980 『関口B』 小諸市教育委員会
- 26, 関口B遺跡の調査時点までの、佐久平の墨書き土器については、前掲註24の文献でまとめてある。
- 27, 藤沢平治他 1975 『三塚鶴田』 佐久市教育委員会
- 引用参考文献
- 大塚初重 1968 「千葉県佐原市荒久遺跡の調査」 考古学集刊 第4巻第2号
- 川上 元 1978 「土師系什器の展開と終焉」 『中都高地の考古学』 長野県考古学会

- 笹沢 浩 1968 「信濃における鬼高式土器の開始」 信濃 第20巻第3号
- 佐原 真 1979 「I 器具の製作と用途 3 土器の製作と用途」 『日本考古学を学ぶ(2)』
有斐閣選書
- 村山好文 1976 「鬼高式土器研究の現段階」 『日本考古学研究所集報 I』

第3節 湯川流域の古墳群の一考察

1) 古墳の調査史

南北佐久郡の行政区画、通称佐久平と呼称しているが、この地域には古墳群の数はおよそ約、420基を数え（県台帳、昭和50年）、この中には、信仰塚のものが含まれたり、又明治以降、小諸市加増、望月町高呂古墳群の如く、数10基が、破壊され、消滅をしており、古墳築造当時の正確な数は判然としていない。（註1）

信濃の古墳研究に、松本市弘法山古墳発見（もっとも市誌編算当時、群構域と副葬品の有り方から桐原氏等で指摘もされていた。）はいまだに大きく、佐久平の古墳は、およそ円墳群であるという概念に対し、以下述べる北西久保古墳等の新しい発見に伴い、湯川流域に限ぎり、まとめてみて、大方先学の参考資料としたい。

湯川は、浅間中山腹の白糸滝より発し、佐久平北部を蛇行し、佐久市鳴瀬落合で千曲川に合流する河川である。字の如く水温は、冬期でも暖く、近世以降、千ヶ滝用水等が、稻作に開発されている。

地質は、火山灰流の、つまり、「田切り」地形が高く形成され、西は小諸市、旧城址から、東は軽井沢町油井、南は、佐久市西耕地まで形成され、古墳は、その上あるいは、平坦地に火山泥流として残丘の斜面を利用し、構築し、縄文～歴史時代までの間に、古代人の生活に大きな地質的影響があったことと察知されるが、「田切り」の形成年代は判明していない。弥生遺跡は、この田切りに形成された、谷間及びその台地に密集し、岩村田付近をみても、その遺跡の分布は、小河川にそって解される。歴史時代となっては、この田切りを利用し、砦や、平城等に使用されたことからもうなづける。

さて佐久平の古墳、主体部が開口及び露出し、確認できる古墳は、信濃考古総覧で、69基を数え、その内訳は、北佐久郡(2)、小諸市(10)、佐久市(18)、南佐久郡(39)基となっており、戦前調査され、保存をみているものは、浅科土合1号墳、小諸市諸4号墳、御代田町下原古墳等で近年14ヶ所の古墳群の調査が行われ、新しい事実や、特質が判明された。ここでは、特に浅間南麓の中央高地を代表する、湯川流域の古墳群についてふれ、一・二気づいた事、考察を加え、佐久平と上州の文化的交渉についても言及してみたい。

2) 古墳立地の特質

浅間火山は、三重式コニーデ火山で、上信国境に位置し、活火山として噴火活動のはげしい事で知られている。この浅間山の両面裾野が広く発達し、末端部が佐久平に扱んでいる。

浅間山の最も新しい噴出物である追分泥流が、追分ヶ原の大部分を被い、その下部には、それより以前の軽石と火山灰を主成分とした、いわゆる火山灰流が、小諸市、御代田町の大部分と佐久市の北半分を扱っている。標高900～700m間の、古くから集落の発達した地域がこれにあたっており、現在、高原野菜の特産地となっている。

佐久灰流は浸蝕抵抗力が弱く、雨水、流水による極端な浸蝕谷がよく発達し、「田切り」地形を作っている。この田切り地形は、浅間火口を中心にして放射状に分布しており、見かけ上では佐久灰流の上部層第二灰流地域に、大規模な田切りが観察される。

御代田付近は、佐久第一灰流の分布する標高800m以下は、水田地帯を形成し、佐久第2灰流の分布する800m以上に古墳群が構築されている。湯川下流の岩村田付近にあっては、浅間山中復、血の池より発する、濁川（無機炭酸性）の流域にあり、南面にわずか傾斜し、水便にも恵まれ、岩村田付近、弥生遺跡では後期初頭の遺跡群がみられる。

岩村田より西部の中佐都の塚原一帯は、大小100余個以上にも及ぶ、半球状、島状の残丘があり、松、唐松の雑木が繁って、陸の松島のような景観を示している。この地域の地質は、基盤である洪積層、湯川層の上部に、黒斑山（浅間山の第1外輪山）のカルデラ爆発によって、噴出した、多量の火山砂と溶岩片や、既存の岩片が一時に流下した、塚原岩層流（泥流ともいう）が覆っている。その末端にあたり、厚さ3～15m。東側は、湯川の線、西側は、近津付近、南縁は、ほぼ千曲川に及ぶ不等辺三角形の地域に分布し、北上部は小海線で、その後の新しい、浅間火山の噴出物追分火山灰流に覆われている。塚原古墳群は、この火山性残丘を利用し、さらに、赤色多孔質集塊岩（Ag），1部には塚原泥流中の本質溶岩である輝岩安山岩（Ad）が僅か使用され、溶岩材を石室に用いている古墳は、県下にも例がなく、浅間山麓の高地性に立地しているのが、湯川流域の古墳群のひとつの特徴ともいえるのが、以下様相を追求したい。

湯川地域の古墳群は第1表のとおりである。

火山灰流、塚原泥流の形成された年代は、白倉盛男先生の教示によれば、佐久第2灰流～第一灰流は、11,000年±以前ということである。

湯川流域の古墳分布

湯川流域の古墳群をみると次のとおりである。（第1表）

第8表 信濃佐久湯川流域古墳群一覧表

水系	番号	古墳群名(数)	地形	墳形(m)	内部主体	副葬品				備考
						玄室	羨道	前庭	墳丘	
湯川東岸	1	塚原古墳群(12)	平地	円墳	横	直刀・馬具・勾玉・切子玉				
	2	上の原古墳群(4)	平地	円墳		玉				
	3	矢沢古墳群(7)	山麓	円墳	横					
	4	平古墳群(4)	山麓	円墳	横					
	5	輪子古墳群(13)	山麓	円墳	横					
	6	上長坂古墳群(2)	平地	円墳	横					
	7	十二の平古墳群		現存せず						
	8	伊勢石古墳	段丘	現存せず (径13.0 高さ5)	横					
	9	中込大塚古墳								
	10	安原古墳	台地	円(径26)	横(両袖)					金環
	11	三河田古墳	平地	円(径26)	横(羽子板)					直刀
	12	鳥原古墳	平地	円(径15 高さ2)						
	13	丸山古墳群(7)	山腹	円						
	14	一本松古墳群(3)	山腹	円						
	15	城古墳群(12)	山腹	円	横					
	16	潰石古墳	段丘	円 (径3.0 高さ1.5)						
湯川西岸	17	下原古墳群(1)	丘陵	円	横	ガラス小玉 白玉 金環	切羽			
	18	下前田原古墳群(5)	平地	円	横(片袖1・両袖1)	金環 切子玉 曲玉	鉄鑑 直刀片	土師器(多) 須恵器(多)		浅い周溝有り (墓前祭)
	19	皎月古墳	平地	円	横(片袖)			円頭柄頭 直刀・須恵器		周溝あり (墓前祭)
	20	北市古墳	台地	円(径30)						
	21	池下古墳	台地	円(径28)						
	22	常木塚古墳	平地	円(径25)						
	23	塚原古墳群(10)	平地	円(径10~15)	横(長方形)					剣1振
	24	家地頭第1号墳	平地	上円下方?(径18)	横(長方形)	鉄錺		須恵器 埴輪片	埴輪片	(墓前祭)
	25	東一本柳古墳群(3)	平地	円(径11)	横(両袖)	馬具	土師器	土師器		(追葬)
	26	根々井大塚古墳	平地	円(径38)						
	27	滝の峰古墳群(2)	山頂	前方後方墳(?)	石室なし	剣				
	28	北西久保古墳群(5)	台地	円	?				埴輪	周溝有り

3) 調査をみた古墳について

佐久平の所在古墳において、調査された古墳は16基である。このうち、墳丘、石室の把握されている古墳は、浅科土合1号墳、御代田町下原1号墳、佐久市皎月古墳、同東一本柳古墳、同・下前田原古墳2基、浅科村蓬田古墳、佐久市後家山古墳、同・家地頭第1号墳、北西久保古墳群で、土合1号墳、下原1号墳、下前田原古墳2基をのぞき消滅した。

これらの調査例では、新しい事実や、発見がみられ、佐久平の古墳群の全容は追求できないが、佐久平北部の湯川流域に位置している。ただし、実年代を知る須恵器、土師器が、石室内から検出されず、羨門付近、羨道等、追葬、基前祭に伴っている古墳と、墓前祭の全くなされない古墳が存在することを明記している。

1)馬瀬口下原古墳群〈御代田町大字馬瀬口字下原789の2・784番地〉(註2)

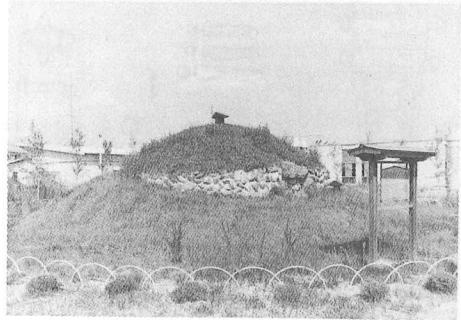
下原地籍には昭和4年に調査(八幡一郎氏)をみた古墳5基があり、4号墳が発掘調査され、戦後国道18号線の新設により4基が消滅し、今日1基が現存している。昭和初年3基があり、畠境にヤックラ化していた。石室の状況は判然としないが、当時の調査では、玄室内から、人骨大骨、皇宋通宝、紹靈元宝が検出され、人骨は腐蝕甚だしく、副葬品の類は認められなかったとあり、後世の新しい時期、石室を利用した追葬と解される。

第1号墳は、昭和49年5月15日～18日に清掃調査され、50年3月21日～22日保護棚工事を行い保存した。

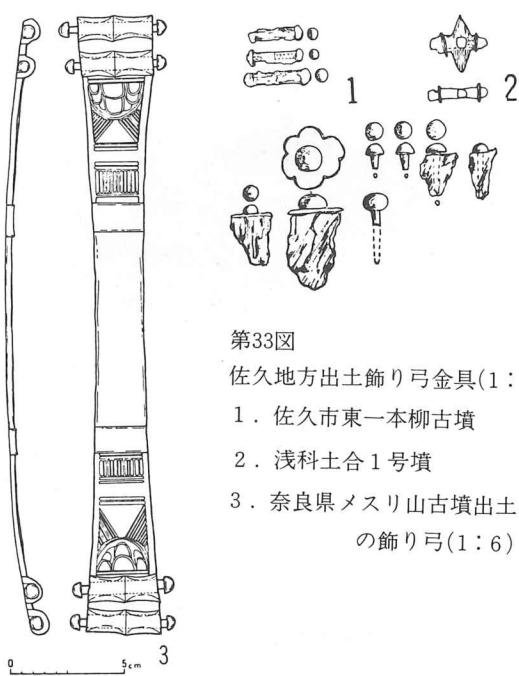
墳丘は、現況東西6.2m、南北6.5mで、ほとんど鋤平され、堆定円墳径13～15m。墳丘の石には、軽石、浅間山多孔質安山岩が多く用いられている。主体部全長5.65m、奥幅3.6m、羨口部で22.1m。長軸はN-18度Eで、石室は両袖式プランを呈し、玄室は長さ5.28m、幅3.6mの長方形プランである。石岩の石材は、湯川の河原石を用い、石室上部に持送りが観察される。側壁は東西とも3.35mを測る。棺床は1部分に、礫床と敷石が残っていた。

遺物は、人骨に交り、散在し、初源的な位置は示していない。直刀片(2)、切羽(1)、金環(1)、ガラス小玉(9)、白玉(3)、鉄鎌片(11)、土師器片、須恵器片が出土した。人骨は、若年期、小児期3体以上と、他に、ウマ、キツネ、トリ骨が伴出し、信大西沢寿晃氏が報じ、直接本墳とかかわりがないようで、追葬と解される。

昭和4年八幡一郎氏調査折、参加した古老の話では、金銅品、須恵大甕等の出土を目撃している伝承があり、塩野牧址の範囲であり、後年大場磐雄先生の本古墳群を積石塚とした事は、これ等から生じたと解される。



下前田原古墳群・皎月古墳（復元）



第33図

佐久地方出土飾り弓金具(1:3)
1. 佐久市東一本柳古墳
2. 浅科土合1号墳
3. 奈良県メスリ山古墳出土
の飾り弓(1:6)

2) 下前田原古墳群 <佐久市小田井下前田原後原> (註3)

皎月古墳(59P写真)の石室構築に外護列石が認められるグループで、小諸市耳取大塚がボーリング堆鉢で推定されている。墓前祭がきわめて著しく、現在、墓前祭が認められた古墳群は、佐久市家地頭第1号墳とて、中佐都周辺の古墳に限られている事であり、浅間山の焼石を石室に使用している点が共通している。本古墳群を皎月古墳同様、一時期を経て、10世紀代に至り、祖先への追葬が、墓墓前を行い、皎月古墳を帰代人に、又家地頭第1号墳の設計に高麗尺が合値している。

この古墳グループの古代族は、与良清先生の御教示では、おそらく滋野氏系古墳(族に

3つのグループがあったという伝承である。)の前身の豪族と一致することであり、佐久地方開拓にあたった牧人(帰化技術による諸開発も含む)の奥津城ではあるまいかという見解である。後述する家地頭1号墳、北西久保古墳群での埴輪の焼成等からして、群馬県方面と文化的、規模交渉のあったことはいうまでもない。

3) 家地頭第一号古墳 <佐久市常田字家地頭337の1, 339の1番地> (註4)

本墳は、墨斑火山による、塚原泥流地帯の残丘を利用して構築されたものである。墳丘は、その残丘を含めると、円墳南北38.5m、東西径43mを計るが、墳丘径18m~20m位と推定され、上円下方墳が推定される。すでに石室主体部が露出していた。地山上に赤色浅間焼石の5ヶが、露出し(それ等の石は、3×5m, 3×2m, 2, 4×3.9mの大型石である。)

天井石は厚さ65cm, 2, 74×2, 95cmを計る。

石室は、主体部全長4.25m、玄室長方形プランを呈し、奥壁幅2.45m、玄門部で11.4mを計り、両壁は高さ2.2m, 3~4段石である。鏡石は1枚の(高さ2.5m, 幅2.6m)構造であり、持送り技法は、全くない。

遺物は、羨門付近から、埴輪中、須恵器、甕、よこべが散布し、埴輪は、人物、円筒、鞆がみられ、石室内からは、切子玉(2), 滑石製玉(3), ガラス小玉(20), 馬具(雲珠1), 鑑(20), 寛永通宝(20), と、当方では始めて、埴輪が検出された。須恵器は、かなり小破が多く、墓前祭がとり行われたと解したい。

本墳より出土した埴輪片（整理箱2箱）を群馬県立博物館へ持参し、外山和夫氏と比較調査を行った。佐久平で埴輪が検出されてなく、その焼成と大型埴輪の点、後述する北西久保古墳群で明瞭に埴輪樹立が認められたので、上毛野国より、馬ではこぼれたと解するか、職業集団の一時帰住が考えられる。付近、清水田遺跡からは、子持勾玉の出土がみられる。

4) 東一本柳古墳 <佐久市岩村田東一本柳2227~2228> (註5)

本墳は、前部を確認したが、墓前祭は認められず、第1、第2棺床からなる追葬が明瞭に把握された。石室主体部は、さしたる古式は認められず、浅間山焼石を用いたものである。

新しい石室技術にもかかわらず、6世紀代の金銅製馬具が伴なっている。この杏葉の蕨手文透彫変形鐘形型式のものは、その後、東日本から10数例確認されてきている。杏葉については、後日稿を改めたい。

杏葉と伴出した、用途不明金具（第2図）であるが、昭和51年、千葉県市原市国分台古墳群、持塚第7号墳から良好な出土状態で検出され、飾り弓の金具と確認され、田中によれば、(註7) 7世紀中葉古墳とされる。県下では、浅科土合1号墳、東部町右近塚から検出されている。6世紀前後に見られる特定群集墳からの集中出土に、この飾り弓の展開のピークがあり、その終末も7世紀中葉とおさえられ、前代から続く飾太刀の配布でも最も下位に位置する鉄器の円頭太刀の佩領者層と一致し、中央との直接的な関係を示す、舍人、鞍負層と豪古氏族が推定される。

5) 北西久保古墳群 <佐久市岩村田北西久保23681> (註6)

北西久保遺跡は、昭和41年、中世五輪塔が発見され、中世墓制の遺跡として著名であった。遺跡の北台地南端からは、埴輪片が散布し、昭和46年度の分布調査で、古墳の存在が確認され、6世紀代と比定され、同古墳からは、スプーン状鉄器が出土している。

昭和54年、この台地の開発工事に伴う、試掘分布調査で6基の周溝を伴う円墳群が発見された。石室は、中世代拡乱を受け、石室はとりのぞかれているものの、多数のきわめて、焼成良好の埴輪が伴って出土した。円筒、朝顔、馬具、人物、等で、埴輪の年代は、佐久市常田家地頭第1号墳の埴輪と比定される。佐久平では、埴輪窯址は発見されてなく、上州的文化が顯著と考えられる。

円墳は径 2.5m~1.25m、周溝は 0.5m~0.25m、墳丘、石室主体部は、中世遺構によって消平されている。（第4図）

周溝の伴う古墳は、皎月、下前田原2号墳が確認されている。

6) 後家山古墳 <佐久市常和後家山>

本墳は陵丘上に構築され、墳丘、石室主体部は原形を留めていないが、円墳径 1.8m と推定される。副葬品中の水晶製の切子玉（第4図）であるが、糸ずれのない、きわめて新しいもので、

調査された古墳中、特異ではあるが、白倉盛男先生のご教示では、南佐久地方に水晶産地があるとのことである。

以上、佐久平で調査をみた古墳からして新しい事実、特質を述べてきた。

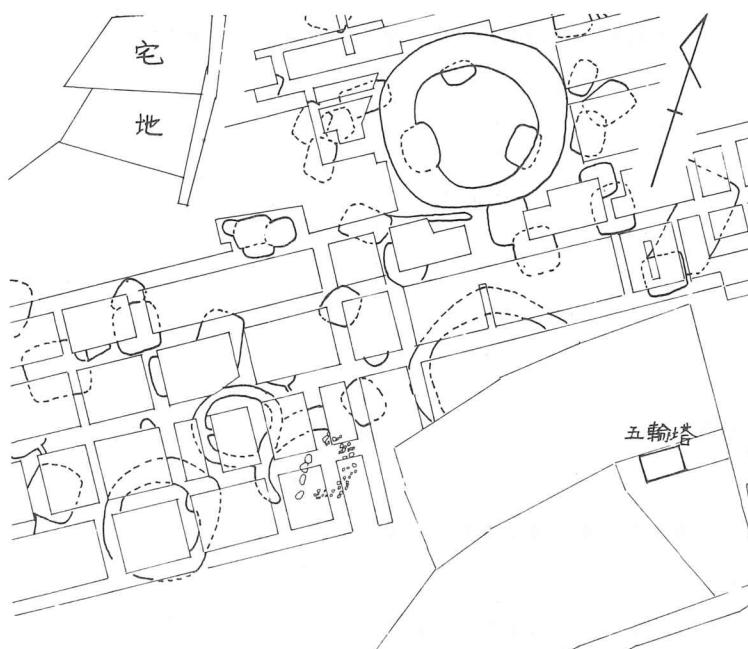
4) 副葬品にみる古氏族

以上、最近調査を見た、古墳についてふれたが、この副葬品中、異色の存在に、やはり、馬具埴輪があり、注目される。

佐久平岸野火の雨塚より、馬の埴輪（第5図）、家地頭一号墳より大型器材埴輪、北西久保古墳群より朝顔型埴輪、人物埴輪、大型馬片等、従来、小諸市加増古墳出土の人物埴輪の出土状況と異なり、あきらかに、樹立古墳、つまり古式古墳の可能性も、充分推定できそうに至った。岸野滝の峰1号墳（前方後方墳か？）、塚原の剣二振の出土品、後元される家地頭1号墳の上円下方墳（？）、いづれにしても東山道ルートにあたり、古氏族のあわただしい動きに何をみるのであろうか、資料集成と分析が充分でないので、問題点の提示にとどめたい。

追葬と墓前祭

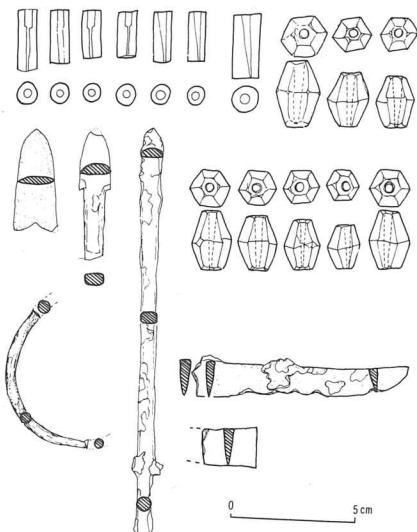
同一墳基に2体あるいは、それ以上を埋葬する合葬の事例は、中国、朝鮮半島にもみられる。多人数を合葬した事例は10数体にも及び、数体埋葬の例が大勢をしめている。このことからも横穴式石室は合葬を前提として築造された墳墓であるといつても過言ではない。



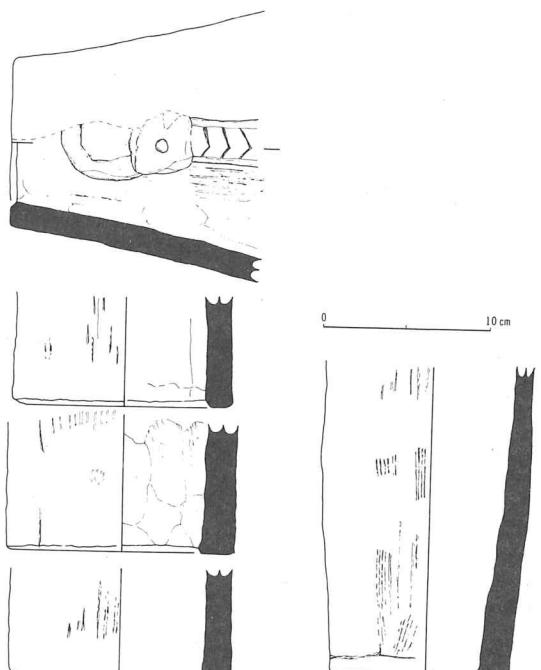
第34図 佐久市岩村田北西久保古墳群

佐久平は、前述したとおり社会の変化、地域差、年代差と関連して複雑な様相を示している。追葬は人骨の出土、埋葬施設、副葬品の数、位置からして、その数を推定できる。従来一言で“佐久平の座ぶとん古墳からは意外と副葬品が多い”と簡単に扱われていた。追葬における前後関係を知る上において、伴出遺物1名人体に伴う一判定は大きな障害となる。

土合1号墳、望月吹上



第35図 佐久市平賀後家山古墳出土の遺物(1:3)



第36図 佐久市岸野火の雨塚出土の馬形埴輪(1:5)

山の神古墳の数多い刀剣類の出土は、それを明示しているといえよう。

ただし、東一本柳古墳で、第1第2棺床が明確に把握されたが、厚さ2cmの床には人骨粉が交り、羨門部より墨書土師器の検出をみている。

又、追葬に伴って、死者の墓前において行われる、宗教的、儀礼的行為があり、上野国稻荷山古墳においては、滑石製模造品があり、槨底の幅44m、長さ74cm、厚さ8cmの板石の上に、恰も榦の枝等に懸けておいたものがそのまま崩れ落ちたかの如く、堆然と密集して出土したといわれ、墓前祭は、皎月古墳（報告書近刊）、下前田原古墳、家地頭1号墳と検出されたが、下前田原古墳群では、古墳構築後、時間をへだてとり行われていることである。10世紀までとり行われた。ことに、1号墳では、前底部に0.42×0.48cmの敷石を構築し、その周辺より破棄された施設土器須恵器片が、2号墳共多く検出された。

横穴式石室の墓前における葬送の儀礼は、「黄泉国の神話」が從来知られている。

保守旧存の高族は、新しい仏教に伴う火葬墓を、受け入れず、追葬が営なまれているのが注目される。

ただし、追葬及び墓前祭が、佐久平古墳群のうち湯川流域で明確であることを付記したい。

火葬墓と高塚式古墳

佐久市休石遺跡（註8）佐久市大字伴野に所在し、千曲川の南岸段丘上標高 650 m ~ 660 m に位置している。

昭和初年完形の須恵甕が出土しての遺跡として知られ、その地点は宇宮川・字大長田・字休石にかけて1000平方mの範囲である。大正の初期にも長芋掘りの折、甕につきあたったとか、畑の水田化の折、積石状になっていたヤックラを平地にしたところ、甕が立って（正位で）出土した等の話がつたわっている。

昭和43年5月、県道改修工事には、大甕3個が発見され、その中に藏骨器・長頸壺・甕が正位の状況の写真やメモが次のように残されている。

大甕の中には、地表より60cm下と同じ極めて微粒子の河原砂が一杯つまり、中に同様の砂のつまつた藏骨器がはいっていたという。（第6図）

前記出土の完形又は完形に近い6個の大甕は口径40cm、高さ80cmあり、県下はもとより中部地方にも類例がなく、解明は史料や地質面のこと、民俗等、其のの他各分野からの慎重な総合的所見による判定に待たなければならない。

岸野村誌刊行会では、この大甕出土地の遺跡の範囲等を把握するための確認調査を昭和53年3月実施した。

原田氏の調査でも、今回の調査でも出土の容器は、火葬者を納めた骨壺であると推定される。今回の発掘の場所は、火葬の場所がそのまま埋葬地としており、厚い木炭まじりの赤土と赤く、焼成をうけた配石址があり、鉄釘片なども認められ、火葬墓と考えられる。年代は東国独特の四耳壺が伴い11世紀と比定されるが、第7図2の長径壺はやや古い時代となっている。

さて仏教ではその根本思想の中に、釈迦入滅時代再生浄化の意味で、火葬の思想があったところから、僧侶の間には屍を焼いて生前の罪悪を減すという意味で、火葬が行われるようになり、我が国においても仏教の伝来とともにその思想が行われるに至り、文武天皇の4年（700年）3月、僧道昭は遺命して栗原に火葬せしめたという。これが日本における火葬の始めであるとされている。その後喪葬令が公布され、僅かに二年後大宝3年（703年）十二月には持統天皇が崩御され、その遺詔にろって飛鳥岡に火葬し奉り、文武天皇は慶雲4年（707年）十一月、養老4年（721年）十月には元明天皇、天平20年（748年）四月には元正天皇が、それぞれ火葬し奉ったことが続日本紀に見えている。

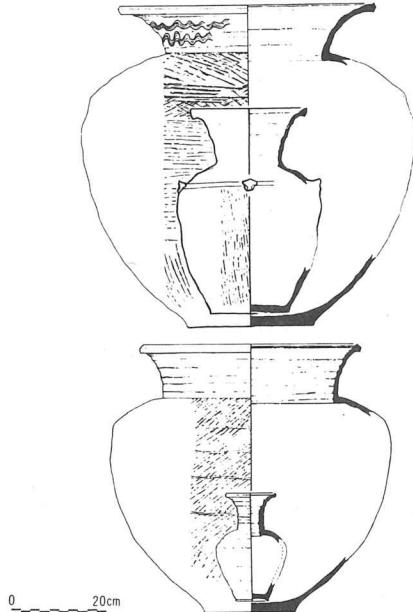
古墳の主人公であり、大和朝廷の中心者であられる天皇家が火葬を行ったということは革命的なことであると言わざるを得ないが、仏教の発展は次第に地方に及び、火葬の風習も徐々に国内に流布し、ここ休石でも行なわれたのであろうと考えられる。信濃にあっては伊那・諏訪を経て

きたようである。

古墳の追葬及び墓前祭が古豪族にとり行われる時期に併行し、火葬墓が該期佐久地方でも認められるものの背後の氏族追求には諸問題が多い。

該期、後期古墳の様相は、本佐久地方では晩期におよんで當なまれ、県下では独自の文化圏ともいえ、このことは隣接する地域と密接な文化的交渉がうなづかれ、古道筋というより朝廷の、影響とみるのが普変的と考えられる。

(土屋 長久)



第37図 佐久市岸野休石遺跡出土須恵器(1:16)

- 註 1 土屋長久「信州佐久平の後期古墳群について」『信濃』第22号第5号 昭和45年5月。
- 2 与良清・藤沢平治・土屋長久「御代田町馬瀬口下原古墳群」『郷土の文化財』1 御代田町教育委員会 昭和50年10月)
- 3 土屋長久「祭紀ある古墳の一例——下前田原古墳群——」『郷土の文化財』8 佐久市教育委員会 昭和50年3月
- 4 佐久市教育委員会『佐久市家地頭第1号古墳発掘調査報告書』、佐久市教育委員会 昭和51年。
- 5 竹内恒・土屋長久「佐久市東一本柳古墳」『長野県考古学会誌』第13号 昭和47年3月。
- 6 佐久市教育委員会 長野県佐久市北西久保遺跡発掘調査概報 昭和45年3月。
- 佐久市教育委員会「佐久市北西久保遺跡発掘分布調査報告書」昭和55年3月。
- 7 田中新史「古墳出土の飾り弓、一鉄飾り弓の出現と展開ー」『伊知波良』No.1 昭和54年2月。
- 8 土屋長久「休石遺跡の確認調査」『岸野村誌編集だより』第3号 昭和54年3月。

第4節 佐久の官寺

1) 瓦の伝来

初めて日本に百濟から製瓦技術が伝えられたのは、崇峻天皇元年（558）であった。

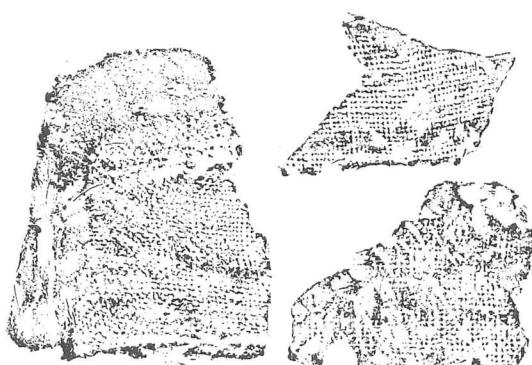
仏教の伝来が欽明天皇（552）とすれば36年目に仏殿建設のため、工人の派遣があったのである。『日本書紀』によれば、麻奈父（まなほ）、奴陽貴（ぬやんぎ）、文陵貴（ふんりゅうぎ）文昔麻帝弥（ふんききまでや）の4人の瓦博士が、2人の寺工（てらたくみ）、1人の鑄盤（ろばん）博士、1人の画工と共に遣わされたとしている。なぜ瓦と鑄盤とのみが博士で、ほかは工であったであろうか。而かも人数も多い。4人のうちには、瓦窯を築く人、瓦の素地を作る人、瓦を焼く人、瓦を葺く人、それぞれの専門家がいたか、それとも博士というからには、其の総べてに甚能な高度な技術を持った人々の集団であったかも知れない。その時に建立された飛鳥寺（法興寺）の屋根瓦は、文献上では最古の瓦である。寺は平城遷都と共に元興寺として移ったので、瓦の一部は転用されているから、日本最古の瓦が今でも残っているかも知れないとされている。

然し、それよりも30数年前の仏教伝来と時を同じくして、向原寺（むくはらでら=豊浦寺・広嚴寺）が建立されている。そこからは百濟様式の瓦のほかに、高句麗様式にも近い同時代の古瓦も出土している。創立当初の瓦であるとは断定できないが、時代は同じであるという。その頃欽明朝末から敏達朝には高句麗使節も来ているし、民間人として帰化人も多かった。その中には瓦の工人もあったかも知れない。また飛鳥寺は高麗尺で建てられ、その伽藍配置が高麗の影響をうけている点などから、両国の様式がともに採用されたと思われる。

それらの瓦は飛鳥時代の日本ではどのように使用されたか、『日本書紀』の推古天皇32年には、

「寺46所、僧 816人、尼 569人」があったとしている。今同時代の寺と思えるのを挙げるとしたならば専門の研究者以外では、10指を数えるのに苦心するであろうといわれている。その寺の数の多かったことに驚くのではあるが、更には石田茂作博士の調査では、それより3ヶ寺も多く、49寺といわれている。

初めて日本に瓦葺の寺が現出された時の民衆はどうであったろうか。それまでは草葺や茅葺であった日本建築ばかりを見ていた当時の人々には瓦葺の寺院は驚異の的であった。



第38図 周防畠遺跡第1層出土の布目瓦拓影(1:2)

甍の輝く高い塔や広大な堂が、空に聳え立つ威容は仏教の教義はわからなくとも、仏像を挙むと同様に信仰の対照としての価値も充分にあったであろう。仰ぐ人々のまず目に入る瓦の波の織りなす美しさには、重々しい光と影の造形美があったからである。外形の美しさばかりでない、建築構造からして持異的であった。従来の屋根材よりは5倍も重い瓦葺を支えるのには堅牢な木材と特別な木組みが必要であった。その木割法は内部に入っていて見えないが礎石が初めて使用されたことは画期のことであった。そして美しい瓦を支えている長い軒の出のため、樋や、斗栱などの複雑な軒廻りの構成美もあった。そこにも瓦は良く調和して、妙なる交響樂を奏でているかのようであった。建造物の多様化した現代では想像しにくいが、当時の瓦葺は日本建築の革命的な荘厳さと美しさの魅力を与えた。

やがて奈良時代前期の白鳳時代に入ると、造寺は更に盛んとなり、早くも百ヶ寺に達して、持統期には545寺も数えられた。その分布は畿内地方を中心として、東は関東から西は九州に及んでいる。その様式から見ると、飛鳥・白鳳時代には百濟と高麗系が多かったという。この二国に比較すると、日本と疎遠であった新羅は少なかったという。しかし百濟の滅亡後は関係が深くなつた。そしてこの時代には半島の三系統よりも、直接に唐の影響をうけることも多くなつた。

この様に、上代の瓦は多様な文様の展開を示したが、それらの瓦を使用した寺の多くは今は廃寺となっている。久しく所すら不明であったのが、近世になって古瓦や礎石の遺物で遺跡が明らかにされつつある。

その渡来当初は瓦はもっぱら寺院のみ使用されていたが、持統天皇8年（694）に藤原宮に移って、そこで初めて宮殿にも瓦が葺かれた。もっともその前の齊明天皇2年（656）には小墾田宮を瓦葺にせよとの勅命があったが果されなかつた。その前の皇極天皇元年（642）の宮殿は飛鳥板葺宮（あすかいたぶきのみや）といわれている。その名のように屋根は板葺であった。それまで一代ごとに都を変えていたのが、4年がかりで造営した藤原宮は、持統・文武の2代とづき、その次の元明天皇の和銅3年（710）には平城京が遷都している。藤原宮は僅か16年であつたが、瓦にとっては新用途が開拓され、以後も平城京・長岡京・平安京と、宮殿にも採用された。この頃は律令制度も確立されていたし、白鳳文化の最盛期をむかえ多くの寺院が建立されていた。遣唐使による中国文化の直接受け入れがあり、半島の国情不安からの帰化人も多かつた。なかには優れた技術者もいたので、作瓦の技術は向上し質・量とも満開期の花のように咲き誇つたのであろう。

天平時代に入ると、日本文化の育成は速度を加えてきたが、瓦の量は増加しても質は低下の傾向にあった。その雨仕舞の悪い欠点も表面化してきたので、斜陽のきざしが見えてきた。その動機は国分寺の造立である。聖武天皇の勅命による国家事業であつても、当時の財政の事情から、国の援助は少なく各地方の国司の負担にかかっていた。その上には又、技術者の不足、なかには

素人を仮に集めての仕事もあったので名ばかりの瓦を貢数を揃えるのにきゅうきゅうとした有り様も見られる。瓦の造形も機能も低下するのは当然である。やがて律令制度が崩れ出して、造寺の主導権力が国家を離れて、貴族や豪族の手に移るとその勢力の栄枯盛衰によって左右されることが多くなった。寺は信仰と共に栄えて行くが、国の力が背後にはないとその規模も永続性もおとろえる。瓦は律令制度と共に栄え、またその崩壊と共におとろえたとも言える。

瓦の質では飛鳥・白鳳時代が最高であったが、天平時代に入ると量と共に多様性を特長とする。その時代に天皇のなかで最も多く瓦を作らせたのは聖武天皇であった。平城宮や東大寺を造り、全国には国分寺を建立させてその上に恭仁・紫樂^{クニミガラキ}、難波の都も造ったが、その頃には東北の多賀城と九州の大宰府や觀世音寺も完成して、いずれも瓦を使用している。一代のうちで最も多くの土木建築をした、そして後世に正倉院をふくむ東大寺と、各地に多くの古瓦をのこしてくれたが、それだけに当時の国民の苦労は大変であったことが偲ばれるのである。然し即位の当初には臣下のことも考えていた。それは寺院と宮殿と城柵のみに使用されていた瓦を、五位以上の人と財力のある庶民は、なるべく瓦葺にした方が良いとの大政官令を出したことである。その対象者はごく少数の人に限られていたが、神亀元年（724）の勅令である。その中で板屋や草舎はもう古いと言っている。

瓦葺にして柱などを赤や白に塗れとも言っているが、美観もさることながら、ワラヤ、茅は腐りやすく、火事にも弱いからであった。瓦は実用的にも必要ではあっても、どれほど実際に使用されたか不明である。ただ、当時は瓦葺より多かったであろう板葺は、長い板に割って大和葺（やまとぶき）にしていたことは、木材の記録から割り出せるが、それすらも少なかったであろうし、当然当時の庶民には入手が困難の瓦の使用は少しあったとしても、数える程であったであろう。

まして都以外では瓦の使用は稀であったが九州大宰府は外交と防備の必要から、天平時代以前にも瓦葺であった。また蝦夷に対する軍事上の策源地として東北の多賀城をはじめ、付近の城柵からも古瓦が出土している。別に記録として、『正倉院』の文書の正税帳には種々な倉庫の中に瓦葺があったことが知られる。

また遣唐使が盛んな頃までは外国の使臣の駅舎が山陽道にあって、それも瓦葺であったことが、平城天皇の大同元年（806）の記録にもある。地方でも高級な建物は板葺が多く、一部のみ瓦葺が使用されていた。

奈良末期の平城宮は瑠璃瓦で葺かれた、弓削道鏡が女帝の称徳（孝兼）天皇のために飾りたてたので『玉宮』と言われていた。それから30年位経って、桓武天皇は延暦13年（794）に平安京を造営した時も、碧（へき）瓦で葺いた。双方とも唐様式の影響をうけた唐三彩用の鉛釉に銅を発色剤とした緑色の瓦である。宮殿だけでなく藤原道長の法成寺などにも見られるという。

平安京の碧瓦は大極殿と大内裏だけで、大部分は黒瓦であった。寺院の需要にも減少の傾向が見られてきた。山岳佛教への転向で、粘土瓦は製造にも運搬にも耐寒にも、不向となったからである。それもあるが雨の多い日本では大陸様式の瓦は不向であることは、すでに奈良時代から言っていた。屋根勾配を強くしたり、重ねしろを深くしたり、屋根下地として柿葺を施して、その上に置く土を厚くしたりなどして、それで漏らぬようにした。

瓦の効用は防水にあるが、それよりも造形美と防火に比重を置きがちの時代となっていた。今までよりも使用が嵩むのでは需要は減らざるを得なかった。

その上に地震の多い日本のこととて、瓦のずり落ちるのを防ぐのに、釘や土だけでは安全でなかった。そえ檜の皮を細かく薄く裂いて幾重にも重ね、竹釘でとめる檜皮葺の発達で瓦は後退を余儀なくされた。更に柿葺の追討ちもあった。屋根下地が本来の使命であったのが、工夫改良されて、それだけで上に瓦を葺かなくとも雨水はとれるようになった。柿葺は柿の木を使っているのではない。杉や櫛や栗が多い。木端のサワラのような薄い木の枝をコケラ（柿）といったし、魚の鱗もコケラといった。

剥ぎ板で鱗状に葺いたので柿葺といわれた。その木片の厚味によって、木膩（トクサ）葺、柾^{トチ}葺とも区別してよばれた。

檜皮葺と柿葺は入母屋の様な複雑な屋根にも、瓦のような特別な形の瓦を用意する必要もなく、自由に葺ける。更に柿葺は檜皮葺より簡単で費用も安かったので各方面から歓迎された。住宅用としても鎌倉時代の武家屋敷は質素だったので、それを愛用していたことは、当時の絵巻を見ても明らかである。寺院にしても今の真宗寺院の屋根の立派なことから想像して、親鸞・蓮如の時代に地方にも瓦葺が多くあったと思いつがちであるが、当時は都を離れると、瓦はおろか檜皮葺や板葺にしても少なく草葺の方が多かった。

このように瓦は敬遠されがちの時代でも別の用途もあった。檜皮葺の屋根の棟だけが瓦葺であるのは今でも見られるが、棟の部分が雨漏りには最も弱いからである。

鎌倉・室町時代を通じて寺院はもとより、神社などにも利用された。然し用途は増えても全体の使用量は多くはならなかった。棟だけが瓦の風習は今の農家の藁屋根のグシとかグスといっている大型の丸瓦（頂上瓦）として残っている。

今の瓦葺の下地としては、柿葺の言葉はあまり耳になくなつたが、昔から小羽板（こばいた）葺とも言われてきている。瓦なしで葺く時は釘を打つと破れるので、木の棒で押えた。また石で押える石置屋根として今でも山国には見られる。これに対して瓦の下地用のは機械ソギとなって薄く軽木のようになっている。それに安くあげるために重ねも浅いが、太陽熱も当たらなためにコワレル心配がないので釘でとめている。トントンと音を立てて打ちつけるので、俗に「トントン葺」ともよばれている。別に土居葺とも言っている地方もある。これは瓦の下の葺しろでなく、

土の下地になりさがっている証拠である。

室町時代の主な瓦需要は、法隆寺や興福寺などのような伝統ある大寺院に残っていた。そこに専属の瓦職人が余命を保っていた。国全体から見ると、斜陽をかこっていたが、同時代の永享・嘉吉・文安年間（1429～1448）の法隆寺の瓦には「瓦大工ユウアミ」とか「瓦大工寿王彦次郎橘吉重」のヘラ書の文字のことからすれば、堂々と使命を果していたことが判る。そして橘吉重は釘なしで滑り落ない瓦を考え、それが南大門に残っていたことは、瓦の不振時代にあっても静かに生長力を貯えていたのである。

桃山時代になって戦国武将によって城に瓦が使用されたしたし、瓦は呼吸（イキ）を吹き返して、需要は急増した。防水と防火の実用性と豪華な装飾性の再発見であった。大名もお抱え瓦工を置くようになり、需要が多くなるにつれ瓦請負業も盛んになった。急を要する城普請には、寺の瓦大工も動員されたり瓦請負人は注文に応じて船で運べる土地には堺の港などから積み出した。また奈良や京都、伏見や堺などの瓦職人が各地の城下に出向いて現地で製造する場合が多くなった。織田信長による安土城は、近世城郭の最初を飾るものであると共に、瓦にもいろいろな意味で特記すべき技術的な改革がある。則ち唐（明）人の一觀の手によるものであり、この時から日本の瓦には布目（ぬのめ）がなくなった。その上に今でも現に見られるような燻瓦（くすべがわら）の製法が伝えられたのでもあった。現代の製瓦方法の基礎が伝えられたのでもあり、それまでの製法よりも良い瓦が容易に安価に出来るのであったから、瓦の需要も広まるべきであった。しかし、当時の庶民の住む屋根は、桃山時代の「洛中洛外図屏風」を見ても解るように、京の商家でも板葺が多く、瓦葺はまだ数える程である。公家や武家の屋根も同様であった。瓦は高い屋根の上にあって、見るだけのものにすぎなかった。

（佐藤 敏）

2) 佐久郡妙楽寺考

清和天皇の貞觀8年（866）に信濃の伊那郡寂光寺・筑摩郡錦織寺・更級郡の安養寺と埴科郡の屋代寺と共に佐久郡の妙楽寺が定額寺となつた。これらの定額寺は建立は本願主の個人の意志によつたのであるが、後に公けと結合したことを示している。

『信濃地名考』下の佐久郡地名考によれば、明樂寺廢清和天皇貞觀8年佐久郡妙楽寺預定額百丁とある。この外に以上の様な時の政権とは全然関係なく純粹な信仰上から建立された寺院もあった。佐久郡に現存する寺院の由緒を見ると、その古いものは奈良時代の末から平安時代の初頭にかけて開創されたとするものが多い。これによって佐久へ仏教が入って寺院の建立が行なわれようになつたのは、奈良時代のいわゆる平野仏教から、天台・真言、の両密教が開宗されて、山岳仏教が始められてから後ではないか。

津金寺・釈尊寺・真楽寺・無量寺等々の郡内の古寺すべて密教でその遺物・遺跡などから見る

と神仏の混淆はもちろんのこと特に修驗的な色彩が厚い。佐久に於て天台古寺で学問的色彩の強い津金寺においてさえ、この寺が明らかに天台宗と確定したのは元亀間（1570頃）であるということを伝えているところをもってすれば、古代に於ける佐久の仏教は加持祈禱を主としており現世的で現在の台密々教よりは、修驗的性格を多分に持っていたとも思える。

佐久郡内でこの期に開創されたといわれる由緒を持つ古寺では、小沼の真楽寺（真言宗）三井の明泉寺（天台宗）を除けば、津金寺、釈尊寺、無量寺のいずれも天台で多くは御牧ヶ原を中心として周囲に分布している。これら天台宗に属するものが多く由緒の中には滋野氏、望月氏などの官牧に關係をもっていたと思われる地方の豪族に閥りのある寺院が多い。これから見て佐久郡に於ける初期仏教の移入に力を尽した外護者は滋野氏の一党で貢馬のために年々定期に上京してその度に見聞する新しい宗教、新文化を代表するこの派の仏教に魅せられ、これを郷土へ移入することにつとめたのではないだろうか。

これに対して真楽寺によって代表される真言宗には、このような有力者が保護に当った形跡が認められない。かつ、その縁起や由緒によると現在よりはるかに高い浅間山中腹に堂を造ってこれにこもり、行を事として加持や祈禱を行なったという。修驗的色彩が前者より一層濃厚でこれらの点からこの宗派は時の権力者の力によらず、自己のもつ宗派の性格によって、地下にその宗教的地盤を扶植して行ったのではあるまいか。真楽寺が元来無本寺であり、この地方に30余の末寺等を有したなどは、この事を暗に示している。

註日本三代実録

点観8年2月2日の条

周防畠遺跡附近の渋エ門・周防畠地籍に於いては現在布目瓦の表面採集が出来る程に瓦の破片が散乱されているのであるが、現長野吉田工業・千曲錦酒造・櫻山工業などはその散乱されてい上に建築されている。

貞觀8年（866）に信濃の国内の他四ヶ寺と共に定額寺に列せられた佐久郡の妙楽寺は未だその所在が明らかでない。

現在妙楽寺という寺号を持っている寺院では佐久市内下塙原の名覚山（昔は明覚山）妙楽寺である。この寺は今は新義真言宗で智山派に属し、京都智積院末となっているのが、以前は新義真言宗の浅間山真楽寺末であった。今までに2回の火災にあっているといい、創建の時と所が全く不明である。第2回目は文禄年中（1592）頃でこの時は現在の下塙原部落の西南方孤塚古墳の北側にあったという。

この両度の火災で旧記の全部を失ったので検すべく資料は全然なく、そして現在の寺院は宝永3年（1626）の再建になり、本尊は薬師如来で、愛染明王がその前立本尊となっている。

廷喜式の佐久郡妙楽寺は廷喜の官通が開通する前の東山道の想定線にそっていたのではあるまいかという想定、これと妙楽寺の当時のものとの関係つける資料は今のところ知られていない。

2度目の寺院跡と称せられるところは市内鳴瀬の舟久保に近いこの附近は、現在中仙道が開通する以前の道路が通っていた所であると伝えられている。朝廷が東北地方の荒吐族に備えるために開通した軍用道路が東山道すなわち廷喜式の官道で、これによって国土の統一をなしおえた後は国内状勢の変化に伴なって畿内と関東、特に鎌倉との交渉が繁しくなって行った。これに供される道路には、街道に対して山道すなわちの中仙道にあたる道路がなくてはならなくなる。奥羽に向かった東山道に対し、関東とを結ぶ中山道である。この新しい道路が設定されるまでには幾多の道筋の試行や改革がなされたに違いない。また廷喜時代の官駅や江戸時代の宿場の如く宿駅の制度が確立して一定の場所に中継所が定められて、ここを順次に連絡して行くといった規則によらない時代にあって見ればその目的地に達するには種々便利な方法がとられ、本道・枝道・傍道・近道などの多様の道路があったと見てもよい。この道路のうち、そのいずれかがある時代この舟久保附近を通ったのかも知れない。

このような道路附近に名覚山妙楽寺の第2回目の寺地があったと考えるも無理ではない。しかしこれは、時代が中世に下ってからのことである。

平安時代初期に、一定額の官稻を施入されるほどの寺であったとすれば、この寺の本願主は相当な権力と資力を有していたものと考えなくてはならない。

佐久郡内に於ては、このような有力者にはいかなる民族があてられるであろうか。これも今は資料不足で明らかにすることが出来ない。市内佐都の妙楽寺の最初の寺院がいつ、どこの場所に建立されたか不明であると同時に、この寺と定額寺に列せられた佐久郡妙楽寺とを関係付けることもまた現在の所では何等の資料もなくこれまで不明であるが、推論として布目瓦の散布場所と神社、道路の関係からして前記の如く支援者が居たのではないかと思われるが周防畠地域内現千曲酒造KK敷地内から「大井」と銘記された刻書の須恵器片が、表採されている。

(佐藤敏)

参考文献

日本三代実録

信濃地名考

北佐久郡史

四隣薄業

カワラ日本史

3) 布目瓦の発見地名

此の地名は、昭和4年10月、故神津猛氏によってすでに知られている、『信濃に於ける布目瓦発見地名表』と題し、「信濃考古学会誌」の第1年第2号に33ヶ所、同年12月の同誌第3号に5ヶ所の合計38ヶ所が追加発表された。

昭和26年、池田米寿、木内捷、佐藤敏、井上行雄（敬略）によって佐久市大字長土呂字渋右衛門、向畠、周防畠地籍にて表面採集し、その後、昭和46年佐久市埋蔵文化財調査報告の時に再度の表面採集があり、同年の報告書にその拓影があると同じに、須恵器の椀底部の破片内側に「大井」と刻銘されてあるものも参照されたい。

今回の発掘調査に当っても、この個所から数片の布目瓦の発見があったので併せて参考までに別記の分布地を記載し、今後の布目瓦の研究に供したいと思います。

紙面の都合により分布地名のみ記載します。

1 北佐久郡本牧村	茂田井区天神反	20 上水内郡長野市	善光寺、本堂邊
2 北佐久郡北御牧村	八重原区中八重原	21 上水内郡長野市	塔ノクボ
3 北佐久郡北御牧村	八重原区古屋敷方	22 上水内郡長野市	大峯山麓、高岡
4 小県郡県村	加沢区、若宮	23 上水内郡長野市西長野	市営住宅前
5 小県郡丸子町	上丸子区、大狭	24 上水内郡上郷村	
6 小県郡神川村	国分寺区、仁王堂屋敷	25 上水内郡若槻村	田子区、東沢
7 小県郡上田市	房山、菊桜長者跡	26 上水内郡若槻村	田子区、カシヲナシ
8 小県郡上田市大星河原	道祖神、海禪寺裏	27 東筑摩郡松本市	筑摩、高等学校附近
9 小県郡上田市大星河原	日蓬寺跡	28 東筑摩郡松本市	埋橋
10 小県郡泉田村吉田	字東村、西村堂地畠	29 東筑摩郡浅間村	浅間温泉、大音寺跡
11 小県郡西塩田村	天子塚附近	30 東筑摩郡塩尻村	古町、大子堂
12 小県郡西塩田村	前山区、宮原	31 下伊那郡座光寺村	元善光寺
13 小県郡西塩田村	野倉区、長者畠	32 下伊那郡龍岡村	上川路区開善寺境内
14 小県郡別所村	北谷	33 下伊那郡龍岡村	駄科区 ガリマタ
15 塙科郡坂城町	社宮寺、小学校裏	34 更級郡川柳村	寺屋敷跡
16 塙科郡坂城町	御所沢	35 塙科郡雨宮県村	生仁
17 塙科郡坂城町	日名沢	36 塙科郡雨宮県村	土口北山尊照寺
18 塙科郡南條村	南條觀音	37 更級郡八幡村	高圓寺焼跡
19 塙科郡雨宮県村	正法寺	38 北佐久郡小沼村塩野	



1 周防畠遺跡遠景（北方に浅間山を望む）

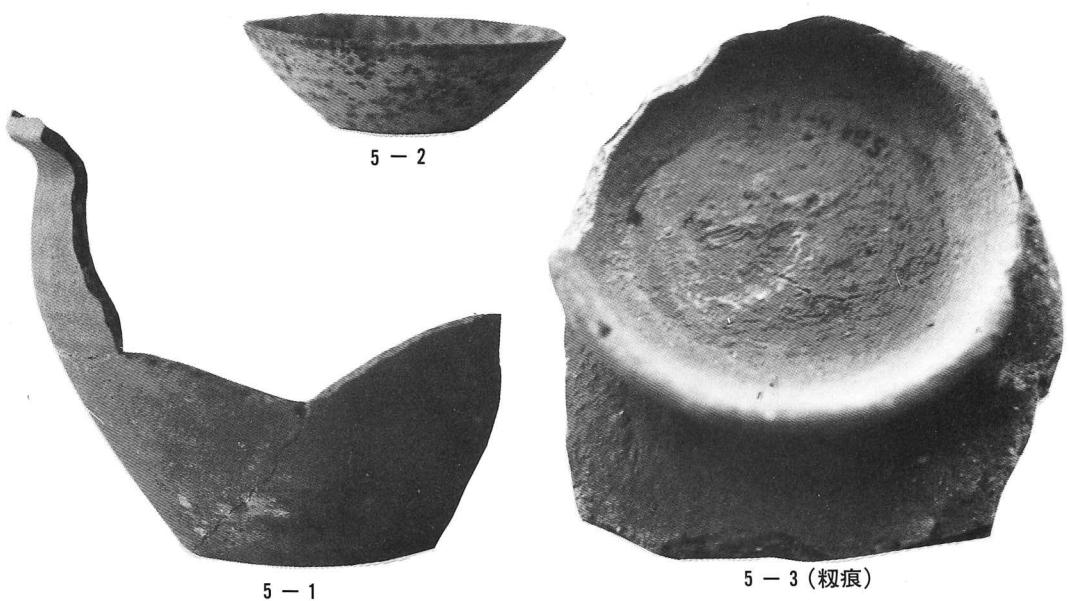


2 周防畠遺跡の遺構全景（前より3・4号、5号、1号2号）

図版二

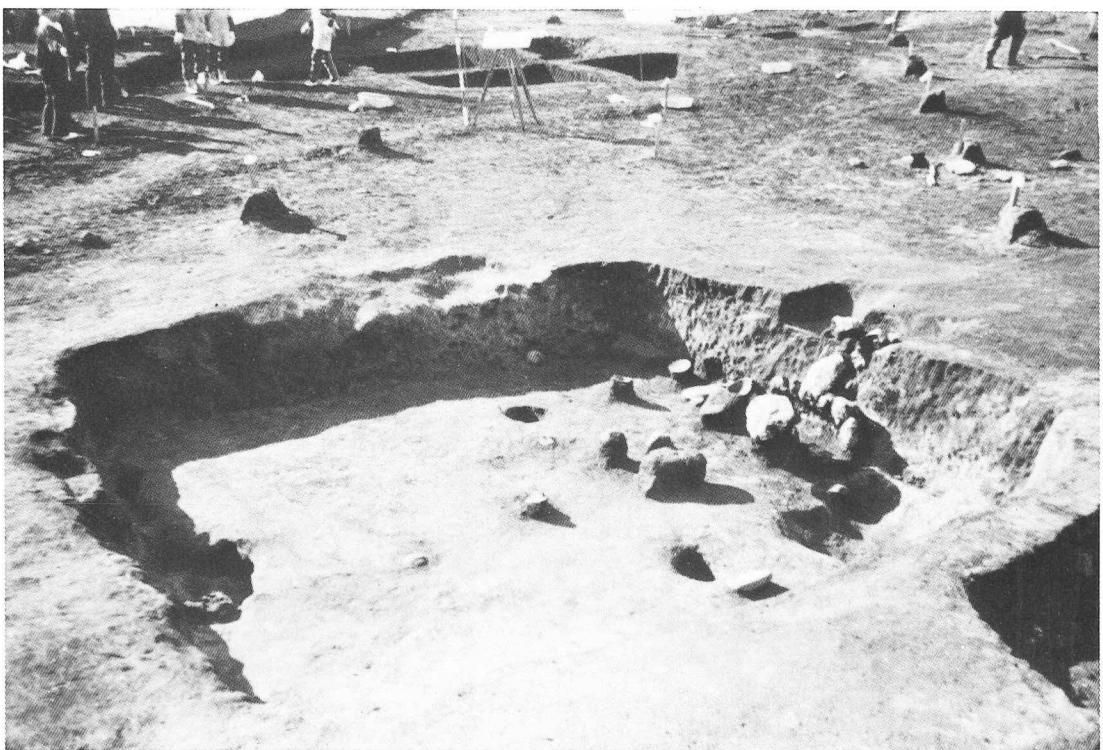


1 H 1号住居址



2 H 1号住居址の出土遺物

(番号簡略、5-1は第5図のNo.1)

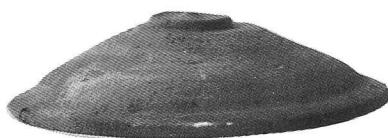


1 H 2号住居址



2 H 2号住居址カマド

図版四



8-1



8-10



8-4



8-12



8-5



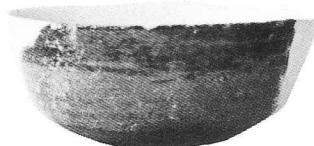
8-13



8-6



8-14



8-7



8-15

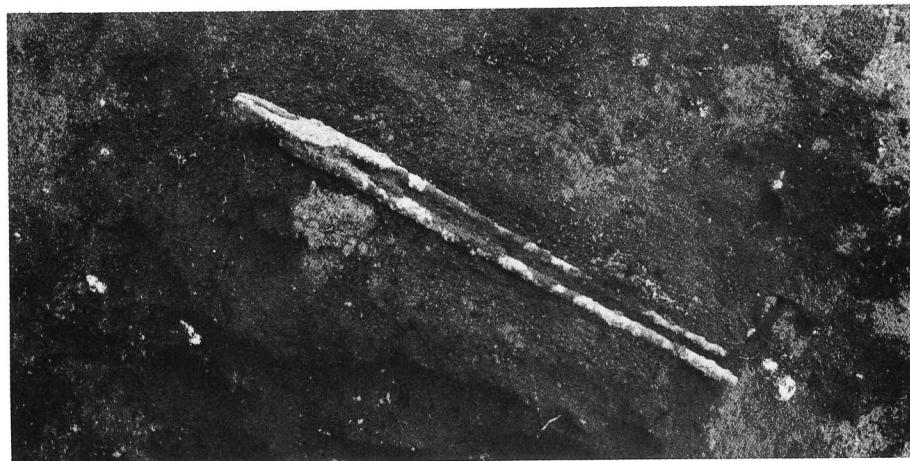


8-9



8-16

H 2号住居址の出土遺物



H 2号住居址の遺物出土状態

図版六



1 H 3号住居址



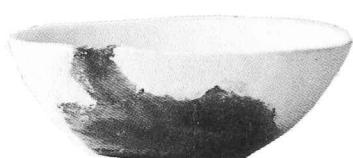
2 H 3号住居址カマド



11-1



11-4



11-5



11-2



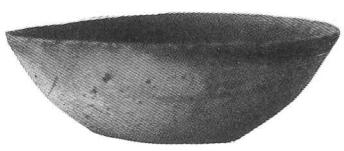
11-6



11-7



11-3



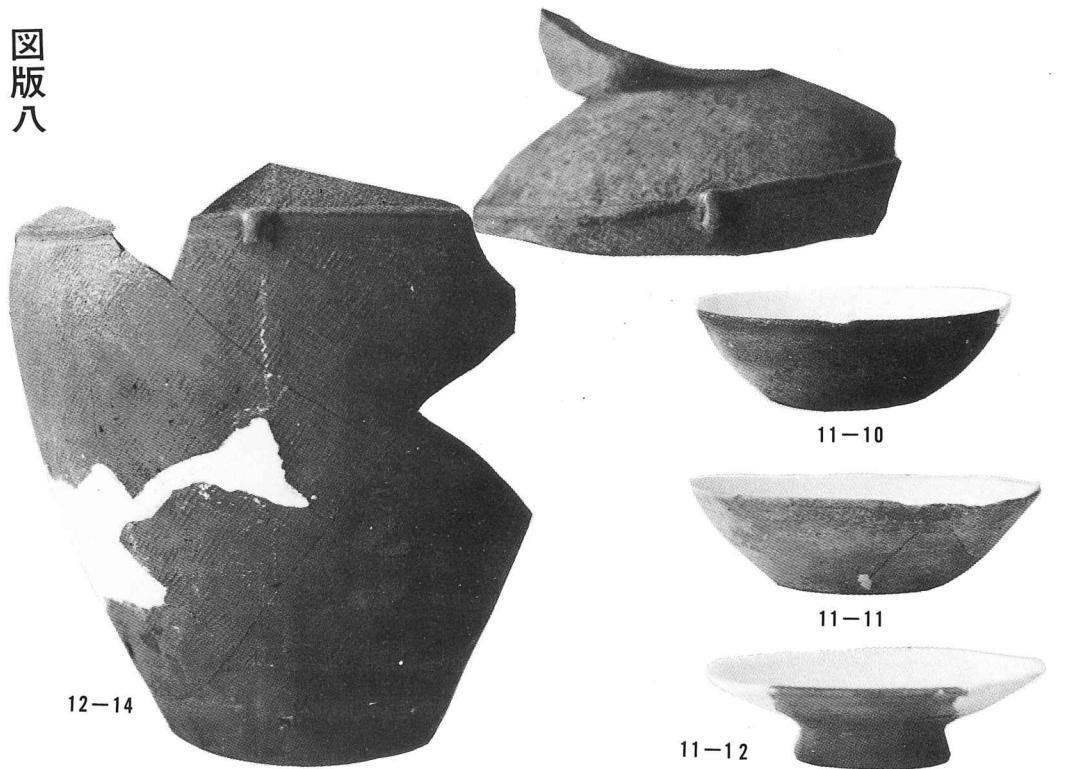
11-8



11-9

H 3 号住居址の出土遺物（1）

図版八



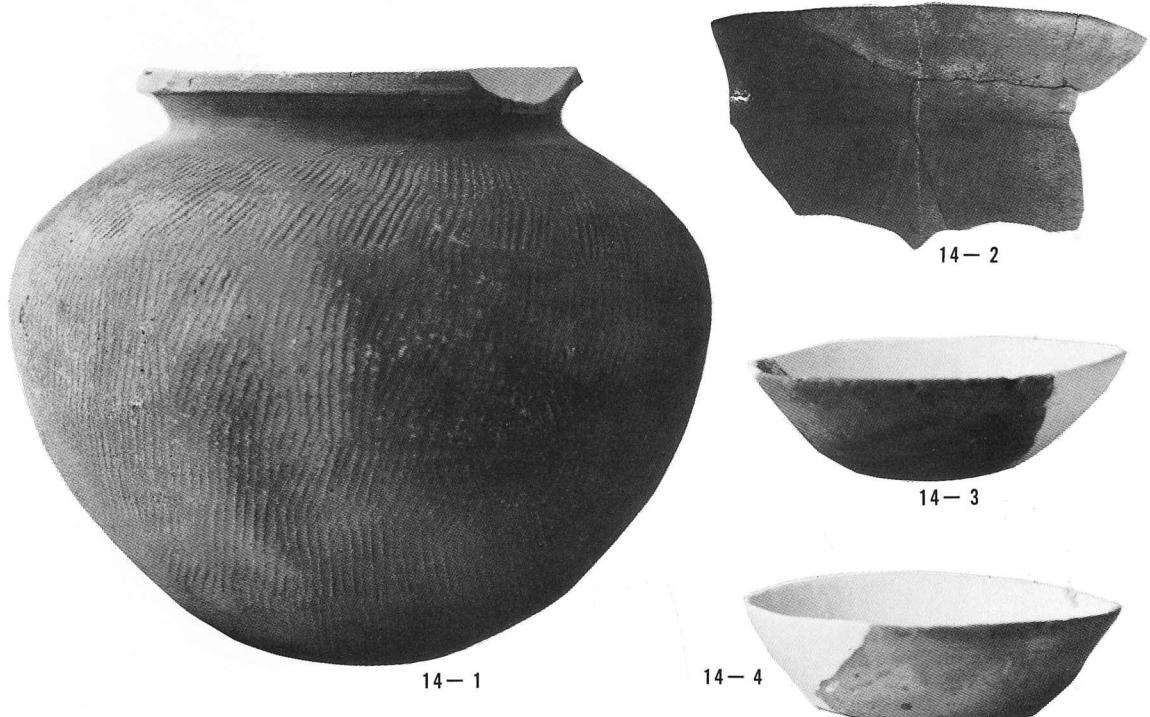
1 H 3号住居址の出土遺物（2）



2 H 4号住居址



1 H 4 号住居址の遺物出土状況

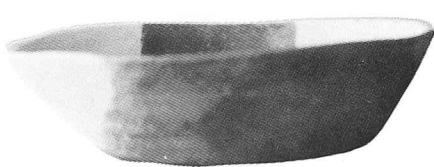
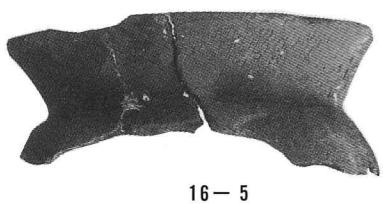
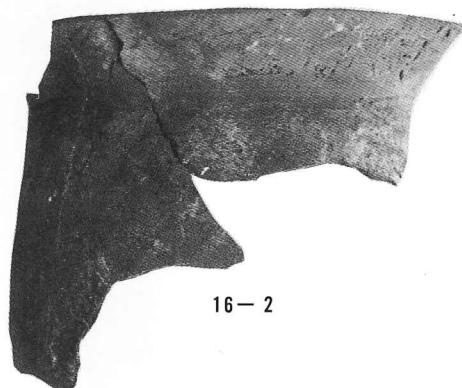
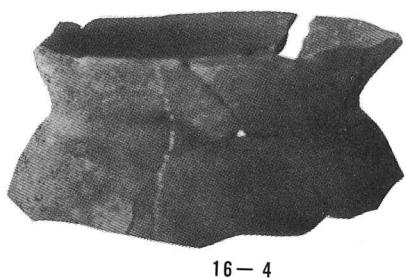
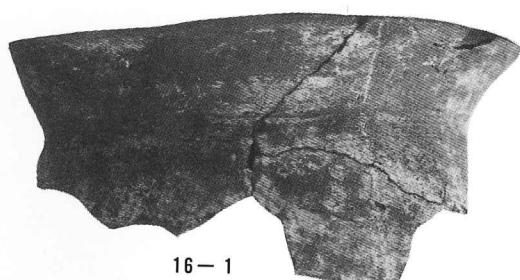


2 H 4 号住居址の出土遺物

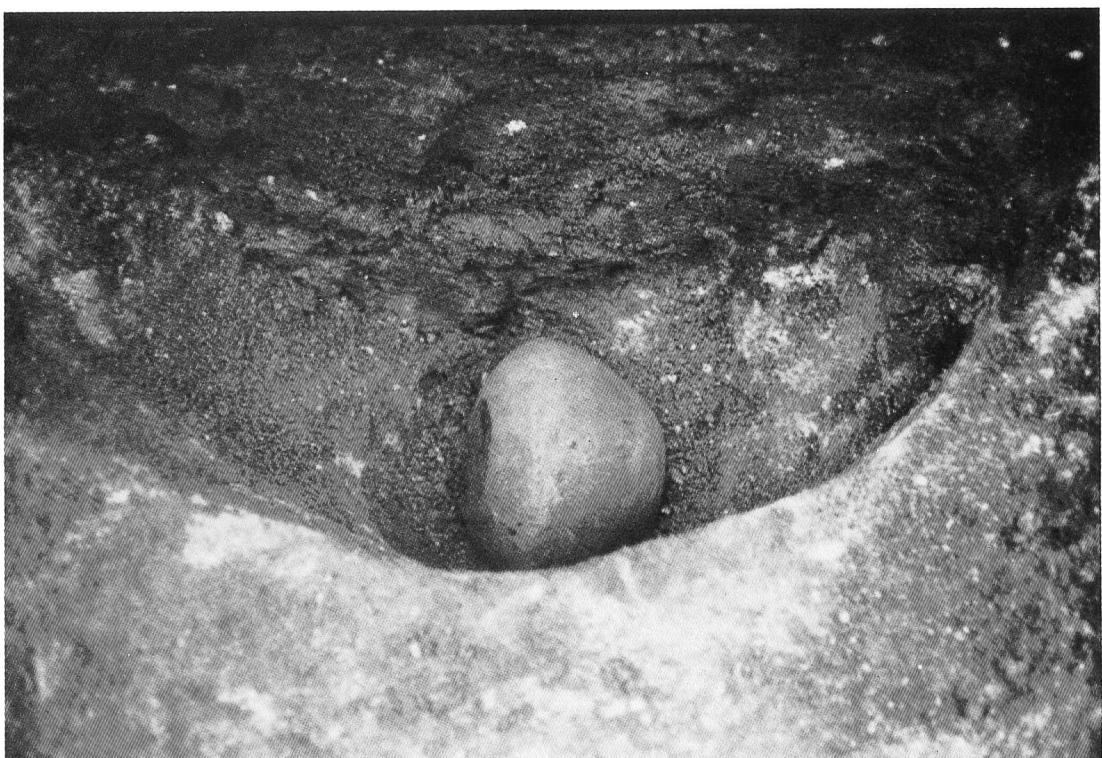


2 H 5号住居址とカマド煙道

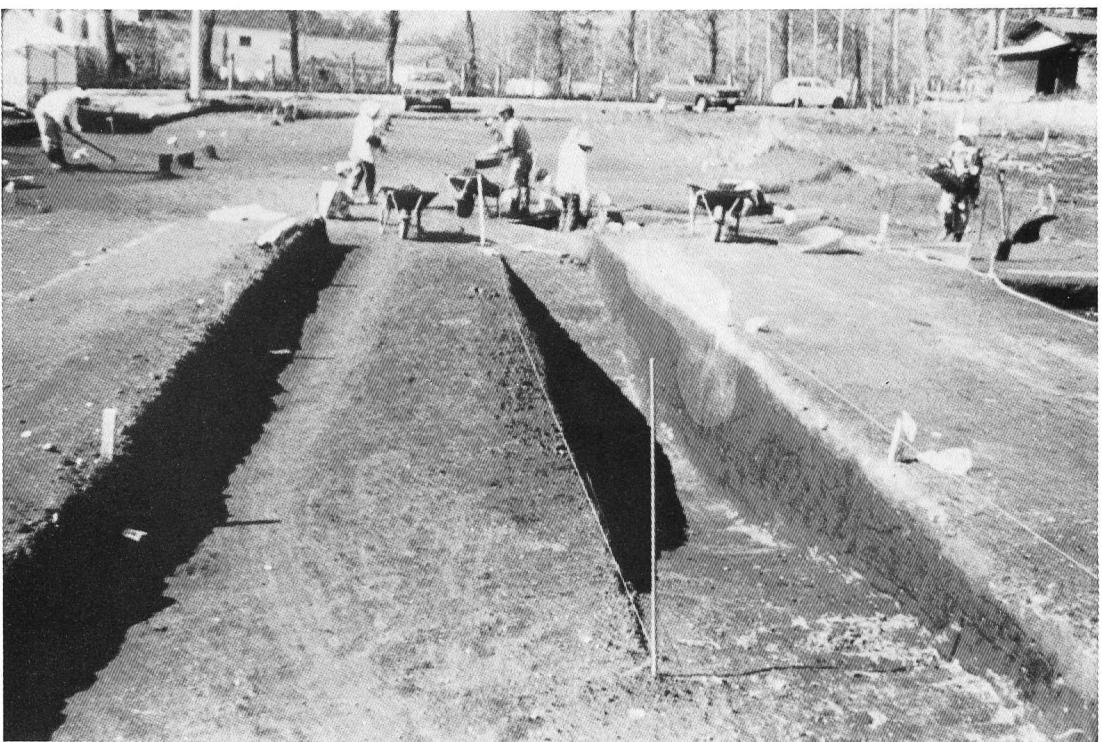
図版十一



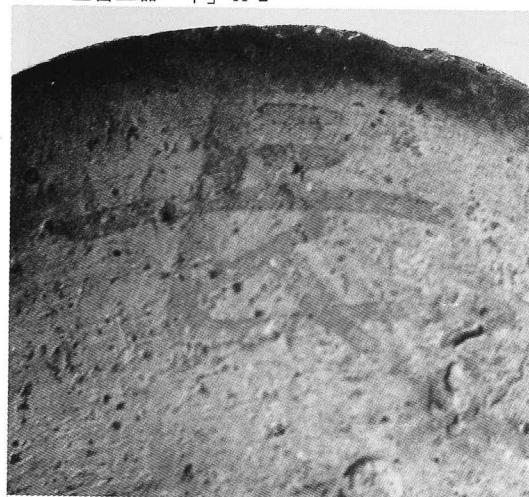
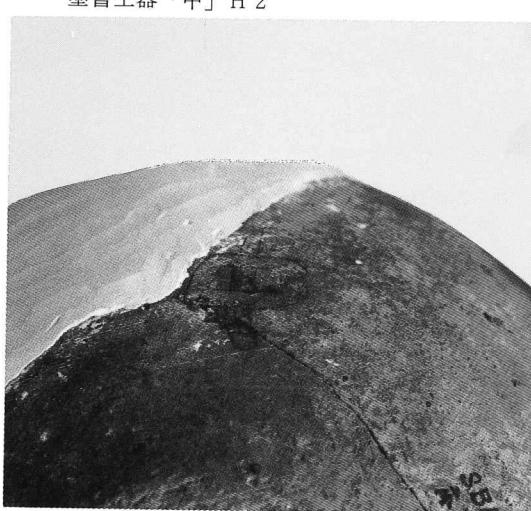
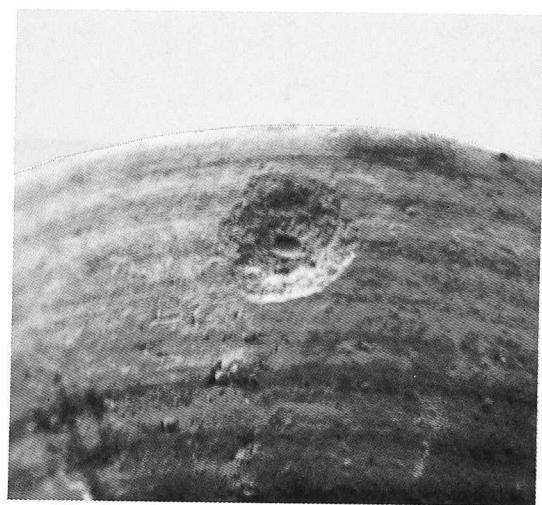
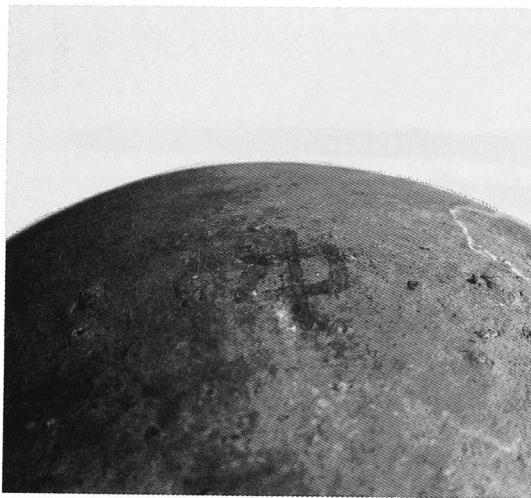
H 5号住居址の出土遺物



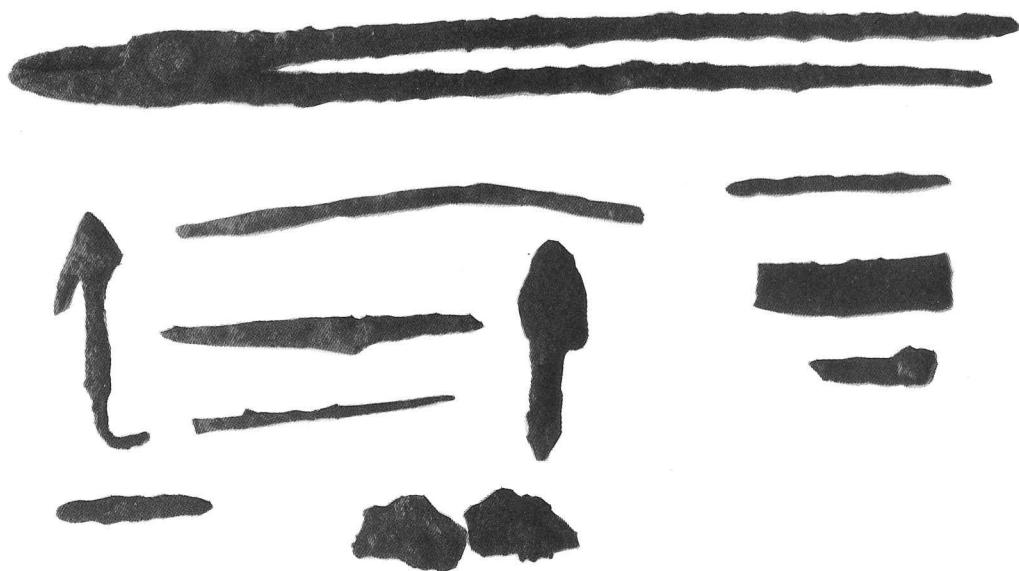
1 H 5号住居址の遺物出土状態



2 溝状遺構サブトレンチ（住居址群の東側より検出）



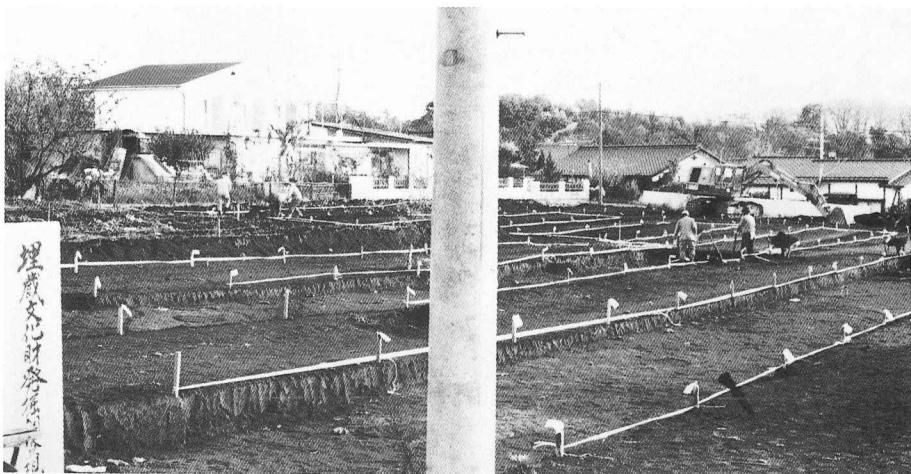
図版十四



1 周防畠遺跡出土の鉄器

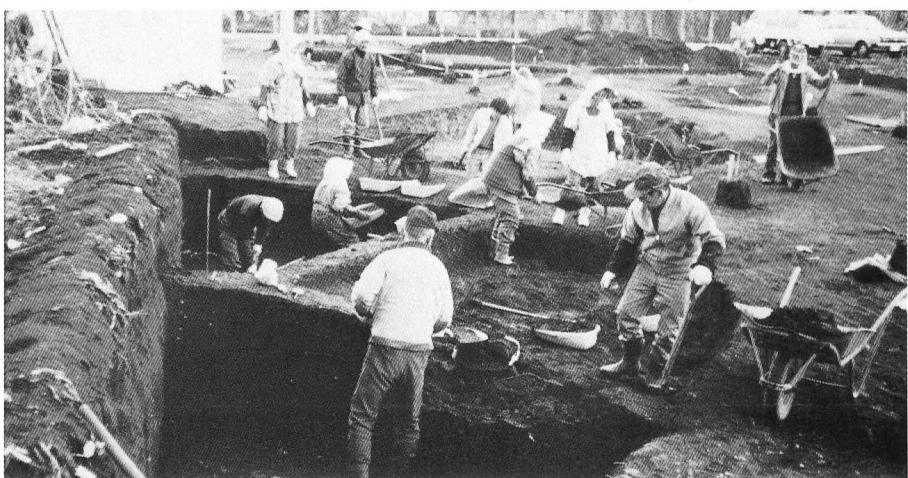


2 周防畠遺跡調査団



調査の鍵入式及びグリッドスナップ

図版十六



各居住址内での調査スナップ（上段 1・2 号，中段 3・4 号，下段 5 号）

周防畠遺跡

長野県佐久市緊急発掘調査報告書

発行日 昭和55年6月発行

編集 佐久考古学会

発行 佐久市教育委員会

印刷 株式会社 佐久印刷所